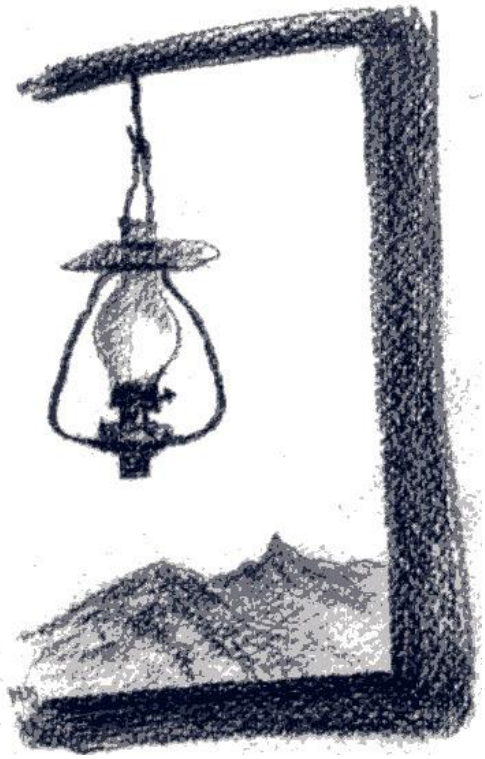
山嶽寮

甲南山岳会通信第６４号　　２００９年１０月



甲南山岳部・甲南山岳会

“山 嶽 寮” 甲南山岳会通信第64号 2009年10月

伊藤愿先輩の遺稿集に接して ——松方恭子さんへのお礼状—— 関 集 三 ‥‥ 1
山本恵昭君がチベットに行きます 大 森 雅 宏 ‥‥ 3

追 悼

奥山正雄君を偲んで 国府雄次郎 ‥‥ 5
追悼－奥山正雄さん 小 川 守 正 ‥‥ 7
山岡静三郎さんのこと 伊 藤 文 三 ‥‥ 9
柳澤正君の思い出 中 井 久 夫 ‥‥ 11
追 憶 阿部、柏、柳澤、三君をしの 小 原 耕 治 ‥‥ 15
追 悼 柏 秀樹君を偲んで 砂 川 彰 雄 ‥‥ 18
柏 秀樹君の思い出 田 邊 潤 ‥‥ 20
田口二郎さん あれこれ 宗 實 慶 子 ‥‥ 25

紀 行

パキスタン ---- 辺境の峠 雨 宮 宏 光 ‥‥ 27
カムチャッカ紀行（アパチャ山登頂） 広 瀬 健 三 ‥‥ 32

論 考

日本の山登り 雨 宮 宏 光 ‥‥ 34
報道から山を語る五章 雨 宮 宏 光 ‥‥ 43

随 想

パタゴニアの雲丹 越 田 和 男 ‥‥ 51
ヘギソバとイゴと安曇節 飯 田 進 ‥‥ 53
権兵衛峠と伊那節のこと 鈴 木 頼 正 ‥‥ 55
部員不足問題に関連して 広 瀬 健 三 ‥‥ 56
30年ぶりに山へ行ったら‥‥ 大 柳 香 代 子 ‥‥ 57

山行-報告

神戸大学カンリガルポ学術登山隊 剣北方稜線トレーニング合宿記録 （ホームページ掲示板書き込みから） 山 本 恵 昭 ‥‥ 60
08夏・報告書（夏山個人山行-穂高にて） 谷 勇 輝 ‥‥ 62
文登研（登攀）-剣岳周辺にて 谷 勇 輝 ‥‥ 65
甲南高校山岳部年間活動報告 2005年度-2007年度 活動報告 神 戸 謙 司 ‥‥ 67

甲南山岳会・山岳部の歴史 2008年4月改 ‥‥ 79

会員短信

秋の集会、定時総会・慰霊祭への出欠はがきから ‥‥ 82

報 告

秋の集会 木曽福島 ‥‥ 91
定時総会 ‥‥ 92
慰 霊 祭 ‥‥ 94

表紙題字： 故香月慶太氏
カ ッ ト： 故 柏 秀樹氏

伊藤愿先輩の遺稿集に接して

― 松方恭子さんへのお礼状 ―

関　集 三（昭和 10 旧理）

謹啓　敬老の日も過ぎ、朝晩多少凌ぎ易くなって参りました。

さて、先日は甲南山岳会長の武田雄三様を通じ、貴編著「妻におくった九十九枚の絵葉書」（注1）有難く拝受いたしました。ご芳情に対し先ず以て厚く御礼申し上げます。

老生、今春満九十三歳を過ぎ、書中に記しておられる山岡靜三郎さんより一年の先輩で、多分一番の老人となっております。

御著中の第五信・五月一六日の中に記述されている大島寛一さん（注2）は小学校（神戸・御影第二）の一年先輩で、同氏の父上（注3）、母上、御兄弟はよく存じ上げ、三男の輝夫さんは、老生阪大理学部教授の時代に、私の研究室で研究、卒業後住友化学に入社され、山岡さんと同じく化学畑での仕事をされ、現在は化学危険物研究所の所長。しばしば今日も訪ねて下さる阪大山岳部の OB でおられます。

同書314頁の昭和5年7月に記載されている現役の涸沢合宿に参加した折、初めて父上・愿先輩にお眼にかかりました。その節、始めて穂高行に参加した同級の伊藤新一、佐山好弘と私の三名を、奥穂ジャンダルムに連れて行って下さいました。私がそこで萬年筆を岩の間に落としたのを、それこそ必死？になって、顔汗を流して拾い上げて下さった愿さんの逆立ちのお姿、その後輩を助けて下さった態度は今日も私の目に焼きついております。

その夏山では、田口二郎先輩と共に北穂滝沢側の第3尾根の初登攀に成功し、翌年は前穂第3峰の岩壁にも成功しました。また、冬期に上高地入りし、奥穂高のコブ尾根、畳岩の岩壁もアタックした想い出がよみがえります。春の白馬・南股の合宿がハッキリ記憶ありませんが、山岡さんと共に山スキーを教えていただきました。

高等科に進んでからは、鹿島槍の「カクネ里」或いは剣岳「三ノ窓のチンネ」など、愿先輩の姿をいつも思いつつ登山させていただきました。田口一郎、二郎さんとよく登りましたので、その故一層愿さんの事がいつも大先輩として、雲の上の人として尊敬していたからと存じます。愿さんの訳書、パウル・バウアーの「ヒマラヤに挑戦して」を読ませていただき、また、愿さん作詞の甲南山岳部の「山の歌」「雪の歌」は、しばしば年を取ってからも、湯舟につかった気持のよい時口ずさみます。

阪大理学部教授時代は阪大ワンダーフォーゲル部部長を永年つとめましたのも甲南時代の山岳部での青春の故と存じます。ヨーロッパ遠征の初めてのスケジュールにも参加しました。

九十九の絵葉書に記載の各地の八割方の地方には、老生も国際学会の出席の度に訪ね、チロルの山々、イタリアのコルチナ・ダンペッツォ、ユングフラウヨッホなども訪ねましたので、懐かしい文章を繰り返し読ませていただきました。その度毎に若き日、山を通じての生活、純粋な思考をかみしめており、それ故に学者生活をした一つの理由かと追憶いたしております。多くの美しい写真を見せていただき、親子の絆の深さをご教示下され、有難うございました。

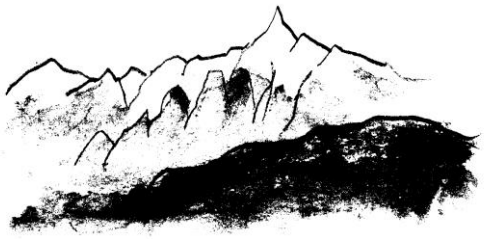
御礼状が遅れ失礼いたしました。末筆になりましたが、どうかくれぐれもご自愛第一の人生をお過ごし下さいませ。

松方恭子　様

平成20年9月　敬白

関　集三

（注1）　松方恭子編「妻におくった九十九枚の絵葉書－伊藤愿の滞欧日録」
清水広文堂書房　2008年7月発行
（注2）　神戸一中時代に甲南山岳部とよく山行を共にされた
（注3）　大島堅造氏　：　元住友理事・甲南大学経済学部教授
著書に「山の古典と共に」など



山本恵昭君がチベットに行きます

大 森 雅 宏（昭和 53 文）

「シゲアキ、来年の 11 月ひと月休み取られへんか。神戸大が中国に遠征隊を出す予定や。平井先生から、甲南から誰かメンバーはいないかと声をかけてもらってる。キミどうや」。

おととし（2007 年）11 月、谷君が参加した同志社のクビ・カンリの報告会でのことです。雨宮さんのこの言葉で山本恵昭君（昭和 56 年理学部卒）のチベットが始まりました。

山本君はこの秋、「神戸大学・中国地質大学カンリガルポ山群合同学術登山隊」に参加してチベットへ出発します。登山については彼から改めて報告となりますが、休暇取得のことや準備の経過など、私が知っている範囲で動きをご紹介したいと思います。

さて、突然の雨宮さんの言葉に、「そんな時期に長い休みは無理」と答えた山本君ですが、その後も雨宮さんから連絡があり、次第にこの遠征計画が気になってきました。しかし、職場にそれだけの長期間、穴を開けることはあまりに困難です。でもチベットは魅力的です。一応ダメ元で、当時の職場の上司に「こんな話があるのですが・・・・」と相談してみました。

すると意外なことに、「ええのんちゃう。そんな機会はめったにないやろ」と前向きな返事。相談し甲斐のあるボスです。しかし、この時点で異動の話が。異動希望のキャンセルも検討しましたが、それはできないとのこと。「異動先の責任者にも伝えておく。何とかなるやろ」。相談し甲斐があってかつ楽観的なボスに恵まれたことは幸運でした。

山本君は「休みが取れるかも」と雨宮さんに報告。雨宮さんから平井先生へ。話がとんとん拍子に進み、3 月に神戸大のメンバーと初顔合わせとなりました。

年度が変わって、2008 年度。彼は異動になりました。新しい職場に旧知の人がいたおかげで「是非行っておいで。行っている間はなんとかカバーするから」と大きな支援が得られました。同僚の支援を背景に、新しい職場の上司の理解も得られました。チベット休暇は「ご破算」にならず、「継続」。

山本君は「なんとかうまく進みました」と涼しげに言っていましたが勤務先の理解を得るのは大変なことだと思います。企業風土も関係しますが「普段の積み重ね」の賜物なのでしょう。

登山隊の打ち合わせやメンバーとのゲレンデトレーニングが頻繁に行われるようになりました。5 月には白馬主稜・杓子双子尾根に出かけています。

ところが連休のあと 5 月 12 日、中国四川省で大地震が発生。3 月からオリンピックにかけてのチベット騒乱も影響しました。神戸大はこの年の派遣を見合わせ、計画は 1 年延期されました。

ここでチベットを巡る神戸大の活動を紹介します。

1986 年　チベット自治区にあるクーラカンリ（7,554m）初登頂に成功。これは当時未踏峰では世界第 2 位の高さでした。この成功を機に、神戸大はチベットでの継続した登山活動を視野にいれ中国との登山・学術交流を発展させてゆきます。

1988年　四川省にあるチェルー(6,168m)の初登頂に成功。(中国地質大学と合同)

2003年　チベット自治区にあるカンリガルポ山群に学術登山隊を派遣、最高峰ルオニイ(6,884m)の登頂を目指しましたが、悪天候に加え非常に困難・危険な山容のため登頂断念。

2007年　2008年の本隊派遣に先立ちカンリガルポ山群に偵察隊を派遣、アタ氷河の三姉妹峰の一つ、中央峰KG-2(6,650m)の登山ルートを明らかにしました。(中国地質大学と合同)

2008年　大地震などのため計画を延期。

さて、話を山本君にもどします。

地震などの影響で計画が1年延期になりましたが、異動先での「チベット休暇」もどうにかうまくいって準備は継続します。11月御嶽山、12月爺が岳東尾根、今年になって3月八ヶ岳阿弥陀岳北稜・赤岳主稜、5月剣北方稜線と、トレーニング合宿を重ねています。また、8月14日～16日剣真砂沢周辺、9月20日～23日富士山とトレーニング山行が予定されています。

彼によれば、「息子と同じ世代の現役大学生と一緒に山に入っていると、すばらしい仲間と一生の宝物ともいえる楽しい思い出につつまれた現役時代に戻った気分になっています」と、うらやましくなるようなことを言っています。

カンリガルポ山群のある地域はインドおよびミャンマーとの国境に近く、外国人の立ち入りが厳しく制限されているため、これまでほとんど探検隊や登山隊が入っていない数少ない未探検地域です。

また、クーラカンリの計画段階から数えると20年を越えて中国の関係方面と精力的に交流を続けてこられた平井一正先生は、神戸大学関係の講演会で「人工衛星の飛び交う現在、未探検の地はないように思われているが衛星から見えない3次元の世界はまだまだある。処女峰でルートのわからない山ほど魅力がある。未知なものへのあこがれ、未知を切り開くチャレンジ精神こそ大事なのではないか」と述べておられます。

いまなおパイオニア・ワークを継承される神戸大学山岳会の遠征に、山本恵昭君が登攀リーダーとして参加する機会を得ました。

この登山隊が成功を収めて登頂を報告されることを、甲南山岳会の皆さんと共に心待ちにしています。

計 画 概 要

1. 名 称　神戸大学・中国地質大学(武漢)
　カンリガルポ山群合同学術登山隊
2. 目 的　① カンリガルポ山群のKG－2峰の登頂 6,708m (6,650m推定高度)
　29° 12′ N、96° 41′ E付近
　② 周辺の氷河、地形などの学術調査
3. 期 間　2009年10月上旬－11月下旬
　約50日
4. 構 成

実行委員長	山形裕士	(58)
隊　長	井上達男	(61)
副隊長(秘書長)	山田　健	(54)
隊員(登攀ﾘｰﾀﾞｰ)	山本恵昭	(51)
隊　員	矢崎雅則	(34)
隊　員	近藤昴一郎	(23)
隊　員	石丸祥史	(19)

ほか中国側8名

計画の詳細はＡＣＫＵのホームページ http://www.acku.net/kangrigarpo2009/kangrigarpo2009.html をご覧下さい

ー追 悼ー

奥山正雄君を偲んで

国 府 雄 次 郎 （昭和 12 旧理）

奥山君と私はお互いに八十年近くの珍友でした。七年制甲南高校に入学後、直ちに山岳部に入部。槍、穂高、剣、立山、後立山と夏に冬に山行を共にした記憶は鮮明と茫漠入り交じっております。

甲南卒業後は理系大学でしたので、長期休暇を取り難くなり、戦争時代に突入。私は登山関係の資料を全部焼失してしまいました。

他方奥山君はいよいよ不可能になる迄何とか無理して登り続けたようです。その後悲喜劇を経て、我々は年を取り過ぎました。甲南卒業後奥山君と山行を共にしたはずの共通の知人も彼御本人も皆他界。今となっては奥山君の登山データーを知るには多数の文献の中から捜し出す以外方法はありません。それは今は御勘弁願いたい。

ただ登山データーに直接関係の無い事なら二三話題は在ります。戦前甲南山岳部員は芦屋のロックガーデンで岩登り技術を鍛え、技術の高さ・高所無恐怖症（本当は鈍感）で有名であり、子供みたいなのが落ちれば千尋の谷の岩場を軽ろやかに動き回り、新米ガイド訓練の手本にされてゐたようです。特に奥山君は最優秀模範でした。

しかし親の経済力のおかげで持ちこんだ贅沢な輸入装備品と食料は周辺に迷惑をかけました。特にコンビーフは山村育ちのポーターに刺激が強過ぎたようです。「山小屋代浮かせのキャンプに必要なポーター労働市場を混乱させる」との学生山岳界の顰蹙の声に永い間気付かず、我々は迂闊でありました。

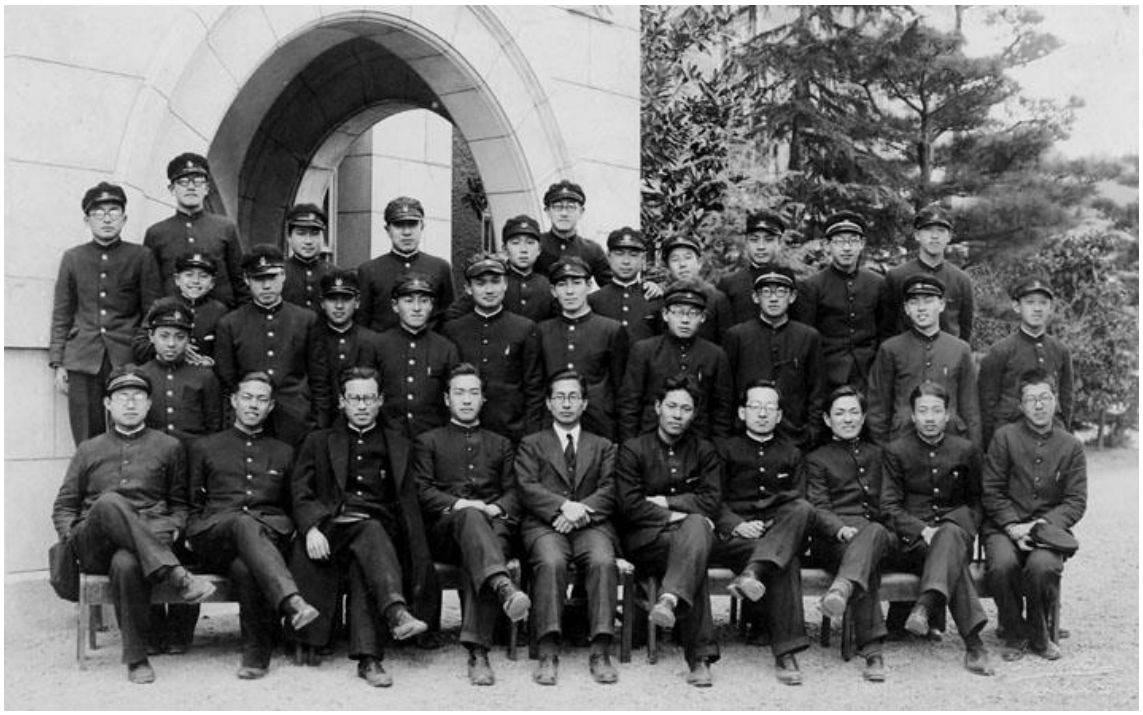
非登山的挿話をもう一つ。奥山君は筋金入りの自由主義者で軍事教練の強硬批判者なので、配属将校にとっては最問題児でした。ある冬我々は厳寒期富士登攀を計画し、国鉄学生割引乗車券が必要でしたが、その券請求用紙発行係りと配属将校は同室で彼は「艱難辛苦に耐え、一朝有事の時は‥‥」というのが口癖の人物でした。用紙を受取りに行けば彼の嫌みな訓戒を覚悟せねばならぬのでしたが、奥山君は「何に使うか？」の質問に「艱難辛苦の厳冬富士登山に使います」と答えたところ「ナッ！何！」の一言のみで絶句したとのこと。「眼を白黒させよった」と痛快そうでした。奥山君らしい一幕でした。

甚だ追悼文らしからぬ文章となりました。元来無宗教の私が常套語合掌を使うのも不自然。ここは冒頭の我流新造語「珍友」の解説で終わらせて頂きます。奥山君と私は文系と理系で、足らぬを補い合う「有難い」関係でありました。「有難い」には「サン・キュウー」の意味のほうが強く在るのかもしれませんが、日本字表現の原義からすれば「存在しにくいつまり珍しい」の意味もある。我々は「感謝し合いながら存在珍しくもある」友であった訳です。

岡本重彦部長退任送別記念

昭和 9 年(1934 年)3 月

(写真提供:国府雄次郎様)



川村三郎　山口雅也　山岡静三郎
伊藤収二　田口三郎　喜多又太郎
中村成三　山口省太郎　水野健次郎
伊藤文三　伊藤新一　湯川孝夫
多田清也　加藤弘三　楠木義明
山口良夫　佐野源一　岡本重彦　部長
山岡康夫　比企　能　近藤　実
島　良之　神澤得之助　足立正夫
鷲尾　顕　喜多豊治　多田潤也
奥山正雄　福井　實　関　集三
国府雄次郎　福田泰次

追 悼 ー 奥 山 正 雄 さん

小 川 守 正（昭和 17 旧理）

奥山正雄さんが亡くなった。

私の最も敬愛する山の先輩である。87才になって、91才の敬愛する人を失うことはなんとも言えない大きな悲しみであり打撃だ。悲しみが先に立って筆が進まないが、奥山さんに最後の声をかける思いで机に向かっている。

私が尋常科2年のとき、一般募集の上高地合宿槍ヶ岳登山に参加したとき高2の奥山さんが指導員だった。それが奥山さんとの出会いだった。合宿が終わって大阪駅で解散したとき、「これから阪神パークにつれて行ったる」と誘われ4人程付いて行ったが、そこで「山岳部に入らへんか」と言われ、私と1年の津山君（だったと思う）がその場で OK した。

奥山さんは、当時文系の難関だった東大経済学部を目指して入試勉強中だったが、よく日曜のロックガーデン行きで、私達新入部員にロッククライミングの手解きをして下さったことを覚えている。

当時奥山さんのクラスには、奥山さんの他に、喜多、国府、神沢、島、加藤さんの5人山岳部が居られ仲々盛んだった。奥山さんは雑誌部の部長で「甲窓」の編集長でもあった。

当時の日本の山岳界はヴァリエーションルート開拓の末期に当たり、奥山さんと山口雅也さんによる剣尾根ドームのバットレス初登攀は、その掉尾を飾るビッグクライムであった。これは池ノ谷右俣からドームを直登する800米に及ぶ岩壁で、その上半は上から覗いても殆ど垂直に近く見える恐ろしい岩場である。これを10代の高校生が登ったのだから驚きだ。奥山さんに聞いたところ「何も覚えていない。死に物狂いだった」とのことだった。

戦争中の奥山さんは大変な苦難の道を歩まれたようだ。昭和6年の満州事変に端を発し日本は急速に軍国主義の途を歩みだしたのであるが、その中にあって東大経済学部は反戦運動の、京大経済学部はマルクス主義の最後の拠点となった。奥山さんは、東大グループの中心人物の1人として司直の弾圧に抗する苦しい闘いを続けられたと聞く。

私は技術系に進み、戦時中は飛行機会社で軍用機の設計に携わり、最後は海軍航空隊にあって、専ら戦争協力に励んでいたので、奥山さんとの間の糸はプッツリ切れ、戦後は東京と関西に住むことで、お目にかかる機会なく20年が過ぎた。

再会は意外なところで始まった。

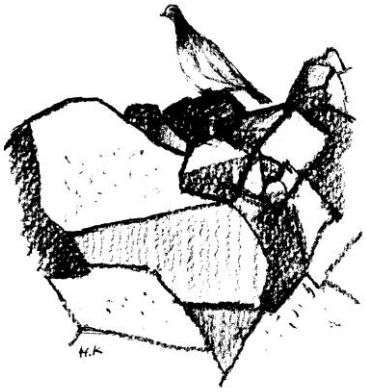
某日、神戸は南京街、さる中華料理店に立ち寄ったところ、奥のテーブルに奥山さんが座っているではないか。「ア、オジンサン」「なんや、小川君やないか」。この日からまた奥山さんと会えることになった。「13回卒業の神戸在住6人で月1回ここで昼食会やってる。最近1人欠けたが、君、よかったら加わらへんか」ということになった。6人のメンバーは国府さん、神沢さん、植田さん、

小林さん、野口さん、みんな50年前の顔見知りであり、うち。4人は山岳部の先輩だ。

こうした楽しい会合が数年続いたが、1人欠け、2人欠け、とうとう奥山さんと、国府さんだけになり、会は解散になった。それから3人とも永らく御無沙汰していた山岳会に出席することにして、また数年間楽しい会合が続いた。奥山さんは「クラス会はなくなったが、山岳会では、孫と会うようなもんやな」と楽しんでおられたが、その奥山さんともとうとう会えなくなってしまった。淋しく、かつ悲しい限りだ。

奥山さんのご冥福をお祈りしつつ筆をおく。

2009 年 6 月



山岡静三郎さんのこと

伊　藤　文　三（昭和 15 旧文）

山岡静三郎氏（昭和11年旧制理科）より頂いた最後の手紙の日付は、2006年10月26日、住所は、東京都稲城市・読売ランド慶友病院となっています。パソコンで打たれ、まず大森雅宏様とあり、一行開けて手書きの『　をつけて伊藤文三様とあります。つまり二人に同じものが送られたということがわかるわけです。その内容は、

山嶽寮：61号（2006年10月）をお送り下さいまして厚く御礼申しあげます。

1）　伊藤愿先輩のことが平井一正様から詳しく紹介されていますので、伊藤愿先輩の未亡人：伊藤房子様が以下の病院に御入院されていることをご報告します。

〒198－0014　東京都青梅市大門一丁目
681番地　青梅慶友病院
☎0428－24－3020

去年 9 月まで私もこの病院に入院していて、時々お目にかかりましたが、こちらに転院して以来ご連絡なかったので昨日確認しました。お部屋に電話が無いのでご本人と話していません。

（編注：伊藤房子様は 2008 年 10 月に逝去）

2）　松タン（青松）先生：福田さんは非常に評判が悪いように言われていますが、私はむしろ尊敬いたしておりました。

今も忘れられないのは“Spring has come”は「春が来た」では無く、「春が来ている」と訳すべきだと強く言われたことでした。

数年後に習ったドイツ語で「過去」は「現在完了」で表示すると習い、あんなに文法が異なる国での共通点に驚きました。　以上

送られてきた山嶽寮 61 号をさっそく丁寧に読まれ、その読後感を送ってこられたわけで、特に2）松タン云々は、私に対するものであるのです。というのは、同じ 61 号に私は「記録の無い山行き」という文章で、福田泰次君と二人で行った昭和11年鹿島槍東尾根紀行を書いており、それに福田君が書いた「誰にも話さなかった昭和11年初夏のこと」という文を引用しており、それに松タンが出てくるのです。

山岡靜三郎先輩が、如何に真面目、几帳面であるかを紹介しましたが、話を戦前に移します。

旧制甲南は7年制高校（尋常科4年＝中学）、高等科3年＝高校）で、山岳部では高等科の部員がリーダー会をつくり、部の方針、山行の企画等を討議して決定していた。昭和9年、その高等科の部員ほぼ全員が治安維持法違反で検挙されたのが、所謂白亜城事件。検挙されなか

ったのは、山岡氏のみ。真面目で学校の受けもよかったので、山岳部のチーフリーダーとなり、山岳部の運営、山行の企画等を引き受け実行された。お陰で尋常科のわれわれは、何の支障もなく山行を実行出来たのです。ちょっと信じられないような話ですが、これは偏に、山岡先輩のお人柄によるものと思われます。山行にはかがやかしい記録はありませんが、甲南山岳部にとってのかがやかしい記録というべきでしょう。

参考 「ホームページ掲示板より」

訃報・山岡静三郎氏　　投稿者:越田和男

投稿日:2008 年 12 月 23 日(火)

今朝の日経新聞によれば、「山岡静三郎氏(元住友化学工業常務)14 日肺炎のため死去、92歳。連絡先は社長を務めた日本メジフィジックス総務部。告別式は近親者のみで行った。喪主は長男、洋一氏。」とのこと。

謹んでご冥福をお祈りします。

山岡氏(旧制昭和11年理科卒)は5年前に入院された青梅の慶友病院で、たまたま同病院に入院中の故伊藤愿氏の未亡人房子さんとバッタリ出遭われ、その出会いが去る8月上梓された伊藤愿遺稿集「妻におくった九十九枚の絵葉書」の出版にいたる発端となった。伊藤房子さんも去る10月に逝去されたが、不思議なご縁で陽の目を見た遺稿集の完成をご両人ともとても喜んでおられたとのこと。

編集の労をとられた松方恭子さんのご努力で、お2人の生前に間に合って本当に良かったとつくづく思う。また、覚えて居られる方も多いと思うが、山岡氏は数年前に、ご自身がカトマンズで入手されたネパール人の著名画家によるマチャプチャレの油絵を甲南山岳会に寄贈されたことがある。この絵は現在伊那松川の雨宮山荘に保管されている。

柳 沢 正 君の思い出

中 井 久 夫（昭和 27 新高）

「リュウ」で通っていた柳沢君が急に亡くなった。3 月 24 日の夜である。ほんとうに急で、意外中の意外だった。ほんの 2 週間前の 3 月 7 日には、甲南寮歌祭に出席して、元気に逍遥歌などを歌っていたのである。そして、4 月 18 日の姫路寮歌祭にも出る予定だった。

追悼記を私などが書くのはおこがましいが、私の学年は、山岳部部室出入り組がたくさんいたのにアルピニストは少なく、その中でほんものの第一はぶっちぎりでリュウさんで、あとはその他大勢だったので、物書きのはしくれである私にお鉢がまわってくるのは止むを得なかろう。許していただきたい。

*

彼も私も旧制甲南高校尋常科最後の入学生である。敗戦の翌年、8 月 15 日から一年も経っていない昭和 21 年 4 月に入学した。すぐ上の学年は日本の運命の窮まった昭和 20 年春の入学組で、たまさかに登校しても、空襲警報と共に裏山に避難して、眼下の大阪湾で日本の艦船が撃沈されるのをなすことなく眺めていたという話である。次の学年は新制甲南中学の最初の入学生である。

私たちは一学年きりの特殊な学年として敗戦直後の世相を生き抜いた。クラスにはれっきとした財閥の坊ちゃんもいたが、財閥解体、封鎖預金、財産税と矢継ぎ早の占領軍主導の政策に加えて、住宅を米軍に接収されたり、労働組合員が家に上がり込んだりして、今からは想像できないほど不自由な生活だったらしい。しかし、また、敗戦直後の一種独特の空気の中で青春を謳歌もした。その余り、他の学年の顰蹙を買っていたかも。

*

白亜の城とは名ばかり、コールタールで汚らしく迷彩されてあり、制服など手に入らず、小学生と違うのは兜に「高」の帽章だけだった。これを一年後に中学の「中」に変えろといわれ、抵抗した。階段の下で待ち構えた和田邦平先生に「高」をもぎとられた。

当時の建物のうち、震災まで残っていたのは本館、東館、西館と渡り廊下。震災で瓦解して、鉄筋が入っていないのがばれた。本館の前には柳の老樹が四、五本。その海側は「東洋一」と称する、チーク材を敷きつめた露天のバスケットコート。その東側に平生先生の胸像、西側はテニスコートだった。南側は鉄平石を敷いて藤棚と池の小公園になっていた。そして、運動場の隅にも登校路にも、昭和 13 年の阪神風水害の岩石土砂がそのままだった。

*

入学早々、絶好の骨休め期間があった。数学のノデマン松田先生と中畑先生とが発疹チフスに罹って休校になったのである。しか

し、梅田、三宮の駅では米軍の指示で、シラミ駆除のために今は毒性のために使用禁止のＤＤＴを頭から振りかけられることになった。

＊

甲南生は、まず通学に利用する線路によって阪急族、国鉄族、そして今はない阪神国道電車族に分かれた。徒歩通学の子は電車通学をうらやましがっていた。

また、学校を中心に、西は石屋川、東は夙川までが中核甲南生だった。リュウさんも私も、その外の東側にいた。リュウさんは宝塚線岡町、私は伊丹線新伊丹からである。ちなみに、小原さんは姫路に近い御着（ごちゃく）から来ていて、通学の最西端だった。

＊

リュウさんも私も阪急族である。当時、阪急神戸線は普通が二両編成（920 型）、急行が 900 型、600 型、900 型の三両編成だった。したがって、かなりの確率で車内で「やあ」となる。リュウさんとは先ず阪急電車の中で話す相手であった。

当時の男の子は声変わりが遅く、私たちは甲高い声で恥ずかしげもなくピーチクパーチクと喋りに喋った。そのうちに、周囲の女子学生に眼が行くようになる。いつも乗り合わせる女子学生とは、いつしか顔見知りになり、姓名まで知れる。総人数の少なさ、列車の短さ、登校時刻のほぼ一致、そして学校の数の少なさ、そして超満員の車内で一緒に揺られてゆく日々であった。もっとも、たいていは、今日は何の何子さんといっしょになったという他愛のない話の種になるぐらいだった。

しかし、リュウさんは阪急族切ってのハンサムボーイだった。その端正さに多くの女子学生の眼がおのずと集まった。神戸線だけでなく、宝塚線にもその名声は及んでいた。

私たちの中には遊び人もいないではなかったけれども、彼は、そういう噂のない人であった。間違っているかもしれないが、彼はたしか、陸上競技部だった。彼といえば、小柄だがっしりとした胸がテープを切っている姿が脳裡に浮かぶ。

＊

ただ、こういうことはあった。私は父ゆずりの襟巻きをしていた。スコットランド製の赤青黄などの格子縞だった。これを貸せという。やがて、リュウさんが六甲にあった天然氷のスケート場で女生徒と肩を組んで襟巻きを翻しつつ滑っていたと噂された。私などには手の届かない素敵な別世界を持っているのだなと感じ入った。北欧の小説の一齣のようである。真偽のほどは保証しないが、彼ならいかにもありそうだと思わせる日本人離れしたものがあった。

彼には西洋人の血が入っているという話が女子学生の中にあったそうだが、これは真赤な嘘である。ただ、テキサスくんだりに滞在していたころ、「よくメキやん（メキシコ人）にまちがえられる」と言っていた。山で日焼けしていたからメキシコ人なのであろう。

＊

学年が進むと、東部の阪急族七、八人が散歩し、友人の家を訪ねあい、時には泊まり

歩くグループを作るようになった。若衆宿のようなものである。私の記憶に残るのは、リュウさんと二人で何かの拍子に遅くなり、大阪駅の東側のガード下のラーメン屋台に寄ったが、お金の持ち合わせが一杯分しかなく、交互に対面の丼の縁から汁をすすったことである。当時の日本は四等国と自嘲していた。

*

しかし、リュウさんのおとうさまは、たしか、神戸商大卒のビジネスマンで、梅田新道の堂ビルにオフィスを持っておられる、戦前からの香水・香料の輸入商だった。同時に、たいへんな本のコレクターであられ、堂ビルのワンフロアが全部、収集書の収納に充てられていたとか。私も、漱石を初め、何人かの作家の原稿を拝見した。もちろん、ていねいな保存法が講ぜられていた。

はるか後、父君の逝去に当たって、リュウさんは、収集をある図書館に寄付したと語っていたが、そのとおり、ある漱石関係の本に「柳沢」の蔵書印がはっきり読み取れる原稿の写真版があった。松山市の図書館蔵だったと思う。

*

甲南高校は、新制高校として出発するに当たり、第一外国語をドイツ語とするクラスを作った。新制高校だけの一時期にドイツ語教師の職を保つ意味があったかもしれない。旧制高校では医学部に進む者を中心にドイツ語が英語と対等だった。新制のC組は希望者が全部で 11 人、全員の 8%ほどだった。リュウさんも私もこちらを希望し、採算度外視で濃厚な授業を受けた。リュウさんがどうしてこのクラスを選んだのかはついに謎のままである。

そもそも、リュウさんは、自分のことをあまり語らない人であったが、高 2 の秋ごろから特にそうなった気味がある。真面目な話には「まあまあ、それは置いといて」「それはいいとして」といなしたり、はずしたりするようになった。今にして彼は含羞の人であったと改めて思う。

この変化は彼が山岳部に入ったころと一致する。仲間でアルプスというものを一度みておこうと大量参加した昭和 25 年の夏山であったが、本格的な山岳部員となったのは彼だけである。やがて甲南大学に入った彼が山に 1 年 300 日いるという記録を樹てたと、畏敬を以って語られるようになった。日本隊が最初の八千メートル峰マナスルに登頂したころのことである。

*

大学卒業後は綿花の買い付けで滞米が長かったはずである。綿花については権威であったという。しかし、クラス会ではそんな話が出るわけではない。話題になった滞米中のこととは、たとえば中学 1 年の英語は、ドンコ小林宣光先生であったが、米国暮らしも商談も「ドンコの英語で充分やった」とかである。外国で働いたクラスメートは皆賛成していた。ドンコ先生は本家本元のオックスフォード・コンサイス英語辞典の誤植を二十いくつか発見して感謝状を貰ったという人であるが、東大哲学科で数理哲学を専攻された方だ

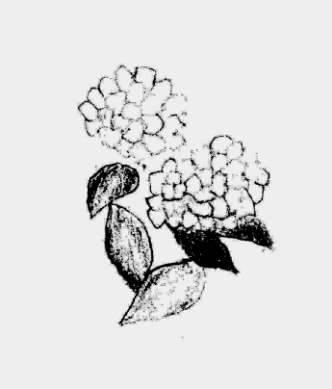
と知る人は少なかろう。

リュウさんによればドンコ.イングリッシュで「商談なんか軽いものや。判らんかったら、おまえ、そこんとこ、もう一度いうてくれ、いえるがな。英語の放送は早口で聞き取れんのや、もう一度言ってくれと言えないしな」。甲南時代から冗談が好きな彼であった。

定年後、地域の自治会長を務めたことがあるらしい。彼の緻密さと巧みな「いなし方」とは、さぞ、役立ったと思う。名自治会長だったにちがいない。

*

定年で自由の身になったクラスメートたちの間で、もう一度、高校時代の付き合いをやり直したいという動きがあった。たとえば、リュウさんも、宝塚沿線の同級生たちを誘って、一緒に銭湯に行き、ラーメンなどを食べ歩きしていたと聞く。とにかく、彼にとっても、甲南時代はかけがえのない宝石のような時代だったのだ。山岳部の総会、慰霊祭にも努めて参加していたにちがいない。彼の最後が、これで最終回という姫路寮歌祭と重なるのは、偶然というにはあまりに出来すぎていると思う。謹んでご冥福を祈る。彼は照れて「そんなの、ええがな」というだろうが。



追　　憶

阿部、柏、柳澤、三君をしのぶ

小 原 耕 治（昭和 31 経）

昨年の夏から今年の春にかけての一年足らずの間に、阿部純一（昭 31 経）、柏　秀樹（昭 32 経）、柳澤　正（昭 32 経）、三人の岳友が卒然として逝った。ここに慎んで三君の冥福を祈り合掌する次第である。

阿部純一君は昭和 31 卒の同期である。卒業アルバムに山岳部部室前で撮った写真には、阿部、島津、私の三人が写っているが、懐かしい青春時代の一コマである。今は二人が逝って、私のみとなって淋しい限りである。

阿部君の柩を、六甲教会で見送った日、教会の鐘の音が、六甲の山裾に消えていった時、「山はいいなあ！」と呟いた彼の言葉を思い出した。秋の山の集会「駒王」での早朝、目が覚めて窓外の薄明の山容を見てのそれであったが、心底より嬉しそうな表情をしていたのが忘れられない。前夜二人は遅くまで話し込んだ。敬虔なカトリック信者である彼が、退職後、丹後半島の山中にある教団の経営する保養施設でのボランティア活動のこと、守護聖人の辿った巡礼道をなぞって旅をした地中海世界での出来事、峠を越える楽しさについて語った。そして又、彼の人生の大部を占める「昭和時代」がどんな時代であったかを改めて知り度いと思って、色々本を読み漁っていることを、情熱的に、しかも静かに語ってくれた。同時代を過ごした私には共感共鳴すること多々あり、時の経つのを忘れて聴き惚れた。普段、物静かな彼の語り口は別の一面を見せてもらい、驚きでもあり、嬉しかった。

閑話休題、今、日本の経済問題について、麻生首相が「百年に一度の危機だ」など言って言葉遊びをしているが、日本が、敗戦の前後、窮乏の極にあったのは僅か 60 年余り前のことである。歴史を知らず、オンバ日傘で育った首相が三代も続くのは困ったものだ。「昭和」はそういう時代でもあった。

「山の集会」 解散後　阿部、柳澤と共に車で紅葉のすすむ信濃の山中をドライブ、その夜に乗鞍高原で宿をとった。その夜は柳澤君も加わったことでもあり話が弾んで、深夜に至ったが、このときの話はどんな話をしたのか不思議に記憶がない。柳澤君と私とが行きつもどりつ、益体もないことをしゃべったに違いない。阿部君は聴き役に回ったのだろうと思う。

翌日は飛騨古川から天生峠を越えた。この日は好天で峠から北アルプス連峰が眺められ、特に薬師岳が光って見えた。越えて白川郷へ下り、白山スーパー林道を経て、福井の町経由帰路についた。阿部曰く「昨日から今日までいくつ『峠』を越えたかなあ?」その数は知らない。

彼が甲南病院に病を得て入院したとの報を得て、リュウ（柳澤）と、ミャント（宮本）と共に見舞ったのはその翌年の夏であった。まもなく元気に

なって退院したと知らせてくれたのは、彼と小学校同期の医師、渡辺博茂君であった。その後、彼と会うことはなかった。残念である。

柏秀樹君、近年住居を東播磨に移し、仕事も多忙であり、体調も今一つとのことで親しく会う機会を失くしてしまったのが、心残りである。

その昔、彼には何くれとなく厄介をかけて来た。私の結婚式の段取り、当日の御両親への仲人役等々・・・・・。今想い出しても、冷汗三斗である。彼は私より1年後に卒業して家業を継いだ。自転車に書籍を入れた渋茶色の竹籠を載んで、配達に走り回っていた元気な姿を思い出す。時々私のところへやって来て「どうしてる?」と言った時の笑顔は、年を経た後々まで変わっていなかった。後年、三ノ宮のスタンドバーで連日逢って飲む時季があったが、やはりあの笑顔があった。そしてグラスの酒に小さな波紋が輪をつくる。彼のひざが小刻みにゆれている。いつもの癖であった。これも懐かしい。私は浮世の情報は、そこで聞かしてもらった。職業柄、活字に埋もれて働く彼は博識であり、重宝したものである。そんな時、やはりあの笑顔を絶やすことは無かった。先日の、中尾平で、弟の柏敏明君に会って、彼の笑顔と笑い声の響きがそっくりなのに驚いた。

昭和四十一年、私は名古屋から神戸へ帰って来た。夏日曜日も会社に居たが、当日10時頃から強い雨が降り始め降り止まない。午後3時頃、柏君から、電話があり、車で迎えに来てくれた。自宅に帰らず、そのまま柏宅まで行って駄弁っていたところ、元町通りを水が流れているとの連絡である。奥さんの作った握飯を持って、私も一緒に元町へ走った。商品を水から守らねばならん。及ばずながら一役買うつもりであった。店についたら水は退いていた。柏君が店の従業員を自宅に送り届ける間、留守番をしていたが、彼が帰店したのはだいぶ遅かった。各所で水が溢れて被害が出ているという。一段落した所で彼に西灘の自宅に送ってもらったが、途中濁流が暴れていた。自宅についたのは深更をとっくに過ぎていた。忘れられない神戸の大水害の一日であった。

彼と私の交遊は長期に亘る。楽しい思い出ばかりがある。一つだけ不可解なことがある。彼には誰も綽名をつけ得なかったことである。ここまで書いて来て気がついた。阿部君も綽名がなかった。不可解が二つになった。

柳澤　正君。彼と私は昭和二十一年四月旧制甲南高校尋常科に一緒に入学した。それ以来の長い付き合いである。彼の訃報を聞いたとき信じられなかった。茫然自失した。彼の自宅に電話を入れ、奥さんから事実であることを知らされた。

彼のお通夜の帰り途、いつもの仲間で一杯飲った。暫く経つ程に何か物足らん、何故かと思ったら「そうや、リュウが居らん！」といった具合であった。それほどに、いつでもどこでも彼は仲間の輪の中に居た。

最近の山の集会では春も秋も彼と同行した。宿では同室が多く、夜更けまで濃密な会話が数多くあった。神戸、大阪での飲み会、温泉遊行、里山歩き等、思いでは数々ある。

そんな中で、私が同行しなかった行動が一つある。それは遺跡発掘現場の説明会である。彼

は考古学ファンであった。遺跡調査で新しい出土があると現地説明会の報道がある。彼はこの説明会に暑い日でも寒い日でも晴雨に拘らず参加していた。「説明会に行ったか？」と聞くと必ず「行ってきた」との返事である。資料を蒐めていた。そして状況を語ってくれた。

もう一つ彼には特技というべきものがあった。文書類の蒐集である。地図であれ、パンフレット類、新聞の切抜きなど何でもござれで、整理が行き届いて、その時、その場の話題にあわせて、手鞄から持参の関係資料を出して見せてくれた。こういった蒐集品の整理保管は見事としか云いようがない。学生時代に彼の自宅に遊んだ時、机の抽斗の中に整理された品物を見て驚いた。とてもじゃないが真似のできない事と思った。見事な蒐集家であった。

近年の彼がもう一つ熱中したのは旧制高校の寮歌祭である。毎年夏の初めに大阪で全国寮歌祭が催される。この会だけは私も参加してきたが、他に、東京、松本、京都、奈良、姫路、松江等々での寮歌祭に彼は参加した。まさに東奔西走であった。今年も現存する旧姫路高校「講堂」で催される寮歌祭に参加する予定であったがその直前に彼は逝った。又その少し前、「寮歌祭で唱われなかった寮歌を歌おう会」とやらで、柳澤君が吾が甲南山岳部部歌「山の歌」を披露したところ好評を得て「関西寮歌振興会」で寮歌集に残そうということになり、関西寮歌振興会合唱団により、寮歌歌曲集（NO.17）に収録され、このほどカセットになって世に出た。他高校の持歌15曲と併せて全16曲の中に「山の歌」が収まっており全国の寮歌ファンの耳に届くこととなった。彼の置土産となった。このカセットが今私の手許にある。彼はこれを見ずに逝った。近く彼の霊前に供えるつもりである。もって冥すべしと思う。

余談となるが、この六月十三日。大阪では恒例の寮歌祭があった。参加者は約500名。当然ながら殆ど80歳以上の超元気な翁ばかり、寮歌を高歌放吟して青年の顔にもどっていた。さすが敗戦後日本の復興に奮斗してきた顔であった。来年も又集って高唱されることを願う。未だ寮歌は挽歌でないと思った。寮歌は人生の応援歌だった。

以上、阿部、柏、柳澤　三君との交遊の一端を述べてきたが、彼らとの思出が走馬灯のように駆けめぐる。もう書く手が追いつけない。かえり見て、「人生茫々」の思いがつのる。胸の内を去来して止まない。

折しも、夜の遠雷が鳴って、山の遠くへ去って行く。

亡き三君の魂魄を山の奥津城へ誘って鎮めてくれるのか。

合掌

2009 年 6 月 17 日　記

追悼　柏 秀樹君を偲んで

砂 川 彰 雄（昭和 32 経）

山 の こ と

昭和28年（‘63）甲南大生となった小生は、甲南小で4年生まで同級であった宮本君に山岳部に引きずり込まれた。柏君は中学からの甲南ボーイで、剣道部でその道に励んでいた。当時剣道部と山岳部は、以前土俵があったと言う空地に面し一棟を二つに分けた部屋に入っていた。すでに前年に六甲高校から来られた阿部（純）さん達により体育会に登録されていた山岳部に甲南高校山岳部だった柳沢・阿部（公）・木全・宮本等が入り活気に溢れていた。部室には誰かが居り扉は常にオープンされていた為、時間待ちや自主休講の人達で部員以外の人達も利用していた。柏君も最初はそんな一人だったと思う。

彼は絵画を趣味として神戸の二紀会で研鑽、その才能を磨いていたのだった。実はその事は大学を卒業してから知る事となったのだが、奥様も同会に属しておられた由、いつ頃かお二人に愛が芽生え大きく育っていったものと思われる。又彼は自然の佇まい、移ろい等、森羅万象を愛しそれらを描き留めたいとの想いが強く、山への憧れと昇華し山岳部で山へ行こうと決意したのではなかろうか？

正式に入部したのは何時だったか覚えていないが、2年の夏山合宿に参加したのが初山行であった。剱沢での合宿、続いて槍穂高までの縦走涸沢での中高山岳部の合宿に合流7月17日～8月8日迄の長期に渡るものであったが全行程をオヤジさんの古いソフトを改造したチロリアンハットで過ごし松本では立派な山男になっていた。

又その冬には乗鞍、位ヶ原の甲南ルームでのスキー合宿を行い雪の大斜面や林間の美しさに絵心を掻き立てられたものと思うが、スキーの方はやや苦手のようだった。

3年の新学期を迎え新人部員も増え、これからという時に、何と小生　結核を宣告され休部の止むなきにいたった。無聊を託つ小生を置いて、5月の八ヶ岳（4月29日～5月3日）夏山合宿は剱二股合宿、鳥帽子岳経由槍ヶ岳縦走（7月23日～8月12日）10月の穂高奥又白（10月10日～10月16日）、乗鞍スキー合宿（12月22日～12月30日）4年生最後の夏山合宿は穂高岳沢及び涸沢合宿（7月18日～7月29日）以上が公式記録として残っている現役時代の山行で、充実した3年間だったと思う。

登山では唯、山に登る行為だけが大事なのではなく、それと同じ位大切な事が記録や研究等の資料である。大正12年（‘23）に創立された旧制甲南高等学校山岳部が甲南学園山岳部となって昭和38年（‘63）に40周年を迎えた。彼も大学を卒業して7年、社会人として忙しくなりだした頃であったが「**時報**」甲南山岳部創立40周年記念号の編集を一手に引き受け、立派な40年の歩みを上梓されたことは特筆されることで

あった。又　その後も「山嶽寮」 34号（‘77）から40号（’83）までは彼の素晴らしいカットがちりばめられ　冊子の価値を高めている。

高遠のこと

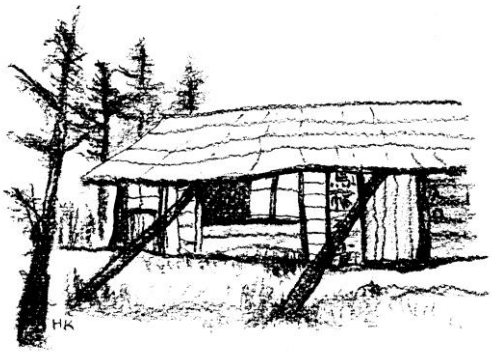
昭和50年（‘75）頃、彼と田邊（賀茶の方が通りが良い・・）と小生が何かの機会に集まった時に、我々都会育ちが定年後も喧噪の中で過ごすのはかなわんぜ、何処か山の見える里にでも移らんか・・というような話から真剣に車で土地探しを始めたが、これといった物件もなく、何となく町役場ででも聞いてみるかと高遠町役場に飛び込んだところ、町の土地開発公社が別荘地分譲を行っていますので、すぐご案内致しますと連れて行かれたのが、直下に高遠コヒガンザクラで有名な城址公園、大きく開けた伊那谷の向こうには中央アルプス木曽駒ケ岳、宝剣、空木と連なり、権兵衛峠や経ヶ岳も一望でき、すでに造成済みで水道・電気も設置済み、幸い3区画つながった土地が空いており、ここに決めようとなった。

その後　正式契約も終わり数か月たった頃、彼から一度遊びに来ないかと誘いがあり訪問した処、何と別荘の模型が出来上がっており、二階部分は外す事が出来、一階の間取りが良く判る様に造られ、「ここがアトリエやねん」と嬉しそうに話してくれた。彼が高遠の地に対する想いが大変強いものだと感じた。

昨年から彼の土地に田邊君と二人でコスモスを一面に咲かすことにしている。今年も種を蒔き終わった。春夏秋冬この山里の移ろいは素晴らしいものがあり、きっと彼はこの地にイーゼルを立て、この風景を描き始めている事と思う。あの人懐っこい笑顔で右手を軽く挙げ、「よう　元気？」と言う彼を忘れられない。

奥様の献身的な介護を受け満足だったのだろう、お棺の中の彼は実に穏やかな顔で、遺影の優しい笑顔と共に、「ちょっと早かったけど待ってるでー」と言っている様であった。

56年に及ぶ良き友を失った寂しさは未だ消えない。君の友情に感謝しご冥福をお祈りします。



柏 秀樹君の想い出

田 邉　潤（昭和 34 経）

戦闘帽に軍靴でピッチャー、昭和 22 年(1947 年)学制改革で公立の中学へ入れず何も判らないままに「甲南高等学校尋常科」に入学した私にとって、同じクラスの柏　秀樹君の第一印象である。いや戦闘帽に軍靴が第一印象ではなくて、なんと緩いボールを投げる奴なんだというのが実は第一印象である。私にとって、剛速球こそがピッチャーの真髄だと思っていたんですから。この謎、は彼の亡くなる直前近くに氷解しました。

戦闘帽に軍靴というスタイルは、敗戦直後の当時としてはちっとも珍しい格好ではなく、私なんかは学生帽すら買ってもらえず無帽で通学していたと思います。勿論私も野球の仲間入りをしたい気持ちは十分にあったのですが、村の国民学校で開墾と松ヤニ取りばかりやらされていた私には、甲南という学校は、気おくればかりして周りと溶け込めないものであったし、それもあって尋常科 1 年でものの見事に落第してしまったので、次に彼と話ができ、付き合えるようになったのは彼が大学生、私が高校生の時代でした。

山岳部の隣の剣道部部室から剣道着に裸足で竹刀をもって道場へスタスタと通う彼と再び挨拶を交わすようになったのは、私が高 2 で彼が大学 1 年の時代と思います。その頃山岳部は、中学生から大学生まで、ポーラーメソッドとか何故ロッククライミングをしなければならないのかなど談論風発、なんとかテニスとかクロッケー（今では老人達のコミュニケーションとホビーの場となっている）をしたり、オニさんの Y 談など傍目にもワイワイガヤガヤと賑やかで楽しい雰囲気でありました。更にそれに輪をかけていたのが、部室がサゴさんやジメなどという他部の人たちのタバコの吸い場としての溜まり場にもなっていたので本当に楽しい雰囲気に満ち溢れていた時代でもありました。

それを隣から見たり聞いたりしていた柏君が、剣道とはいえ人の殴り合いよりはよほど山岳部にロマンを感じたのであろう、剣道部をやめて山岳部に入りたいと言ってきたのです。山岳部にとっては異論のあろうはずがなく、そこからが彼との終生の付き合いが始まったのです。

楽しかった想い出、苦い想い出、理解できなかった想い出などたくさんあります。思いつくままに書いてみようと思いますが、想い出の数の中でも数の多いのが、彼に叱られた事ごとです。先ずは今も現役時代もそうですが、私には理想主義的な性格があって、一旦良いと思った事は何が何でもやり抜こうというところがありますが、彼からは「自分ができるからと言って他の人ができるとは限らんのや、ええ加減にしとかなあかん」とよく叱られました。また若気の至りですが、彼から今の奥様と婚前に旅行されたことを聞いた時に、それは一寸倫理的に問題やなぁーと言ったところ、語気鋭く叱られました。おまけに、これでも読めと「歎異抄」という文庫本までいただきました。私が結婚したのはそれから 6,7 年後ですが、その時代にはそんなことはもう当たり前のこととなっていましたから私もあほなことを言ったものだと歎異抄を読むまでもなく理解しました。

もう一つは、彼が大学 3 年私が 1 年の夏山合

宿での想い出です。私は当時は国鉄と言われる電車で千里丘から摂津本山まで通学しておりました。前から二両目の一番前のドアーのすぐ後ろの海側の座席に大阪駅から座れるのが常でした。

中学時代は気が付かなかったのですが、高校生になった頃、尼崎から乗ってくる甲南女学校の生徒に気が付きました。私好みの女生徒だったので一目で見染めてしまったのです。彼女は尼崎からですから当然座れず、いつも私の目からは対角線上になる山側のドアー近くに立つのが常でした。長い間双方が目を合わすこともなく、もちろん言葉を交わすこともなく、通学電車中の片思いというものでした。

大学に入ってから少し大人になった気分も手伝って、ラブレターを出そうと考えました。どのようにすれば私に関心を持ってもらえるのか、と車中における私の夢想が長い間続いた後に、付き合って欲しいという文章の合間に押し花を入れようと思いついたのです。押し花は私としては当然のことながら高山植物でありました。

大学 1 年としての剣二股合宿の後の縦走途上でその高山植物、もちろん花です、の収集を始めました。それが、悪いこと、いけないことは百も承知でした。採集するたびに罪悪感にさいなまれました。でも、やはり恋は盲目だったのですね。そのようにして出したラブレターはものの見事に蹴飛ばされる返答が夏休みも終わりに近づいた頃にやってきました。

山岳部では、今夏の合宿および縦走の感想文を書く課題が当時のリーダであったリュウさんから出されておりました。秋の学期が始まって皆から感想文が提出され、それが綴じられて渡されました。そこに、秀樹君の痛烈に私の行為を批判する文章が、個人名は出さないまでも、書かれておりました。皆で感想を話し合う席上でも言葉で批判されました。後々の柏家での談笑の中でもそれが話題となって、私は弁解もならず誠につらい思いをしたものです。苦い想い出です。

その後私は、当時の日本から見れば天国のようなオーストリアに留学に出してもらいました。ホームシックも手伝ってしばしば彼にオーストリアの印象や大学のことや友人ができたことなどを手紙で書きましたが、必ず返事をくれて本当に心が慰められました。

留学中にそろそろ里心が芽生えだした頃コッシンからヒマラヤ遠征の話が舞い込み、帰りにインド、ネパールへ立ち寄って現地事情を調査して欲しいとの依頼があり、学生気分の抜けない私には大変な重荷になりました。

帰ってみれば、遠征準備委員会が結成されており毎週一度の会合があってほとんど欠席することなく、でも自分はあまり役に立たない活動をしていたように思います。隊長候補が伊藤文三さんで隊員にはアメさん、私、柏　敏明君らが候補に挙がりましたし、当時の朝日新聞に「甲南大学山岳部ヒマラヤ遠征」の記事が出ました。私には家業があって休暇が取れる身分でありながら、自分の将来を考えた時に本当に参加できるのかどうか随分悩みました。

敏明君の兄貴である秀樹君も随分悩んでいたのではないかということが後で判りました。それは、アプリケーションまで出してネパール政府の返答待ちという段階で、中印紛争のため入山を全面的に禁止するというニュースとともに我々

の希望も努力も水の泡となった時、敏明君がヒマラヤの代わりにどこかへ登山すると言い出し(どこへだったかは、もう思い出せない)、それを兄貴の秀樹君が反対したのです。

秀樹君は私の性格を知っているので、私なら賛成するだろうと考えたのでしょう、前もって私に賛成しないよう言い含め、そして柏家としては、敏明君が情緒不安定のままで登山して、もしや事故が起こったら大変なことになると、私を説得したのです。案の定、柏家での家族会議の席上で敏明君が泣き出し、私も私の性格から釈然としないままに兄貴の秀樹君の言う通り反対して幕となったことがありました。これは結果的には何事もなかったということですが、理解できなかった想い出の一つです。

楽しかった想い出の方が実際はほとんどで数が多いのです。その中で最も楽しかったのは秀樹君と砂川君と私の三人で「我々の田舎づくり」を話合い、計画し実行に移して行ったことでした。話の発端が何だったのかは今ではもう思い出すこともできません。時代が丁度、経済高度成長時代のど真ん中でそれぞれの勤めに疲れていたのでしょう、また周囲は猛烈な都会化と公害が進み始めた時代でした。話が自然と、田園、緑と雪の山々、爺さん婆さんの慈愛といった故郷への憧れへと進んで行ったのでした。三人が三人とも休みになっても帰る故郷を持たず、爺さん婆さんの慈愛に触れる機会もなかったのです。ですから、我々三人が三人自身で「故郷」をつくり子供や孫が休みになったら帰ってくる田舎をつくろうではないか、と言う話へどんどん進んで行ったのでした。実に楽しい時間でした。しまいには、原始共産生活の話まで出るほどでした。どこの地域を選ぶか、というのが最後まで残った我々の課題です。

まあ、ともかく一度家族同士で一緒に信州でも旅行しようや、何かヒントやアイデアが出てくるかも知れんで、ということで当時東京勤務だった私どもの家族は久しぶりに新宿から中央線に乗りました。どこでどう落ち合ったのかは、もう何も思い出すことができません。秀樹君夫婦と中学生だった直樹くんと和樹くん、私ども夫婦と小学校へ入ったばかりの長女と幼稚園の長男、そしてまだやっとよちよち歩きのできるようになった末っ子の総勢 9 人でした。その時の砂川君の家族の印象がまるでないので、あるいは彼は当時韓国駐在で日本に居なかったのではないかと思われます。残っている記憶は、新穂高の中尾平です。現在山岳会の新制 OB の 6 月例会を行っている宿の丁度道を挟んで向かい側に白川郷から持ってきた合掌造りと露天風呂のある民宿があってそこに泊まりました。

秀樹君夫婦は、お二人で槍ヶ岳へ登った下りを蒲田側へ下ってきているので懐かしさもあっただろうと想像します。中学生だった直樹くんと和樹くんの食欲のすごいのには本当に驚きました。いずれは私ども家族にもそれがやってくるんだ、というのが記憶に残っております。運転嫌いの秀樹君と自動車好きの私との旅行でしたが、電車、バスにタクシーでの旅行でした。平湯大滝を見たり上高地へ行ったり、私は背負い子に末っ子をおぶって意外にしんどかったのを憶えています。帰りにタクシーの運ちゃんの勧めるままに島々駅の近所でリンゴ狩りをしてお土産にしたのも、秋の好日とともに鮮明な楽しかった記憶です。

ところで「我々の田舎づくり」ですが、ひょんなことから場所が決まったのです。東京支店勤務だった私が、支店の慰安旅行で東京→諏訪→杖突峠→伊那→飯田→大平峠→馬篭→妻籠→東京のルートを単に山好きの所為で選んだのです。杖突峠と言う名前にも惹かれるものがありましたが、峠から下って来た当時の「高遠」と言う鄙びた山間の町に目がくらんだのです。”高くて遠い”、なんとロマンチックな地名なんだろう、と旅の間じゅう頭の中で繰り返し、繰り返し唱えておりました。早速、秀樹君や砂川君に報告しました。高遠周辺でどこか適当な土地を求めないかと。それまでは、後立山を全貌できる白馬周辺はどないや、いや雪の多い時には困るぞ、だいたいそんなとこは高くてよう買わんのとちがうか等々、結論が出せないままに時間が過ぎ、おしゃべりだけを楽しんでいたのです。

高遠は、東京からは比較的近く、交通渋滞だけが玉に傷でしたがよく遊びに出かけ、景色や高速道路や土地情報を仕入れては報告していました。ある時、町の「芝平(しびら)」と言う地区が廃村で民家を売りに出している、という情報を得て早速三人で見に行きました。残っている方の家に上がりこんでいろいろな話を聞きました。残っている人たちと仲良くやってくれるんだったら協力するよ、と言うような話でした。山間の展望のきかない土地柄でしたし、冬の雪を考え、因習の強い信州のことですから三人ともなんとなく気に入らないなぁ、と言うのが実感でした。なら、役場へ行って何か情報が無いかどうか聞いてみようではないか、との秀樹君の提案で観光課と言う所へ行ったのです。そして我々の趣旨や望みを伝えたところ、いきなり、それなら町の供給公社が開発している別荘地があるからそこではどうか、と言われたのです。私は以前から立て看板などによって知っており、秀樹君にも言ってみたのですが、てんで相手にもしてもらえなかったのでした。役場の課長さんは、屋上から現地が見えますよ、と我々を役場の屋上へ案内してくれました。それでもなんとなく、既製の別荘地か、という感覚しかない我々を察知して、課長さんは現地へ行きましょうと誘ってくれました。秋の日の澄み渡った空の中に中央アルプスが真正面、手前の土手にはコスモスとススキが秋の風に揺れている。単純な私にはそれで充分でした。ここでええやんか！と思わず叫んでしまったのです。他の二人も同様だったのではないでしょうか。

このようにして「我々の田舎づくり」の土地が決まりました。次は、だれが、いつ、どのような家を建てるのかが三人の話題の中心になりました。いずれも金などない三人でしたから自然と夢は大きく膨らみ勝ちでした。そしてそれは最高に楽しい時でもありました。驚いたことに、最初に、おれ、こんな家建てんねん、と模型まで作ったのが秀樹君でした。ここがアトリエでなぁ、と絵を描いて暮らす夢を持っていたに違いありません。でも、なんだかんだで実現しなかったのです。

そして最初に建てることになったのは私でした。大きな犬小屋みたいな小屋やなぁーと悪口を言われるほど小さな小屋でしたが、そこで 10 年ばかり田園生活を休み毎に楽しみました。そのうちに砂川君も隣に瀟洒な家を建てました。私も家族のことを考えて、秀樹君の言う通り昔の小屋を残したまま増改築しました。秀樹君も建てるということで設計か手付金まで話が進んでい

たのではなかったでしょうか。でも、やっぱり自営の事業の方が心配で、と言う理由で建てずじまいになってしまいました。私には大変気を使ってくださって、彼の土地と私の土地の間の法面に立派な石垣を作ってくれました。おかげでそこに花壇が作れるようになりました。

今は、アスチルベと撫子などが咲いており、まもなく百合が咲き始めるでしょう。

先々週の土曜日には砂川君と一緒に彼の土地にコスモスの種まきをしました。秀樹君が家を建てるためと石垣を作ったために新たな土を入れたので彼の土地にそれまで自然に生えていた夏の花の菊芋が埋まってしまいました。彼のところから無断で私の庭のために一部頂戴したものを再び戻しておきました。今年には黄色いきれいな花が再び咲くことでしょう。

私の田舎を増改築した時に、壁に飾る絵がどうしても必要になり、あんたの絵をくれへんかと強引に三点ばかりいただきました。ある日、思いもかけず秀樹君夫婦が私どもの田舎を訪れてくれた時、その絵がかけてあって私は面目をほどこしましたし、彼も喜んでくれたことでしょう。

今年の一月の末に、砂川君夫婦と私たち夫婦で彼を見舞いに行きました。弱ってはいるもののかなり元気そうでした。その時の会話の中で（何の話をしていたのか全く記憶ないのですが）彼が、”俺は芸術家なんや” と私の顔を見て言った時に、私にはそれまで本当の意味で理解し得なかった彼の性格を、部分であったとしても理解した瞬間でした。この文の冒頭に軟投の彼の謎が氷解したと書きましたが、この瞬間です。ああそうなんや、おれなんかとは全く違う性格をもっていたんや、と気がついたのです。私なんかとは対照的に、彼の判断基準となっていたのは「芸術家」としての「美」と「醜」じゃなかったのか、と思います。あの緩いボールでもこのバッターなら打ち取れる、また打ち取って見せるという美意識が根底にあったのではないかと思ったのです。

”死なんうちにもうやめとき”、と秋の夜の大明神沢の下降途中で浮石とともに落下して行った仙吉がその浮石の下敷きになって川の中で悲鳴を上げている話、そして何とか救出してその夜はビバークとなり、ずぶ濡れで死ぬかと思うほど寒かった話を彼の家でしている時に言われた言葉です。恐らくこれも彼の遭難と言う醜を嫌った判断だったのでしょう。それを機に私は遊びでない登山をやめたのです。

ご冥福を祈ります

2009 年 6 月 30 日

あとがき

この想い出文の中で、秀樹君、砂川君と君付けで書いたのですが、実は私自身非常な抵抗感を持って書きました。それは、ご両人が入学のときや年齢的には一緒であったにしろ二年も先輩であるからです。でも、さん付けでもおかしいしなぁ、というのが私の感性です。ご両人に、失礼をお詫びします、お許しください。

田口二郎さん　あれこれ

宗 實 慶 子

私の若い日、穂高滝谷を女性パーティーで目指したとき、関西学生山岳聯盟報告　第三号『北穂飛騨側』の記録で田口二郎さんの活躍を、またマナスル登山では不可欠の人材であった事を知りました。

1960 年　デオ・ティバ（インドヒマラヤ）の登山を終えて、ニューデリーに戻ると田口さんが「朝日の田代部長（朝日新聞社後援）が大変喜んでいましたよ」と伝えてくださり、「ご褒美に」とオールドデリーのモチ・マハールに案内してくださいました。近頃タンドリチキンは身近な食べ物ですが、タンドール（窯）のかしわ、マトン　かしわ　野菜等のカレー　羊の脳みそ等々、最もインド的なものと望みを叶えて下さいました。

1962 年から私は阪神間に住んで花崗岩の六甲が身近になりました。関東ローム層の黒い土に対して関西の白い砂と印象をおっしゃいました。　関東平野の黒い重い土をみると田口さんを偲んでしまいます。

1985 年から 2 年間、日本山岳会の評議員会で田口さんと同席いたし、山岳会のこと山のことを教えて戴きました。

月 1 回東京にきたらよいと田口さんに言われて引き受けた日本山岳会の会長は何やかやで何回も往複させられ、山岳会は人使いの荒い処や。と今西壽雄さん。田口さんに神田で鳥すきを家内とよばれたがそれでお仕舞い。と笑っておられました。

1986 年　今西錦司さんが 1500 山登頂感謝の会を京都ホテルで催されました。330 人の方がお招き頂き、よくこれだけ登られたことと、お祝い申しあげました。散会後、田口二郎　渡辺兵力　織内信彦　今西壽雄氏と祇園近江作で歓談いたしました。京都は桜の盛りでした。1400 山登頂祝賀パーティーの時もご一緒いたしました。

1990 年　関西支部の総会に講演をお願いし『スイスの山の思い出など』と題して山岳界の流れを話されました。ご自身の山登りの動機からスイスのこと 1930～1960 年登山の潮流　岩登り技術はアイガー北壁で創られ、世界の登山界も技術・道具だけでなく精神も変わったと語られました。この辺りが後の『東西登山史考』に纏められたとおもわれます。香月慶太氏もおみえになり今西壽雄氏を交え和やかな夜でした。

この日、私は新大阪駅にお迎えに上がりました。バーバリーのコートで降り立たれた田口さんは私を両腕で大きく抱かれました。親愛の情！抱擁！田口さんといえば、このことを一番先に思い出します。

1994 年　カナダの帰途成田から、小康の続く田口さんを長谷にお見舞いしました。玄関を入るや田口流の『ホウヨウ』で迎えて下さいました。エルナ夫人長女マヤさん大きな犬が同席し、今西錦司　今西壽雄　中尾佐助　中村勝郎　重光晶氏とその夫人のこと等、見舞い客の私が愉しんだ 1 時間 40 分でした。

1998 年　田口さんの訃報がとどきました。鎌

倉教会の祭壇には高木正孝氏と一緒の写真も飾ってありました。『いつくしみ深き友なるイエスは…・』と讃美歌を歌うと懐かしい岳友が田口さんをお迎えしていると思ってしまいました。

2009 年 6 月の晴れた日　ロックガーデンの甲南追悼碑に参りました。ブラック岩の近く田口兄弟他の方々の名が掲げられ「KAC」の伝統の一端が伺えました。盛りあがる深緑　ホトトギスが鳴き名残りのモチツツジのピンク　大阪湾がキラキラ輝いて、心満ちた一日でございました。

＊　参　考

宗實（旧姓 浜中）慶子氏のご経歴

1930 年	東京に生まれる
1949 年	富士登山
1956 年	Bush 山の会設立に参画
1959 年	日本山岳会入会
1965～2005 年	日本山岳会関西支部委員
1966 年	日本ネパール協会入会
1985～1988 年	日本山岳会評議員
2005 年～	日本山岳会関西支部監事

デオ・ティバ　モンブラン　チロル　アラスカランゲル山地　アコンカグア　ネパール　中国　台湾　韓国　ロシアの山を登る

＊ 編集付記

広瀬氏の御提案で宗實慶子氏に原稿執筆依頼をしました。御主人の宗實二郎氏は 1951 年(昭和26年)12月の甲南高校山岳部の遠見尾根・五竜岳合宿に特別参加されています。筆者の 慶子夫人は日本山岳会、女子会員の大御所。田口二郎大先輩との出会いなどは、本文にて御披露頂いている通りです。

宗實慶子さんは昭和30年代に日本で初めての女性ヒマラヤ遠征隊に参加され、デオ・ティバに登られた方です。

ご主人は何年か前、甲南のロックガーデンの慰霊祭に出席されました。（その時は神戸大の金井健二さんも一緒でした） たしか旧制報徳実業の山岳部時代に関西岳連 AAVK の神戸セクションで合同合宿が北鎌尾根であり、甲南からは伊藤治（ニャン）、河崎（オタマ）さん達が参加。その御縁もあって、甲南の古い時報を大切に持っておられ、ロックガーデンにも持って来られていました。

ー紀 行ー

パキスタン ―― 辺境の峠

雨 宮 宏 光 (昭和33経)

ミンタカ峠

中国とパキスタンの国境に位置し標高は 4,712 m。ミンタカとは千匹の山羊の意味と聞いた。

古くは 403 年 僧 法顕が、1899 年 ヤング・ハズバンド、1902 年大谷探検隊、近くは 1947 年に探検家ティルマンがこの峠を越え新疆のタシクルガンを経てカシュガルに至っている。

99 年、未解放地域から開放され、イスラマバードに在住する督永忠子さんが、99 年 6 月に一番乗りと聞いた時、僕も行こうと決めたのは 99 年7月のことで 2000 年8月15日、二番乗りとなった。

2000 年 8 月 7 日、米山悦郎君を隊長とする雨宮 飯田 池内「現役」の4人は日本を出発し 9 月 3 日、日本に帰国した。

(その間の詳細は甲南山岳会・ホームページ・山行報告・2000・「注 1」を参照ください)

ミンタカ峠への道はパキスタン北部の町ススト に始まり、途中ミスガル村で見た古い英軍のポスト・オフィスと気象測候所に当時中央アジアでグレートゲームを展開した大英帝国の歴史を感じる。ジープの行き止まり地点、アラーム・ダリッチには古いフォト「城址」がありパキスタン軍の駐屯地になっているが無人のようだ。さらに奥に進みミンタカ川(ミスガル川とも言う)の川沿いにヘリポートまであり、中国との緊張に備えて作ったのだろうか。

ミンタカ川沿いの古きシルク・ロードはキャンプ場、水も豊富で放牧のヤク、牛、山羊達の天国である。

川原は広く草地と樹木が点在している。ミンタカ川はH4,150m付近で水の流れは消え、大小の岩が転がっている間を縫って踏み跡がある。

更に川原を進むとグルカワジャ・ウルウイン氷河左岸沿いに そそり立つ、6,000m位の岩壁と雪の鋭鋒が見えてくる。

当初の計画ではこの氷河左岸にある山を登山対象としていたが、偵察の結果とても登れそうに無く、つぎに踏査するキルギス峠周辺で登山対象を物色することにした。

ミンタカ峠にはこの氷河から離れて左に行き、踏み跡があるガラ石の斜面を登りきると、突如平坦な場所に出る。黒部五郎のカールに似て草地に大きな石が点在し、幅 1mくらいの清流が流れている別天地だ。数百年の昔から峠への登りに疲れた人達はここでしばしの休息をとったのだろう。天が与えた憩いの場所である。

平坦部は歩いて15分くらいで終わり景色は一変し、草1本無いガラ石と砂地の丘にでる。ここがミンタカ峠だ。パキスタン・中国・1984 と刻まれた石標が 3 個所、200mほどの間隔で離れて建てられており、誰もいない静寂・無人の国境である。

中国側はなだらかなパミール高原で、真下に中国のチェック・ポストらしき小屋が見えるが人影など見ない。KKH「カラコルム・ハイウエイ」の開通でミンタカ峠など越える人無く、そのうち道は荒れ果て廃道となるだろう。

辺境の峠で

峠という字は　山と上と下を組合わせた日本国字であり、この言葉のもつ想いは山里と山里をつなぐ人馬往来のみち、又は野麦峠に抱く女工哀史等いずれも「人のにおい」が付きまとう。

例外は　針の木峠、三伏峠で標高から自然条件が厳しく、この峠に人馬往来の歴史は感じない。

今回ミンタカ峠にいて感じたことは、どこにも「人のにおい」がない。4,500m以上の過酷な自然の中では、哀歓と歴史とロマンが込められた「峠」などと言う甘い感傷は一切なく、そこにあったのはヤクやロバに荷を積んで、現地の人が必死の思いで越えた場所という感じだけである。

百余年の昔から人々が往来したハーブの香りむせぶ古きシルク・ロード、その踏み跡を辿りミンタカ峠に至ったのになぜか感慨にふけることが無い。

それは厳しい自然のうちに生まれた思いであり峠は移動上の通過点に過ぎず、身を守るため一刻も早く立ち去るべき場所だからだ。

英語のPASSが意味するのは「通過」であり峠は単なる通過点に過ぎず、中国語の山口「峠の意」にこめられた谷の向こうは、人間社会と隔絶した恐ろしげな場所。かように人がもつ峠への概念が世界各地で違うのは、和辻哲朗が著書『風土』で謂う人間の精神構造はその地の風土から刻みこまれるということか。

形状からも日本の峠は、たわ・窓・乗越・鞍部の言葉が意味するように登りきって下るイメージがあるが、ミンタカ峠ほか訪れたシャンドール峠、シムシャール峠などは、このイメージとまったく違い登りきった場所が広大で、どこが峠なのかわからない。

弥陀ヶ原の真中にいてここが峠か・・・・という感じである。

日本の風土に育った僕は今回パキスタン、それぞれの峠に出発前の思いでは、歴史とロマンの回顧などと甘い感傷に浸っていたが、現地で実際に峠にいて無風快晴という最高の状態の中でも、日本の峠とは違う。それは単に周囲の景色、スケールだけでなく、わかるはずもない異国の風土と希薄な酸素の影響だったかも知れぬ。

キルギス峠

アフガニスタンのワハーン回廊とパキスタンの国境線上に位置する標高 4,820mの峠。

キルギス人が交易の為行き来するのは、一つ北側にある、イルシャッド峠である。

キルギス峠にはスストからスペンジ村を過ぎ礼拝所のあるジアラットまで車が入る。

ジアラットは永住村ではなく「祈りの場所」とされており、周囲に旗がはためく聖廟がありすぐ横に集会所と寄宿兼用の建物がある。ここで我々全員が地元の長老に招待された。平屋・白壁の建屋の内部は 200 畳ほどの大きさで、村人 60 人ほどにまじって全員沈黙の時間。イスラム式の礼拝もなくチャパティとスープをいただいて解散とあっけなかったが、緊張で疲れた。米山隊長は長老に 700 ルピーを寄進する。

キルギスから年間 150 人くらいがここにやってくる。ジアラットまでは許可が要らずキルギスから 3 日か 4 日でくる。持ってくるのはヤク、牛、ヤギ、持って帰るのは、日用品とケロシンである。

ジアラットからチャプルサン川左岸のまったく勾配が無い水平の道を行き、途中右折してやっと登りが始まり、イルシャッド川に沿って北上、西に進

路を変更し、そのまま直登した突き当りがキルギス峠だ。ジアラットから3日間の行程である。

渇水期のイルシャッド川は岩石だらけの荒涼たる場所でふみ跡は不明瞭、雪解け後の増水時は通行できないだろう。また、4,150m付近から上は岩と石の傾斜地でテント場はない。

チヤプルサン川の南西には魅力的な無名峰があり、前年この地域にいかれた東北・山の会から写真の提供を受けていて、日本での写真判定では登れそうな感じだったが、実際に見たこれらの山々は氷河から一気にそそり立つ鋭鋒で、これまた見ただけでとても登れそうにない。

そもそもミンタカ峠を主目的として、ついでに近くの山を物色して登るという行き当たりばったりの計画だから仕方ないが、いいわけすればこの地域は六千メートルすれすれの山しかなく、もともと資料皆無である。だから面白い、でやってきたのだがこれでは格好がつかない。

ミンタカ峠で見た中国側に登れそうな山があったが、不法入国しての登山などできない。

最後の切り札キルギス峠の両横の山は登れそうで(督永忠子・提供写真)これを最終目標としたのです。

さらに途中、遠くキルギスからワハーン回廊とイルシャッド峠を通過し、パキスタンに交易でやってくるキルギス人の往来あって、例のとんがり帽子の様子が見れたらとの期待もあったのです。

8月21日。キルギス峠の鞍部にアタックキャンプを設営して隊を二分し、パッキリ・ピークとボボン・ピークに登頂した。「注2」

雨宮と飯田が登頂したボボン・ピークからイルシャッド峠の鞍部が真下に見え、パキスタンとキルギスはこの峠を往来するのだろう。

ボボン・ピーク頂上から俯瞰した憧憬のワハーン回廊、遠くに見えたカンピレ・ディオールの山と心に残る風景でした。

注1 甲南山岳会・ホームページ・山行報告・2000・パッキリ・ピーク、ボボン・ピーク登頂とミンタカ峠・キルギス峠・オールドシルクロード・踏査。

注2 ボボン・ピーク、パッキリ・ピークは地図に山名記載なく甲南隊の命名です。標高は5,300m～5,400m位。キルギス峠はイルシャッド峠の南西、約1,000m弱に位置し地図に記載なく、現地の名称による。

追記: 今回、隊長・米山悦郎君は2004年6月26日イスラマバードからアフガニスタンのカブール、ファイザバードからワハーン地域に入り、ワハーン回廊を横断してイルシャッド峠を越え、7月14日パキスタンに入国しています。隊の構成は督永忠子・堀 拓二と途中まで参加の平位 剛の4名。甲南・山嶽寮・第59号に詳細あり。

ワハーン回廊については『禁断のアフガーニスタン・パミール紀行』平位 剛 ナカニシヤ出版・2003 に詳しい。

シムシャール峠

今西錦司があこがれて果たせなかった秘境、パミール高原南端の峠で標高は4,735m。中国国境に近くその彼方、北はタジキスタンである。事前に地図や資料（登山史・探検史・民俗史）でシムシャール地域を調べる楽しさは格別のものでした。

（この遠征の詳細は甲南山岳会・HP・山行報告・2001・パミール報告を参照ください）

2001年9月5日。我々はシムシャール峠に至った。我々とは甲南山岳会の5人、米山隊長以下、雨宮 鈴木 二谷 武田の5名である。

雨宮はパキスタンに入国して4日目、下痢でへ

たばりパスー村で休養となる。仲間4人は先に出発したがシムシャール村（3,100m）で彼らに追いつき、9月1日から荒涼たる断崖のへつり、漠々たる谷間を経て突如目の前に開けた湖と山羊が草を食(は)む高原、そこがシムシャール峠だった。 シムシャール村から5日間の行程である。

米山　武田の2人は休む間もなく目標としたミングリック・サール（6,050m）の斜面をのろのろと登っていく。5,100m位から上はべったりと雪がついている。アタックテントを設営するのだ。

ベーステント近くの小高い丘で彼らの歩みを追いながらぼんやりと眼下に見た風景。

風はパミールと　カラコルムから民族の怨念を昇華して峠に吹き、湖面の水を撫でて通りすぎていく。

キッチンテントから流れるけだるいパキスタン音楽を聞きながら 昨日(きのう)　今日　明日　なくただ放心。

あのような情景をどう表現すればいいのでしょう。

思うのです。

言葉や文章や映像で表現できぬもの、それは自分の心に刻まれた貴重な宝ものです。

2001年9月　N・Y　テロ勃発の年

廃道の峠

柳沢峠・1,117m

鬼無里(きなさ)と北安曇(あづみ)を結ぶ峠で、鬼無里の麻糸・和紙・木地物と、北安曇からは塩・干魚を運ぶ人馬往来の生活道路だった。古く鬼無里の麻糸・和紙が安曇から木曾路を往(い)き上方・京都まで運ばれたとある。当時山奥の僻地だった鬼無里の村は地場特産品で豊かな経済を作りあげていたのです。昭和 59 年 7 月の水害で北安曇から柳沢峠への径は寸断され廃道となり、さらに両地区を結ぶ車道が開発されて行く人は稀である。

鬼無里から――

98 年 5 月、鬼無里の国民宿舎から柳沢左岸の明瞭な道を行き，鬼無里冷泉から右岸に渡り山腹をまき、だらだら歩きで柳沢峠に至る。

はっきりした道がついていて 2 時間ほどの道のりである。峠の標識はなく生い茂った熊笹と木に埋もれた場所で、北安曇方面への踏み跡はない。一緒だった田辺君は胃ガン手術回復して初めて山の風情に触れた満足からか。峠でゆっくりとやすむ表情は穏やかだ。

静寂の中、北安曇のどこかの部落から音楽らしき音が聞こえてくる。鬼無里・小川村・白馬村、三村の境界だったこの峠を往来した人たちはここで休み、出会った村人どうしの会話が弾んだ場所だったのだろう。

北安曇から――

2000 年 5 月、唐松岳登山の合間に管沢から柳沢峠を目指す。鬼無里から帰って白馬のプロガイド　丸山忠昭に電話したら昭和 59 年 7 月の水害

で北安曇からの径(みち)はズタズタに寸断され 「たぶんだめでしょう」 と愛想ない返事だったが、途中土砂崩れで踏み跡が消えた管沢右岸の崩落現場を 300 米ほどへつって管沢左岸に渡り、沢から離れた右側山腹にかなり明瞭な踏み跡を見つけ、なんなく柳沢峠に。池内が笹藪の中から「信濃四谷」と書かれた看板を見つけ、それを抱えて写真を撮る。飯田たちはそのまま鬼無里にくだり、北安曇に下った山本が車を回送して彼らを迎えにいく。

北安曇と鬼無里を結んでいた奉納峠、柄山峠、柳沢峠、夫婦岩越の四つの峠に、地域文化が行き来し婚姻まで成立させていた時代は車社会で崩壊し、生きていた峠が遺産として残っているのはまだしも、いずれも死に絶え廃道と化した。

訪れた柳沢峠がそうであったように吹く風に笹や木々が揺れ、ざわめき、ふと風がやんだ静寂のとき 村人たちが聞いたであろう祭りの音。廃道の峠に聞く人はいない。

夫婦岩越(めおといわごえ)・1,070m

柳沢峠の翌日もうひとつの峠・夫婦岩越に。夫婦岩越への道は開削された白沢トンネルの真上に往時の姿を保って生き残っていると聞き、鬼無里から R・406 号線の白沢トンネル手前に車を置きザラ場を詰め木登り、ブッシュ漕ぎで探しまわるが見つからない。あきらめて捜索はやめにした。後日詳細に地形図検討の結果、もう少し西に車を駐車していたら見つけられたのだ。

病み上がりのガチャは昨日山の英気に触れたせいか、ブッシュ漕ぎ、ザラ場這いあがりをモノともせず「ああ、面白い」と俄然元気。薬より山歩きのほうが体によいようです。

鬼無里から柳沢峠　夫婦岩越。 98 年 4 月 25 ～26 雨宮 田辺 鳥居 武田 山本真博

北安曇から柳沢峠　2000 年 5 月 4 日 雨宮 米山 飯田 平井 武田 山本真博 池内・現役　資料 国土5万図 塩島

峠という国字にはロマンを感じるのです。背負子に荷を担ぎ人びとが行き来した峠道は、車社会の発達で安房峠 権兵衛峠 野麦峠のように峠の標識がなければ知らぬ間に通りすぎてしまいます。山里から峠を越えて山里への古い道は死に絶え廃道に。

伊那節にある「木曾へ木曾へと積み出す米は伊那や高遠(たかとお)の余り米」は馬の背に揺られ大平(おおだいら)峠(飯田と南木曾(なぎそ)を結ぶ)をいき、峠に近く昔から宿場町として発達した大平部落があったが、1970 年全戸集団移住して 200 余年の歴史を閉じた。いま観光遺産として保存された建屋はあるが、ここに息づいた地域文化はない。もうやたらと道をつくり車を乗りまわすのはやめよう。

日本の国土開発は地域文化を消滅させ、そこに生まれ育った人たちの心の故郷は消えた。

その地域の歴史は 井出孫六「注1」 伊藤桂一「注2」 市川健夫「注 3」などの、紀行・随筆で知るしかありません。写真集では『信州・100 峠』がある。「注 4」

注 1 『日本の風景を歩く』歴史・人・風土 92 年 大修館書店
『峠』～はるかなる語り部～　84 年 白水社 『山の貌(かお)』90年 新潮社
注 2 『峠を歩く 』昭和 54 年 日本交通公社出版事業局
注 3 『信州の峠』 昭和 47 年 第一法規出版株式会社
注4 『信州・100 峠』 1995 年 (株)郷土出版社
監修 井出孫六 市川健夫

2000 年 11 月

カムチャッカ紀行（アパチャ山登頂）

廣 瀬 健 三（昭和 36 経）

昨年の夏、初めて海外での登山らしい山行きに参加。

この山は、小川先輩が喜寿の記念すべきお年の時に登られており計画を知った時に、すんなりと参加を決めた次第。

7月24日

関空からの直行便でカムチャッカ半島の南の方のペトロハブロフスクカムチャキイ飛行場に着き、その後、車で約一時間の所の温泉郷、パラトウンカと言う所で一泊（当該ツアーの決まりのコースの模様）。関空―ペトロ空港間、約4時間のフライトで空港に着くと現地時間10：00PM前成るも、未だ明るい。夕食時、ウオッカを飲み、ロシアに来た事を実感。

7月25日

霧雨の中、軍用トラック改造車で標高800mのベースキャンプ地に到着。川底を猛烈に揺られること約3時間、室堂を思わせる草原の地に降り立ち、キャビンボックス型の宿泊施設に入る。リスに似た可愛らしい生き物が走り廻っており、楽しげな雰囲気を醸し出している。午後早速、通称　ラクダ山と言われる300m程の岩峰に向かう。

チョット高度度感のあるトラーバースで手こずり、これを断念、現地のガイドのお兄さんの足に乗って直登、久しぶりに岩場での緊張感を味わう。

7月26日

標高差2，000mを往復するので、ユックリとしたペースで進む。登って行く内に、この地独特の山景に気がつく。北アなどの連なる山なみとは全く違うし、さりとてヒマラヤやスイスの山とも異なる、富士山に似ているかも、そんな事を思いながら、ひたすら登る。

まもなく神々しいほど美しいカリヤーク山（3，456m）が雲の合間に万年雪を纏った三角形の鋭鋒を見せる。ハット息を呑む光景だ。アパチャ山（2，741m）、頂上直下の砂礫の登りには参った。三歩登って、二歩下る。足元が崩れて全く登りにくい、FIXロープを手繰り寄せ乍ら、息を切らしてヤット頂上に着く。

山頂ではロシア正教徒らしき人たちがミサをあげ、素晴らしいコーラスをハモッテいた。下りは飛ばしに飛ばし、9時間掛かった登りを帰りは3時間ほどと全く早い。

その間、雪渓で尻セードも楽しみ9：00PM頃BCに帰着。まだまだ明るく、先ずは乾杯そしてゆっくりと夕食を楽しむ。

7月27日

午後バラトウンカ温泉郷に帰るまで、時間つぶしを兼ねて、お花畑を散策。見たこともない高山植物が地面を這うように密集しており、花好きな人は、こまめに写真を撮っている。相変わらずリス系の可愛らしい生き物が人懐っこく寄ってき

て、気分を和ませて呉れる。

帰途、スパーマーケットに立ち寄り、ウヲッカなどを買うも、目当てのキャビアはとうとう見つからず残念。打ち上げの夕食会を和気藹々の内に終え充実感に浸りながら眠りにつく。

付　記:

—— ロシア人の登山者が多いのには驚きました。吾々日本人はジャケットを羽織っているのに、彼らは上半身裸のむくつけき男性やら、超ビキニ姿の若い女性もいて、一同ビックリ仰天。

—— 英語を話す若者が多いのは予想外、又もっと生活レベルが上っているかと思いましたが、彼の地は貧しいアパートが多く、金持ちロシア国というイメーヂからほど遠く感じました。

—— 3，000M級のカリャーク山は、登山者をして、登項意欲をかきたてる麗（霊）鋒。同道者の皆が一度、登ってみたいと言ってました。上部での岩肌が不安定で、現在、登山禁止とも聞きましたが、正確な事は分かりません。何とか登ってみたい山の一つです。

—— 参加メンバー:JAC関西支部の10名（男性6人、女性4人）JAC以外の人一名。ツァーリーダーは関西大山岳部OBの唯一人の若手（35歳）　7月28日　ペトロハブロフスクカムチャキー空港からウラジヲストックへ。そこで関空行きの国際線に乗り換え帰阪。

ー論 考ー

山を語る二篇　　～ 日本の山登り

～ 報道から山を語る五章

雨 宮 宏 光 （昭和33経）

日本の山登り

はじめに

かつて大島亮吉は氷雪と岩の欧州を起源としたアルピニズムを、森林と渓谷の日本の山に持ちこんで、日本的アルピニズムという奇妙な観念を生んだことを批判し、日本の山は日本の山らしく登れと主張した。ここに書くのは百名山に背を向けて特定の場所に集中し、その地域のすべてを知ろうとした山行者。

黒部八千八谷（くろべはっせんやたん）を探り歩いた若者。悪天と豪雪の黒部山群・剣・立山を執拗（さぐ）に攀じた登攀者。
山スキーで可能な山と下降ルートを追い続ける滑降登山者。
沢と谷の源流をさすらう遡行者。お遍路四国八十八ケ所結願にも通じる山の遍歴者など、日本の山を日本の山らしく登った異色の登山者たちについてです。

第一章　　それぞれの山

石間信夫（1914～1995）静岡県島田市出身
生涯山行数 2,624回　日数 約4,000日　登った山の数 1,614峰

早稲田大学卒、関西の阪神電鉄に入社。1943 年同社を退社し住友金属工業に入社、静岡に居を移す。財閥解体で同社を退社し 1945 年駿河銀行入社。1966 年本部勤務となり山にいけなくなると同年に退社（51 歳）。清水の木材会社に転職し 58 歳で退職。

著作『安部川流域の山と谷』 石間信夫・1957・明文堂

13 歳の三原山、15 歳、白馬三山を皮切りに海外登山も八回。亡くなる前年の山行は 22 回。現役登山者のまま 80 歳で逝去。

記録は 1 年毎に表紙をつけ、黒いとじひもで綴られ、その数 53 冊。400 字詰原稿用紙に書かれた、これらの山行記録は 13,000 枚。

この莫大な記録の存在は死後初めて明らかにされた。この記録を元に岳友、永野敏夫が編集し刊行された石間信夫の足跡を辿る書『孤高の先蹤者』には、マスクメロンと題された一節があり、新しい地図に足跡を赤のマジックで一本、二本～五十本～百本と塗り、真っ赤になったその模様がメロンの皮にソックリの地形図が四枚あったと書かれています。

五万図の清水・南部・千頭、二十万図の静岡―がマスクメロン地図で、その登山がこの地域に集中していた事が窺える。また、その登山の 60％は単独行で晩年、地図を赤色で塗りつぶす為に我がままが出た登山に仲間が辟易した秘話なども書かれている。

『孤高の先蹤者』80 歳現役で死す　編者　永野敏夫
発行者　石間富江　印刷　黒船印刷(株)平成9年発行。

ちなみに編者・永野敏夫は南アルプスの赤石山系と白峰山系に属する知られざる、山の道・120 選の

ガイドブックを上梓されており、以下に書名のみ紹介します。

『南アルプス　大いなる山　静かなる山』永野俊夫 ・ 永野正子 共著
発行人　山田英敏　発行所　黒船出版

志水哲也 （1965～ ） 横浜生れ　宇奈月在
素晴らしき　青春の山と谷

16 歳、屋久島・宮の浦岳に登って山に魅せられ 17 歳、45 日かけて北アルプスを全山縦走。19 歳、井川村に下宿し 97 日間で大井川の沢 28 本をトレース。20 歳、宇奈月温泉に下宿し 92 日間で黒部下流域の支流 15 本をトレース。21 歳、ロッジくろよんに下宿して、83 日間で黒部上・中流域の支流8本、剣沢本流を水源までトレース。24 歳、ドリュー西壁登攀。25 歳、谷から尾根へと向を変え単独の長期縦走に。冬期南アルプス全山縦走。冬期知床半島、春期日高全山と縦走を果たす。
1992 年(27 歳)冬の襟裳岬から 1 人で北へ、宗谷岬まで約 150 日をスキーで走破した精神力には驚きです(途中食料・燃料調達のため何回か下山し再度入山)。
1996 年(30 歳)プロガイドとなり「志水哲也山案内事務所」を開業。1999 年冬季・剣大滝登攀の敗退を契機として写真に転向、2002 年「志水哲也写真事務所」を開業し、日本の山と渓谷の魅力を写真と文章で世界に表現していくことを生涯の仕事とする。

その経歴は半端ではない。黒部の谷を遡行する最良の手段として地元に下宿したのは、天気予報の判断から天気の良いときだけに行動する「増水回避作戦から」と言っています。
17 歳から山と谷に入り浸(いりびた)り、始めての著作で 「単なる山行きでなく、どうやって登ったか、登ってなにを感じたか」を考えるため克明に日記を綴ったとある。
長い縦走中の山での生活。遡行では下宿先の生活と、彼の山では常に行動と生活が同居しており、厳しい自然を生き抜く生活技術、その生活の合間を思索の場とした体験が、著作の随所に表現されている。

著作『黒部へ』の序文で、20 歳のとき二階に下宿していた店、おでんや(安念)の昔に変わらぬたたずまいを語り、おかみさんとの久しぶりの会話から、いつしか話は 13 年前にタイムスリップ。
「ここで僕は黒部と出会った。20 歳の僕はこの部屋で、黒部への思いを募らせ、憧れと不安を交錯させながら、三カ月半の間、繰り返し、繰り返し、黒部の谷へ向かった」―として、次章につなぐ構成の巧みさ。書いてよし、縦走・登攀・遡行・スキーとオール・ラウンドの登山家にして、遡行という日本的アルピニズムの到達者である。

著作　『大いなる山　大いなる谷』 白山書房　1992
『果てしなき山稜』～襟裳岬から宗谷岬へ～　白山書房　1995
『黒部へ』 白山書房　1999
写文集「黒部物語」 みすず書房
写真集「黒部からの言葉　全3巻」 ハート工房
『山と私の対話。達人の山旅・1』 志水哲也編著　みすず書房　2005

志水哲也のホームページ　http://www3.nsknet.or.jp/~guriguri/

伊藤達夫 （1957～2009） 京都生　滋賀県大津市在
厳冬季の剣・黒部山群を執拗に攀じる　壁と尾根をつなぐ継続登攀を標榜

信州大学から京都府立大学大学院卒。京都府立大学院助教授（農学博士・森林計画学・登山学） 山岳部コーチ。京都左京勤労者山岳会理事。

その登攀は海外に背を向け、穂高、後立山連峰の賑わいを避け、厳冬と豪雪、悪天候のもとで、 もっとも困難な場所、剣・立山・黒部山群に挑み、いまなお日本国内でアルピニズムを継承する社会人登山家として屈指の存在。

山岳部コーチとして、京都府立大学山岳部創立 60 周年・記念講演の、“黒部の山々”と題された内容には、明治維新以前から黒部の川に分け入り、イワナを釣り、谷や尾根でクマやカモシカ追った猟（漁）師について語り「注」、特に毛皮を採るためのカモシカ猟は厳冬期に行われていたことから、それら先人の山での生活の智恵（しのぎ）に思いをいたらし、現代の登山者がここから多くの学ぶ事がある、と言われています。

注 遠山品右衛門 （1851～1920）
24 歳で平に根拠地を作り、冬は棒小屋沢や東谷で猟をする。
そんな生活を 40 年、大町の妻子が待つ実家には、年に 2 ケ月ほどしか帰宅しなかったといわれている。
鬼窪善一郎 （1914～1997）
猟師・釣師・大東鉱山や山小屋のボッカ・ガイド・救助隊員として黒部（主に上流域）の山を歩き回り、後年、夏は三俣山荘の管理人。冬は猟師として活躍。

伊藤 達夫 記念講演より

「私達京都府立大学山岳部は、黒部の山々を、夏にはヤブの中をクマの道に助けられながら冬にはカモシカのトレースに導かれて、歩き回ってきた。
追求してきた事は山を知るということだ。地形・植生・雪・気象・・・・山を知り、山で自由に行動できる能力こそ、登山者として身に付けるものだと考えてきた。この能力は、黒部を拓いた猟師たちがもったものと共通するだろう。確かに猟（漁）師たちはあえて困難な岩場を登ることはしない。しかし私達が黒部丸山東壁や大タテガビン南東壁から剣への長期にわたる冬期の連続登攀に成功してきた理由が登攀能力の高さにあるのでないことは当事者として断言できる。
「山にいる力」 が違うのだ。この力がないとお手軽日帰りのクライミングしかできない。
黒部の山を登ることによって、府大山岳部の伝統ともいえる **「山にいる力」** をこれからも鍛ていきたい」。
『登山・登攀半世紀の記録』 京都府立大学山岳会50周年記念誌・2007 所収より抜粋。

高度の条件を除くとき、豪雪の黒部山群・剣はヒマラヤより厳しい。シェルパ・コック・ポーターつきの登山ではない。入山から下山まで全てを自分たちでやりぬく力は、ただものではない。

伊藤達夫氏は 09 年 4 月 26 日・北ア・鳴沢岳で遭難死亡したが、この稿は 07 年に書いたままにしています

登攀クロニクル（無雪期を除く）
1989 年 12 月 丸山東壁中央 ・ 中央山稜 ・ 雄山東尾根下降
1989 年 12 月～1990 年1月 （17 日間） 丸山東壁南東壁～丸山中央山稜～別山尾根～剣岳
1990 年 12 月～91 年1月 （11 日間） 丸山東壁中央大ハングルート開拓
1991 年 4 月～5 月 （9 日間） 丸山南東壁 OCC ルート～源次郎尾根～剣岳～早月尾根下降
1991 年 12 月～92 年1月 （15 日間） 丸山東壁中央壁～源次郎1峰平蔵谷側下部フェース～剣岳～早月尾根下降
1992 年 12 月～93 年1月 （15 日間） 大タテガビン南東壁正面壁～別山南尾根～真砂尾根～別山尾根～

本峰南壁AⅡ稜～剣岳～早月尾根下降
1993年 3月 (8日間) 雄山東尾根～源次郎1峰平蔵谷側上部フェース～剣岳～早月尾根下降
1993年12月～94年1月 (15日間) 大タテガビン南東壁正面壁～別山南尾根～真砂尾根～雄山東尾根下降
1994年12月～95年1月 (16日間)丸山東壁中央壁～中央山稜～真砂尾根下降～八ツ峰1峰川稜～
剣岳～早月尾根下降
1997年12月～1月 黒部別山大タテガビン南東正面壁～三の窓尾根～剣岳
1999年12月 冬季・丸山南東壁OCCルート初登
2001年 3月 黒部別山大ヘツリ尾根～北尾根下降～黒部横断～牛首尾根～鹿島槍
2002年12月～03年1月 剣・東大谷右尾根
2003年 3月 黒部別山大ヘツリ尾根

早川康浩 (1959～) 群馬大学医学部卒 開業医 石川県在
日帰り速攻 山スキー登山の第一人者

32 歳、仕事先の富山で見た剣岳に魅せられ、登山用具一式を買い求め剣岳に。以後居住する近隣の山々に激しい日帰り山スキー登山を継続中。彼はホームページで、次のように・・・・・。

「僕は自分は遭難する事はないなんて自信過剰な持ち主ではありません。仮に単独で山スキ―へ行って自然に負けて死んだとしてもそれは仕方のないことだと理解していますし、山スキーはある意味で命がけのスポーツであると理解した上で可能な限り、リスクを減らす為にはどうしたらよいのかということを、おのおのの判断で、決めるべきことだと思います」。
勤務医のさなか8年かけて 100 名山を完結し以後、早川のもっとも好きなスタイル、スキーで自由に登り自由に滑る速攻登山を、加賀・越中・越後・飛騨・信濃・奥美濃地域の山々に。
さらに、アイゼン・ピッケル・スキーを駆使して、日帰り速攻で 3,000m峰に登頂し、スキーデポ地点から滑降下山と、残雪期にも執拗に雪を求めて北アルプスへ。

年間約7ケ月、四駆とマウンテン・バイクを併用して、速攻山スキ―登山にのめりこむ。
車を置いた場所に戻る必要からコース選択に制約あるが、素晴らしい技術と体力を活かして出発と下山が違うコースを選択されたとき、(車回送協力者の有無。復路の滑降コースを偵察できぬ不安あるが)その山スキー登山の領域はさらに広大に。

早川さんはマラソンみたいな耐久と速度を追求する山スキーの登山中でも、 その速報に期待する信奉者を意識して、登山中に手袋をはずし写真を撮る耐えがたい労力を提供されている。
開業医として休暇ままならず日帰り速攻は天候急変の危険少なく、むしろ安全な登山といえますが体力あっての話で、いまや人生半ば。いつ、日数に余裕をもたれ山に憩うスキー登山を楽しまれるのでしょうか。

早川康浩のホームページ http://w2222.nsk.ne.jp/~turu/jiko.html

はるたのりひと
治田敬人 (1958～) 地方公務員 埼玉県蓮田市在
日本独特の沢登りに憑かれて

1980年、ハイカーから最初の鳥甲山単独登山を契機として、西上州のヤブ尾根、妙義の沢に。以後、南ア南部・東北・奥秩父・上越と各地の沢を探る。
そのほとんどが沢の遡下降で1984年、年間33回80日の沢をこなし、85年25回70日と沢一筋にの

めりこむ。そのほとんどが単独行で日帰りか 2 泊 3 日位までが原則です。
冶田は、「ピークハントとは根本的に違う。地図で情報はつかめない。見晴らしはきかない。ただ谷を忠実に遡る。逃げ道も無い。沢で対峙する障害にあった瞬間、自分の力が試される。渓谷には流水・ゴーロ・伏流・滝・高巻き・ナメ・ゴルジュ・廊下・淵・トロ・スラブ・ガレ・草付きといろんな地形がある。だから、登攀から野外生活までの総合的技術と精神力が必要となる。山のいろんな面を知りたいので一度行った所には行かない」と。

(『彼ら挑戦者』・大蔵喜福・東京新聞出版局・1997 に依拠)

近年、雪稜・山スキー・アイスクライミングと楽しみの幅を広げその趣味を継続されており、1993 年設立した『山登魂・やまとだましい』に最近の活動が記載されています。

山登魂のホームページ http://yama-to-damashii.outdoor.cc/

南川金一 (1940～) 東京在
日本の山の再発見 お遍路結願にも通じる 遍歴の やま、また、やま

「毎週末はもとより、盆、暮れ、正月もなく家をあけ、山の友人からさえも、”家庭を顧みない極悪非道人” 呼ばわりされるとあっては弁解の言葉もない」として遍歴を続ける南川。
その破天荒な足跡は！！

著作『山頂渉猟―2000メートル以上の642山―その総てに登った男の記録』 白山書房

著作の表題が全てで特に書くことはありません。南川さんはその登山速報を、画像・文章・図表で詳細に報告されており、下山して即、報告の労力に感心します。
読図力、勘にくわえて GPS で現在地を正確に測位する。また、あらかじめ設定したナビルートを実際に踏破した軌跡を辿って検証する様子が目に浮かびます。

ところで日本には 2,000 メートル以上の山はいくつあるのでしょうか。『日本山名総覧』「注」には、国土地理院に記載されている日本中(天保山・標高 5 メートル～富士山 3,776 メートルまで)の山の住所録がありますので興味ある方は検証してください。
古希ちかく、南川さんは年齢を考えて登り易い山はあと廻しと、ホームページに書かれています。
あと廻しの中に 2,000 メートル以上の山は幾つ残っているのでしょうか・・・・・。

南川さんは次のようにも―――。

「標高 2,000m 以上の山の数も 800 山強なので一生かければその全てに登れる可能性があるので、全山制覇を目標にしていますので別リストとしました。 まあ、この中にはかなり危険な山もあるので本当に全部登れるかどうか自信はありません(^_^;) 登り残しが少なくなったら考えます。まだまだ先は長そう。」

注 武内 正 白山書房 2000 年発行。98 年 11 月現在、国土地理院発行の 2 万 5 千図、約 4,400 枚に記載されている山名は 16,700 山。地元で何々山と呼称されている山名を加えて、18,000 山の住所録を記載した労作です。

南川金一のホームページ http://www1.parkcity.ne.jp/mxl02562/index.htm

第二章 日本の山 ～その全体的状況への希求～

異色の登山者たちを山へと向かわせた動機の客観的基準は、標高／地域／地形にあったといえる。標高／地域／地形ならどこの山にもあるが六人を異色としたわけは、標高は 2,000 メートル以上、地域は

静岡県、谷は黒部、山は黒部山群と剣・立山・・・など、それぞれの登山者がその山行きにある種の（しばり）を付けていたからです。

登山の動機に基準を持ち込むなどは非論理的であるが、それぞれの動機を分かりやすくするため必要上の（仮りの客観的基準）として、標高／地域／地形を基準としたことを認めていただくとき、南川金一は標高を、石間信夫は地域（静岡県）、治田敬人は地形（沢）、伊藤達夫は地域（黒部山郡／剣／立山）、志水哲也は地形・沢と谷「注」と尾根を、早川康浩はスキー登山ゆえ滑れる地域を基準とした。

注　沢と谷は同一地形であるが、なぜか信州では「沢」、越中では「谷」という。大雑把には関東周辺では「沢」、関西周辺では「谷」で、ココではその詮索はせず、その地域の呼称による。

そしてここで問題とするのは客観的基準（しばり）ではなく、それぞれの登山者が求めた満足という主観的意識（心性）についてであります。
その山行きが彼等に与えた満足は各人さまざまではあるが、標高／地域／地形という（しばり）のうちでも、日本の山の全体的状況―“も”―知りたい、という気持ち―心的状況が、それぞれにあったのではないか。
勿論、―“も”―　は多くある登山の動機のひとつでしかないが。
どんなにヒマと金と体力があっても、長野・岐阜・静岡の三県、いや、二県でもいい。そのすべての山に登るのすら難しいのに百名山に登った人は「もう日本の山は全部登ったような気分で―全体的状況を知った―次は海外と・・・・」言っていたが、なんとなくその気持ちはわかります。
～三千メートル峰のすべてに登ったなら、三千メートル以下はすべて登れる、登ったのも同じ、という感覚みたいなものですが～

～以下は断っておきますが、私の勝手な推測です～

それぞれの能力、立場、境遇に応じて、日本の山の全体的状況―“も”―知りたいという希求心が、彼等をしてあくなき登山へと向かわせているのではないか。
治田敬人は「山のいろんな面を知りたいから、同じ場所には行かない」。志水哲也は谷の全体的状況は知ったとして谷から尾根（縦走）に。伊藤達夫は厳冬の丸山東壁に登ったなら他の壁は登らずとも登れる、という感覚に。百名山を完結した早川康浩は、無雪期の日本の山の全体的状況は知った―なら、雪の山の全体を知りたい。二千メートル以上、七百山（？）に登った南川金一は、日本の山すべてを登ったような感覚に。

ヒマラヤともなればそのすべてに登る事など不可能ですが、14 座を達成したメスナーはその自伝で「八千メートル峰についてはもう特別な思いはなくなった」としている。八千メートル峰のすべてと七大陸最高峰のすべてに登ってメスナーは、世界にある山の全体的状況を知りたい、という飢餓感が満たされたからでしょうか。登山行為を終了しています。

『永遠の未踏峰』渡部由輝　山と渓谷社　2005　引用

そのホームページで、すべての山行、登山観、日常の一部までを公開する。
ネット時代にして現れた書物とは異質の自己表現への希求ともいえる登山記。
多くの登山愛好者がその情報に接し恩恵と刺激をうけている。ホームページのリンクはご自由にと一切の利害関係抜きで、その登山速報を公開しつづける異色の登山者たち。
そして、彼らのこれからは、 80 歳まで現役だった石間信夫さんを知るとき日本の山の全体的状況も知りたいという飢餓感が満たされるまでは、
南川さんの言をお借りして ―― 「まだまだ先は長そう」。

第三章　　山岳学への接近　～山人に学ぶ　山での危険回避～

山での安全について気象予報受信、GPS の利用、装備の進歩と、科学の発達が過信されるとき。
日本の山独特の山が発する危険―虫の知らせ、予兆について、かつて田口二郎さんが、「今西錦司さんの山」 日本山岳会 （山岳‘93） という一文の中で、
『自然の発する情報発信に対して、アルプスにおいては、地形、氷河などの変化を記憶する能力、日本においては木の葉や日の光などの変化を察する能力があり、これらを受信することのできるのは山を知り尽くした人にしてできることである』と書き、
平井一正さんは、甲南『山嶽寮』 75 周年記念号 2001 甲南山岳部 に寄せて、の一文で、
『今西錦司は日本の山人の情報受信能力が欧米のそれと違っていることから、**日本の山独特の登山を体系化した「山岳学」** を生み出そうとしたが未完に終わる』、と書かれ、続けて『今の若い人は、昔のように 1 年の 1／3 も山に入っているということはなくなりましたし、道具が発達し、環境問題がやかましくなった結果、自然との対話も少なくなりました。その結果、今の日本の登山は欧州のそれに近づいているようです。自然からの予知能力もアルプス型になるでしょう。今西が求めた日本独特の登山はだんだん影をひそめていくように思われます』と、書かれています。

そして、昭和の巨像・今西錦司は、かつてつぎのように・・・・・。
西欧起源のアルピニズムに尺度を合わせると、日本の山ではその対象があまりにも少ない。
だから外来アルピニズムを横におき、日本独自の山に対する道理（概念）を、たてねばならない ― として 「山とはなんであるか。山とはどのようなものとして認められるべきか」 という命題を掲げ日本の山の全的把握を目指し、『日本山岳研究』の思索と研究にとりかかる。

ここでまず山を知覚し認識するには、山（自然）が発信するものを受信する能力がいる。今西は、この能力が山人の直感と勘にあるとして、それを山人の日常に接して探り、さらにこの山人たちが持つそれぞれの知識の系統化と同時にそれの総合化を目指し「山岳学」の構築を志す。

そのためには「カゲロウの仕事から、イワナ・アマゴの仕事にうつり、そこでひと夏を黒部川ですごすような釣師の生活とも触れ、つぎにシカやクマを追う猟師の仲間にはいる予定であった。それから私も彼らとともに、彼らの妻子がすむ村にくだって、彼らをとりまく山村の生活を調べおわったころには、私も相当年をとるが、私の山岳研究もそのころには一冊の本として、ようやくその体裁をととのえるに至るであろう、と考えていたのである」。

『東西登山思考』 田口二郎 岩波 1995「今西錦司の山」

今西の三十代に書かれた論文を集成した『日本山岳研究』は 1969 年に刊行されたが、この書は戦争によって研究が中断され、また、今西自身がその晩年は京都北山的・山登りに里帰りして研究は過去に流れ未完となる。
さらに『日本山岳研究』は、いかにも刊行の時おそく、今西の研究と思索の足跡を辿る書とはなりえても、今西が求めた “山について考える”は、いまさら考える事に**―意味無し―**の時代となって今西のあと山岳学「注」を継承する人は現れぬ。
よってここでは山が発する情報受信は山人の直感と勘にあるとした、今西の論考の一部と、山人たちの自然に対応した山での生活技術 （しのぎ）だけをとりあげる。
なぜなら、GPS、ガスコンロ、テントほかの近代装備。もしそれらが山で突然に機能を失ったときの対処方法。そこには山人伝承の智恵と知識が時を超え、いまなお意味があるからです。

注　山岳学に関しては『東西登山思考』（田口二郎 岩波書店 1995「今西錦司の山」）に詳しい。

田口さんは、今西がアルピニズムの舞台をヒマラヤに求め、そのとき日本の山から今までのアルピニズムを追い出したのだから、別の道理（概念＝山岳学）をたてる必要があり、ソレを今西の気分と表現されている。また、もし今西の山岳学が完成していたら欧州の無生物的な氷河・雪・岩の山の世界に対して、今西の生んだ世界はもっと生物的・民俗学的色彩を帯びたかも知れぬとも言われている。

また、ある人は今西の気まぐれで、「あんなものは学問ではない」と、いっている。

マタギ　言い伝え

＜天候＞　朝に空を見で雪ひとつなぐ晴れででも山の上の方がゴーゴー鳴ってだら、午後から必ず荒れる。

＜夜営＞　雪穴掘って火をたぐごど。場所は風が強くても、峰にするごと。沢だば風こねくていいべと思うども、雪崩がきたら逃げられぬ。それとガンビ（シラカバの樹皮）を持つこと。ガンビは火が強くて生木でも燃え移る。たき火を絶やさねば、雪水のんで何日でも生きられる。

＜雪崩＞　山中で雪崩の危険を察知した時は、みんなで大声だして雪崩をおこさせてから通ること。新雪は落ち着がねがら、すぐ崩れる。表層雪崩だ。何人かで歩ぐ時は先頭は一歩一歩踏みしめで、後の人は登り斜面の場合は前の人の足跡の一寸（約三センチ）先、下り斜面の場合は一寸後ろを歩ぐど雪崩ね。春先西向きの急斜面はもっとも危ない。

（朝日新聞 秋田支局取材の記事編集 『最後の狩人たち』 長田雅彦 無明舎出版 1977
取材は秋田県北秋田郡阿仁町）

言い伝えとは「こうであった」と語り実際に体験した伝承譚の集大成であるが、気象予報は 100％的中せず、地震は予知できぬのと同じく「こうであった」なら「そうなる」でなく、「そうなるかもしれぬ」程度と知ったうえで以下を参考としていただきいのです。

危険予知の勘・直感と山での　（しのぎ）を鍛えるには、西欧科学の視点ではなく、山人に伝承された言い伝え、山の獣は本能的習性から雪崩のおこりそうな場所にはいかない。

雪の斜面に遊ぶウサギの姿が消えた時の“あわ”（新雪一次雪崩）の予兆。嵐や大雨を察知する虫・昆虫・動物の気配。

イワナが姿を潜（ひそ）めた時の増水懸念。川の水が濁ってきたら土砂崩れに注意。けもの径（みち）が導く安全な登降路。樹林帯で水音を聴いた時、聴覚から感じとる滝の有無、水場までの距離。雨天、雪中での焚き火。植生から判断する高度・方角、など、など・・・・・。

自然の発信を示唆した甲南山岳会々員・山本恵昭君の　掲示板への投稿を紹介します。

結構ハードです　山本恵昭　2001/11/13（火）00:17　～原文のまま～

キノコ探しを本格的にやると、結構ハードです。沢のぼり、岩登り、泥壁滑り台、ネマガリタケこぎ、時には木登り。何回行っても森の中で迷ってしまいます。

明るいうちに道へ出れるのか不安になることもしばしば。ビバーク装備必携。“**薄っぺらい登山技術は通用しません**”。直感的に自然を読む総合力が必要です。

原生林を徘徊していると、登山道では感じられない**「もののけ」**の迫力があります。毎回ヘロヘロになりながらも良く出かけているのは、キノコを採りにというよりも、そんな　自然の迫力を感じに行っているのか

もしれません。面白いですよ。もちろん、登山道経由でブラブラ行くという選択肢もありますが。

妙高山をバックに　山本恵昭　2002／03/31（日）01:47　～原文のまま～

この山行きで特に面白かったのは、森の中のコースです。ルートハンティングというと、地図と磁石で地形とにらめっこするものだと思っていましたが、森の中で自然と導かれていく感覚がありました。雪に覆われた森の中を見渡していると、なんか不自然な空間があって、その空間をつないでいくと、狙い通りの場所に出ました。森が自然に教えてくれている感じです。こんな感覚は今までの自分にはなかったように思います。各地の原生林を訪ねて、菌類や樹木の勉強をしてきた成果でしょうか。ますます、山が面白くなってきました。（火打山スキー登山より）

山本恵昭は、昭和 56 年 8 月　奥鐘山西壁中央ルンゼ単独登攀　(23 歳)。屋久島・鯛の川　ソロ遡行(23 歳)。昭和 57 年　南米　ワスカラン峰(6,768m)ソロ遠征・ソロ登頂(24 歳)。北海道・クワウンナイ川・ソロ遡行。読図力に加えて危険を予知する能力(勘)に優れ、卓越したスキー登山技術を、海谷山塊・頚城・剣・黒部周辺で活かす。また、家族を連れて黒部・赤木沢に遊び、夫婦で西穂・奥穂の岩稜散歩と。

さらに、当会々員たちと山スキー登山・遡行・山菜・きのこ採りに興じるなど、よく山を知って自然に身をゆだね山の全体を楽しむ。その知的な山行は素晴らしい。　(雨宮宏光　追記)

あとがき

古い山の雑誌や本から集めた資料は阪神大震災で自宅半壊し、解体撤去の瓦礫（がれき）のなかに。
難を逃れたもう1台のパソコンと資料整理の格闘のとき、 削除した資料のほとんどは「山を考える」についての文章で、現代の登山ではもう考える意味がないと思ったからです。

しかし「山を考えた」あのころの山からは、 山以外のさまざまな事も教えられました。
いま、異色の登山者たちのホームページからは、仲間と思索し語りあった山を書いた大島亮吉の『涸沢の岩小屋のある夜のこと』のような山は感じませんが、現代の登山では「棒高跳びを考える」ことに意味がないのと同じ程度に　山を考える　ことにもう意味がなく、山頂は次なる山への単なる通過点として、単純に記録と状況を書かれたこの速報は、ありもしないのに感動があるかのように装って書かれた文章より純粋で、書き尽くされた山は、登山報告である限り“紙からデジタルに”　もう、このような方法（電子媒体）でしか語れないでしょう。

けれども「山を考えた」あのころに読んだ文章は、 やはり美しかったと思います。

2004 年 9 月　(2008 年 10 月加筆)

引用　参考　文献　　本文中に挙げたものは除く

自然を読み解く山歩き　小泉武栄　JTB パブリッシング
幻の漂白民サンカ　沖浦ケイ　ちくま文庫
第 14 世マタギ松浦時幸一代記　甲斐崎圭　中公文庫
山と猟師とケモノたち　山本福善　南雲藤治郎　志村俊司編　白日社
秋田マタギ聞書　武藤鉄城　慶友社
マタギ・狩人の記録　戸川幸夫　新潮社

長い壁・遠い頂　井上進　神無社
登山史の森へ　遠藤甲太　平凡社
評伝 今西錦司　本田靖春　山と渓谷社
柳田国男全集　筑摩書房

報道から 山を語る 五章

第一章　あっけなく死んだ 登山家たち

技術・体力が尽き果てての死なら甘受できるだろう。雪崩、氷塔崩壊など運に左右された死なら諦めもつくだろう。彼等は命をかけた登攀では見事に成功した。だが、そうでない山ではあっけなく死んだ。

バブ・チリ・シェルパ（ネパール・1966～2001）　クレバスに滑落

2000 年 10 回目のエベレスト登頂。2001 年 11 回目、6,500m付近でテントから出て顧客の写真を撮るため後ずさりしていて滑落死。

あとずさり―――雪面を踏んでいたはずの靴底はクレバスに！！

エベレスト最多登頂を達成するはずだった彼の思いはクレバスに消える。

リオネル・テレイ（佛・1921～1965）　草つきでスリップ

リオネル・テレイ「注」の著作『無償の征服者 』のサブタイトルには ～役にも立たないものを征服した人たち～ とあります。彼は 1965 年 9 月 19 日、生まれ故郷に近いジェルビエ東壁登攀中パートナー共に墜死して、大登山家の生命は一瞬のうちに尽き、役にもたたぬ行為が有害であることを立証した。

命がけで挑んだ山では死なず、息抜き遊びのような岩登りで、それも核心部を登りきり最後の草つき斜面で足を滑らして転落した。濡れた草つきは滑りやすいのにテレイと同行者はプロテクトを怠っていた。

クリス・ボニントンは、テレイの死から得た教訓をこう語っています。「3 週間前、テレイが滑落した同じ岩場で、私達は穏やかな景色とクライムを楽しんでいた。

岩登りの危険は実に四六時中あるものだが、アンナプルナの場合のように、危険が身に迫り、人が生命を守るために全神経を研ぎ澄ましている時よりも、易しい場所で動いている場合の方が、致命的な墜落につながるといった事故が起きやすい。テレイの死は私に、この事実を今いちど確信させるものだった」。

注 1950 年代の世界的登山家。1950 年人類初 8,000m・アンナプルナ登頂での支援活動。1955 年マカルー（8,463m）初登頂。以後世界五大陸に十数度遠征しすべて成功する。特にパタゴニアの怪峰フィッツロイの初登頂は圧巻。このテレイが 1962 年ジャヌー（7,710m）に隊長として遠征するにあたり、遺書を兼ねた自伝が『無償の征服者 』とされている。

ルイ・ラシュナル（佛・1925～1954）　スキーでクレバスに突っ込み

リオネル・テレイとアイガー北壁第二登。1950 年 6 月 3 日、モーリス・エルゾーグと人類初の 8,000m・アンナプルナ（8.091m）の登頂者となる。

ラシュナルは多くのクライマーがそうであるように、始終スピード狂で、彼の無鉄砲な運転ぶりは伝説的なものだった。そしてアンナプルナから帰って四年目、シャモニーでスキー中クレバスに突っ込んで生命を落とした。

アンナプルナで下降中滑落しピッケルと片方のアイゼンを落とし、雪上でうずくまっていたラシュナルを

救い、テントに収容したテレイのおかげで一命をとりとめたのに。テレイを兄と慕い 2 人の山では幾たびとなく死線を超えてきたのに、山では死なずスキーで死んだ。

『現代の冒険』・クリス・ボニントン・岩波書店・1987　『処女峰アンナプルナ』M・エルゾーグ・白水社・1953

ヘルマン・ブール（オーストリア・1924～1957）　尾根で転落死

ナンガ・パルバットの英雄ブールは 1957 年 6 月 27 日、チョゴリザで雪庇を踏み抜き転落死する。

そのとき確かに彼は疲れきっていた。だからミスが出た。この遭難のほんの 2 週間まえ、ブロード・ピークでブールは気力尽きごろりと体を横にして動けなくなる。

２人一緒での登頂は無理と思ったクルト・ディームベルガーは「1人で登頂してもいいか」と訊ねブールが同意したので 1 人で登頂し、下降中信じられぬことに立ちあがってふたたび頂上へと歩むブールの姿を見て下降をやめ、ブールを待って向きを変え再び頂上に。1 日で二回も同じ山に登頂した。

チョゴリザ登頂を目指したその日、7,300m付近でブールは 「もう引き返さねばならない。この猛風で足跡が消され迷って雪庇の上に踏み込むかもしれない」と判断し 2 人は引き返す。ブロード・ピークでの下りと同じようにクルト・ディームベルガーは十メートルほど先に立ち、かき消されていく足跡を全神経を集中させてさぐりながら下降中、始まった雪面の振動―足元が沈みこむように感じたクルトは夢中で右方向へ飛び移った。うしろを見るとブールがいない。見たのはブールの足跡だけ。それは雪庇の切れ目で終わっていた。

<u>雪庇の上を歩いていた2人だが</u>、「夢中で右へ飛び移った」というクルト・ディームベルガーのような反応は、衰退しきって両足を交互に前への本能だけで動いていたブールには無理だったのか。

2 人の重さに耐えかねて崩落した雪庇は、後ろにいたブールだけを巻き込んだのか。

クリス・ボニントンはブールの衰退から起きたあっけない死を、自分が弱くなっていることを知りながら、なお周りにそれを言い出せぬブールの気持ち、そこには大登山家が下り坂にさしかかった時の哀切感が漂うと表現している。

ナンガ・パルバット登頂後の顔写真には、凍傷と疲労の極のしなびた老人の顔が映っている。

高所で酷使され痛めつけられていた肉体は、その余力をふりしぼって　ブロードピークに、チョゴリザに。

32 歳、滑落し薄れいく意識のなかでブールはなにを思ったでしょうか・・・・・・。

『The last tracks in the snow』 出典：R.Messner, H.Hofler “Hermann Buhl” The Mountaineers, Seattle, 2,000・越田和男訳

『現代の冒険』・クリス・ボニントン・田口二朗訳・岩波書店・1987

『ブロード・ピーク』・マルクス・シュミック・横川文雄訳・朋文堂・1963

ブール転落時・記述の元は3人ともすべてクルト・ディームベルガーであり、その内容は大筋で一致するが、『ブロード・ピーク』・マルクス・シュミックの記述内容は他の2人と違い、転落死の原因に触れている。

◆　先行してブロード・ピークに登頂した 2 人（シュミックとフィリッツ）は、クルトが 1 人で登ってくるのを見てゾッとする。クルトは自分たちがつけた踏跡から外れ雪庇の端を通って登っていくではないか。これはまさに狂気の沙汰である―クルトは若く雪庇がどのように危険なものかどうやらあまり経験していないようだった・・・・。

◆「雪庇が張り出した稜線を深い雪を踏んで進んだ。その中をまるで泳ぐようににして進むのは大変だった。雪庇に近づけば近づくほど雪は固くしまってくるのだ。」

つまり楽な道は危険な雪庇の上を歩くことになるのだ。ただ最大限の精神集中を行って自分（シュミック）に向かって《雪庇の上にでるな・・・雪庇の上にでるな・・・》と言ってきかせた。

わたしの考えではブールが切れ落ちた雪庇もろとも深く墜落したあのチョゴリザの稜線で起きた悲しい事故の原因がこ

の《思考欠如》だったことはほぼ間違いない。
稜線上を下降中、絶対にむずかしいと考えられない所で先頭のクルト・ディームベルガーが通りすぎた箇所で、ぞっとするような深淵に墜ちこもうとは・・・・。

◆ ブロード・ピークのベースキャンプで、ブールは「わたしは凍傷で足の具合も良くなく、また疲れているので早く帰国したい」と連絡将校に話している。

小西 正継（1938～1996） マナスル登頂も 下山中 行方不明 ？

山岳同志会を率いてヒマラヤでは「無酸素・シェルパレス・バリエーション」を旗印に先鋭の闘いを展開した人物。

1980 年カンチェンジュンガ、1982 年チョゴリ（K2）、1983 年エベレストは、すべて未登。

以後、先鋭登攀から楽しみの登山に転向し、1994 年ダウラギリ1峰登頂。95 年シシャパンマ登頂。96年 10 月1日マナスル登頂も下降中 7,800m地点で行方不明（57 歳）。

同行者・三村雅彦（31 歳）は疲労しきった小西を見て午後 11 時ごろ、ビバークを提案する。

「小西さん、この上に岩場があります、あっちのほうが風あたりがすくなそうなのでいって見てきます。待っていてください」 「おお、そうか」これが小西の最後の言葉となる。三村がビバーク・サイトを確認し小西を連れに戻る。姿はなかった。

46歳から登山を再開し、酸素、ポーター、シェルパ、コックつきの登山に「こんな道楽ができて幸だ。あと 10 年はヒマラヤに通いたい」そんな 10 年をはじめて3年目それがマナスルでした。

『残された山靴』・佐瀬稔・遺稿集・山と渓谷社・1999

1982 年、チョゴリ（K2）遠征で頂上攻撃の際、登攀隊長・小西政継が登頂隊員に与えた訓示

「ぼくが仮に 8,500m付近で倒れた場合、助ける必要はまったくありません。なぜなら、これは僕の力と山の力を読みこむ計算を間違えたぼくの失敗だからです」。 突然の行方不明 ？ 鉄人・小西 正継は自らの言葉に殉じたのでしょうか・・・・。

『砂漠と氷雪の彼方に』チョゴリ登頂の全記録・小西正継・山と渓谷社・1983

第二章 K2 ～ 女性クライマー 2人の 生と死

ママさんクライマー **アリスン・ハーグリーヴズ（英国・1962～95）**

～女性 5 人目の K2・登頂者となるも下山中に死亡す～

13 歳から岩登りに魅せられ両親の薦めるオックスフォード進学を断り「自分はクライミングの道へすすんで努力すればそれなりのところに納まるだろう。学問の道に進んでも、不満と退屈以外何も得られない」と、16 歳からジム・バラードが経営するクライミング用品店で働き合間に岩登り。1980 年アリスンは初めてフランスとスイス・アルプスに。3年かけアルプス全域で氷や氷雪の挑戦的ルートを登攀する。たまたま登山器具の展示会で知り合った米国の登山家、ジェフ・ロウに誘われ初めてのヒマラヤ、カンテガ（6,799m）に。1988 年・26 歳、ジム・バラード（42 歳）と結婚し 10 月に長男 T・J・バラード、1991 年 3 月、長女 K・M・バラードを出産する。だがバラードが経営する登山用品店の営業不振から 1992 年、彼女は生活のため英国のアウトドアーメーカーと次のような契約を取り交わす。

「ひと夏で、ヨーロッパの古典的北壁ルートすべてを 24 時間以内で登る。その対価として装備と資金援助をうける」しかし 1993 年バラードの店は人手に渡り親子 4 人は残った唯一の財産、車でアルプス山麓に。ママが登攀している間親子 3 人は車内で寝泊り。

アリスンは死に物狂いで自分個人の動機に根ざすというより金のため 3 ケ月で、マッターホルン、アイ

ガー、ドリュー、ピッツ・パディル、 チマ、グランド・ジョラスと六つの北壁をたて続けにソロで完登する。だがこの登攀は「幼い子供をおいて、スポンサーと名声目当てに岩狂いする非常識。もし滑落死したら子供はどうなるのか」と、クライマーや、コラムニスト、社会科学者達の非難を浴びた。

では、アリスンはどうだったのか。1 人泊まった安ホテルで、ロビーを走り回る他人の幼い子供の姿に涙し、「トムとケイトがそこにいない。こんなことには耐えられない。次に山に行くときは 4 人一緒にいく」と決め、1994 年 7 月、家族4人でエベレストのベースキャンプに。
「英国には住む家も無く食べていけないから、家族でネパールに」 と言っているが、交通費、宿泊費などを考えるとおかしな話で、山狂いと母親との狭間で分別をなくしていたのでしょう。無茶なこのエベレスト行きでケイト(3 歳)は高山病になり、アリスンは娘を背に、ベースキャンプから離れています。

エベレストから帰国したアリスンは「バンフ山岳映画祭」に出席。そこで同席したクライミングを引退した後も、ずっとスポンサー契約や著作の印税で悠々と過ごす女性達の姿を見たとき、ここでなにか「もう一つ」と、1995 年ラッセル・プライスの公募隊に1万ドル支払って個人参加し(他人の支援を受けない条件)無酸素、サポート無しでエベレストに登頂する。 続けて同年、「一年の間に世界一位、二位の高峰を陥(お)とせば、もう二度とローンの支払いや食費に悩まなくていい」 と、リチャード・セシル(米国)と K2 に。ベースで登頂の機会を待つ間「私は困っている。子供たちに会いたいし、K2 にも登りたい」 と日記に書いています。1995 年 8 月 13 日登頂するが下山中嵐に遭遇し死亡する。登るために登るから、2 人の子供を生んでからは生活のために。そして次のカンチェンジュンガには家族全員でベースまでの思いは、K2 に飛び散った。

妻アリスンの死亡を聞いた夫バラードは子供たちに、「きみたちのマミーは山で嵐に遭って死んだのでもう二度と会えない」といった。 六歳のトムは涙が乾くと「ママの最後の山をぼくたちも見に行けるかな・・・・」 とパパにお願いし、五週間後親子三人はパキスタンのアスコーレに。ママが歩いた川原を行き、遥か遠くにK2 の鋭い山頂が見えるパイユの丘に、トムとケイトが適当な石を選び小さなケルンを二つ「ママ」 ためにに積んだ。

『K2 非情の頂』 J・ジョーダン・山と渓谷社・2006・から抄録

エドゥルネ・パサバン (スペイン・1974～) 十四座登頂を目指す

～エドゥルネ・パサバンは、K2 の女性登頂者にして、2005 年現在ただ 1 人の生存者～

アリスンが K2 に登頂してから 9 年目の 2004 年 7 月 26 日。スペインのパサバンは女性六人目のK2 登頂者となる。八千メートル 七座登頂を 4 年で、2005 年 7 月ナンガ・パルバット登頂「注」で八座を達成(31 歳)。さらに 2008 年現在、十座登頂と十四座完結を目指す。

注 2005 年 7 月。ギプスコア県トロサ出身の登山家エドゥルネ・パサバンは、TVE(スペイン国営放送)の番組 “Al filo de lo imposible(不可能との極限)” チームのイタリア人シルビオ・モンディネッリ。エクアドル人のイバン・バジェホと共にナンガ・パルバット登頂に成功。 同行者の 2 人とも十四座登頂の強力助っ人。

2 人の女性クライマーの生死を分けたのは、その資金力、天気運、エドゥルネ・パサバンに同行した強力なサポート者たちの存在である。事実、混み合う K2 頂上付近にいた十人以上の強力な救助者は自分達の登頂を犠牲にして、下山中に高度障害と凍傷で行動不能となった彼女とフアン・オイアルサバル(48

歳・8,000m登頂回数21回)を五日がかりでBCに。＄25,000払ってヘリであっという間にイスラマバードに直行し一命をとりとめている。

2004年・K2登頂50周年記念(1954年・イタリア隊・初登頂)のこの年、7月26日～28日の間に43名の登頂者があった(天気に恵まれた)。

付記　K2 女性登頂史 1986～2006

ワンダ・ルトキエヴィッチ ・ポーランド (1943～92) 1986年K2に女性初登頂
カンチェンジュンガ(8,586m)登高中に死亡
リリエンヌ・パラール ・仏 (1948～86) 1986年K2に登頂後、下山中死亡
ジュリー・トウリス ・英国 (1939～86) 1986年K2に登頂後、下山中死亡
シャンタール・モーデユイ ・仏 (1964～98) 1992年K2に登頂
ダウラギリ(8,167m)登高中死亡
アリスン・ハーグリーヴズ ・英国 (1962～95) 1995年K2に登頂後、下山中死亡
エドゥルネ・パサバン ・スペイン (1974～) 2004年7月K2登頂 生存
ニヴェス・メロア ・イタリア (1961～) 2006年7月K2登頂 生存
小松 由佳 ・東海大遠征隊(1982～) 2006年8月K2登頂 生存

第三章　レースになった岩登り「正道」「邪道」登山界は騒然

1958年5月24日　朝日新聞夕刊ニュース

1958年5月21日大阪府山岳連盟が主催した兵庫県・蓬莱峡での岩登り。

なにしろ陸上競技場なみに競技場としての岩場でタイムを競うというのだから。会場となった地元の兵庫県山岳連盟は、「山岳人としての自粛を望む」と警告しています。クライミングが大衆の娯楽スポーツとなったいま、当時の登山界の風潮に懐かしさを感じるのです。頃はアルピニズム論争が活発だった大学山岳部の最盛期でした。

(関西学院大学山岳会・会報NO.25・南井 英弘・提供記事に依拠)

第四章　北京オリンピックから 山を考える

～登山での正道と邪道～

1896 年、最初のオリンピックでの棒高跳びの優勝記録は三メートル三〇センチだったそうだが、2008年8月の北京オリンピックでロシアの女性エレーナ・イシンバエフが五メートル〇五センチを跳び、オーストラリアの男性フッカーが、五メートル九六センチを記録した時、その「進歩」の多くは用具の開発が負っているのかと考え、 水泳では新素材を使用したスピード社の競泳用水着が話題となり、水着が記録を更新させたとも考えてしまう。

競技スポーツでは「科学」の粋を集めた人間サイボーグさながらの人体改造を受けた人々が最先端で争っている姿をみれば、生身の勝負が正道で、それ以外は邪道だ、との線引きなどできそうになく思われてくる。どうやらわれわれは幻想にとらわれていたようだ。

あの種の「スポーツ」は、生身の肉体の能力の純粋な争いであると考えて、記録という数字だけでその力を評価してきたのだが、実際には様々な要素によって高度に媒介された「文化的営み」なのだ。

科学的な用具の開発や肉体改造を邪道であるかのように考え、肉体や精神の純粋な発露にこそ価値

があるとみなし、尊ぼうとする純粋幻想もその一つといえるだろう。

（渡辺　裕（ひろし）・文化資源学・08 年 7 月。毎日新聞・文化欄「考える耳」から抄録）

・――・

この種の純粋幻想は登山界にもある。 登山を純粋なものとして考える人たちは、商業公募登山、過剰な登攀器具、酸素の使用などを邪道とする。

山の登り方にルールなど無い―にもかかわらず、正統アルピニズムという純粋幻想をひきずって、「商業公募登山は邪道だ」「アルプス岩壁スピード登攀は軽業だ」「十四座は売名だ」「七大陸は金持ちの道楽だ」―と正道登山の退潮を嘆く人たち。

これにたいして理屈抜きで単純に山を楽しむ。 または、なんらかの動機（カネ・名声・心的満足）に根ざして山にいく人たちは次のように・・・・・・・。

「私は好きに登りたい。科学の進歩のおかげでヒマラヤの高峰にも登れる。勿論、危険についての自己責任は覚悟している。　正道と邪道を決めるモノサシは個々の問題です。

但し登るのは自分の足だから、体を鍛えて山にいきます」。

山を考える　は　観念の遊び

いま、「山を考える」としたら登山での危険回避と環境保護くらいで―これは常識で山を考える、ではない―これ以外のすべての思考は観念の遊びです。登山に正道とか、邪道とかの基準などない。

観念の世界でしか存在しない　純粋な山を考えても現実（大衆登山）は何も変わらない。

今日「山を考える」ということには、もう意味がないようです・・・・・・。

第五章　商業公募登山に思う

（株）ウエック・トレック社長・貫田宗男は、公募隊について次のように述べています。

「スポンサーに頼らず、すべての費用、リスクを自分自身で負担し、自分の好きな山に登れる、公募登山は登山の原点であるとおもう。 従来の遠征隊にある荷揚げ、工作の下働きなどはない。主催者と顧客の間にあるのは「契約」であり、従来の組織のなかの屈折した人間関係ではない。」

・――・

ここでは商業公募隊の是非については考えません。なにが是で、なにが非か、というようなことは考えても意味が無いからです。これらは公募隊に参加する人が決めることで他人がとやかく言う問題ではない。その意味で「商業公募登山を考える」 ではなく、「・・・・・・に思う」― としました。

2007 年8月に開催されたシンポジウム「高所登山における突然死を考える」で提起された問題のうち、医学的テーマと商業公募隊という社会的テーマの 2 点ついては、JAC 会報「山」750 号に野口いづみ氏の報告があります。

この2点について医学的テーマは素人で口はさむ立場になく、社会的テーマと題した公募登山が持つ問題点の多くは、顧客が考えるべき問題であり、公募登山だからある危険に登山客「注・1」がどう対応するかです。

商業公募登山での事故は結論で言えば「登山客に責任あり」で近年、技術的困難ではなく、 中高年登山客の高所衰退・疲労からの事故が多く、高所での突然死などはその典型でしょう 「注・2」。
また、6,000m位の 「ヒマラヤ登らせます」の募集に参加する登山客の人数が増加するとき、8,000mに隠れて目立ちませんが、参加者数に比例して 6,000m峰での事故が多くなるでしょう。

注・1 登山客とは、自ら行動計画を作らず、商業・公募業者の登山案から選択して登山する人をいう
注・2『ドキュメント 山の突然死』 柏澄子・山と渓谷社・2008

～商業公募登山だから ある危険～

支援の危険

固定ロープ、ユマール等の登攀器具。前後を固める強力な支援者がいることは公募登山の利点ですが、これが逆に登山客の危険を増大させます。つまり実力以上の高所に導くからです。

遠慮と虚勢の危険

初顔合わせのパーティでは登山客が隊と同行者に迷惑がかかることに遠慮して、また、虚勢をはって登高の中止や「ここで安全確保をしてくれ」と、はっきり言い出せぬ危険があります。

有料の危険

商業公募登山隊の経営者が登頂という顧客への配慮から登高を続ける危険があります。
顧客の登頂実績が商業公募隊の営業成績にかかわるとき、ここに危険があります。

倫理観という危険

ガイド、シェルパの職業倫理は期待せぬほうが良い。そもそも高所は道徳うんぬんと言える場所ではない。

参加契約の条件として

これ以上は危険と感じたとき 「私はここで中止する」だから 「安全な場所まで下ろしてくれ」。「くれ」は要望でなく登山客から隊長、またはガイドへの命令とする。
行動中、危険を感じたときの安全確保も命令とする―と書きましたが 「くれ」と、はっきりいえるでしょうか ？
山で起こるかもしれぬ危険と対策について、契約条件は現実には気やすめに過ぎない。
山での遭難はなくならない。 ～ 契約に次の一文をお忘れなく～
（遺体は目立たぬ場所なら現場にそのままで結構です）

付記 8,000m ～ 商業公募登山の登頂 と 事故・事例の一部

2002 年 10 月 チョー・オユー（8,201m）登頂 横浜市の内田敏子（71 歳）・女性最高齢
2004 年 5 月 エベレストに顧客 2 名が登頂後、大田祥子（63 歳）死亡
2006 年 10 月 チョー・オユー（8,201m）登頂 上田市の柳沢勝輔（70 歳）
2007 年 5 月 エベレスト登頂後、石井伸一（63 歳）8,500m付近で突然死
2007 年 5 月 チョモランマ登頂 上田市の柳沢勝輔（71 歳）

あとがき

ここに書いた五章は報道記事を見て、それをヒントにした文章です。例えばエベレストに10回登頂したバブ・チリのあまりにもあっけない死の記事からは他の登山家に。

十四座を目指すスペインのエドゥルネ・パサバンのスペイン・ニュースからは、K2 で死んだ他の女性登山家たちに。北京オリンピック北島康介のアテネに続く金メダル二連覇がトップ・ニュースとなったのを見たとき、話はとんでもない方向、登山の正道と邪道に及びました。

また、商業公募隊に参加してチョモランマに登頂した元・中学教師・柳沢勝輔（71 歳）さんの記事を見て感心した反面、 商業公募登山だから起きた高齢者の死亡事故には「思う」 でなく「考える」ことが多くあるようです。*

想えばエベレスト、ナンガ・パルバット初登頂の報道を興奮と感動で読んだ時代から半世紀以上。

いま、ネットに氾濫する山の記事、それは短い文章の中に（車内の電光掲示板のように）多くの情報をつめこもうとして書ききれず、こぼれ落ちた内容が多くあります。デジタル表現で簡略・劣化した日本語・記事の多くは読むモノでなく見るモノとなり、本でも読むかと書店にいっても、買ってまで読みたい本もありません。

ときたまの山に関する報道を見たとき、時はタイムスリップして手元にある資料を引っ張り出して書いたのがこの一篇です。

2008 年11月

ー 随 想ー

パタゴニアの雲丹

越 田 和 男（昭和36理）

ちょっと古い話で恐縮だが、寄稿の求めに応じて思いついたのが標題の話。甲南山岳会 HP の掲示板で概略は報告したので、旧聞に属するかと思うが、是非書き残しておきたく、お許しを乞う次第。

2年前のある夕方帰宅すると、玄関に何やら薄汚れたダンボールの小包があり、家内は気味悪いので開けてないという。見ると海外からの船便らしく、手書きの読みづらい発送地は、どうやらチリのプンタ・アレナスと読みとれて、ピンと来たが、まさかとも思った。

8年後に送られてきた品々

ずっしり重い梱包を恐るおそる開けてみると、缶詰、瓶詰、その他諸々が転がり出てきた。ジャムの瓶詰が一個割れていて、ベチョベチョになっていたが、同封してあった手紙はなんとか読める状態だった。まさかが現実のものとなった。差出人は正しくジェローム（Jerome Naud）。8年前のパタゴニア・トレッキングの折のチリ側のガイド。その時にキャッシュを渡して送付を依頼してそのままになっていたのだ。一時はちょろまかされたと大いに怒り、やがては忘れ去っていたものが何と8年ぶりに届いたという訳だった。

このトレッキングについては、以前大関が「山嶽寮（第54号、1999年）」に書いてくれたように誠に楽しかった。JAC の田村俊介さんをリーダーに、甲南からは雨宮、大関、越田が参加して男6名、女2名の総勢8名で出かけたもので、1999年2月のことだった。このところ毎年4月に海老名の大関邸で催される花見の宴も、このトレッキング直後の4月に反省会としてメンバーが集まったのが、その発端となったもの。

コックのミゲルが準備し、リオ・セラーノの避難小屋で供された雲丹の缶詰が実に美味かった。値段を聞くと安い。町のスーパーで売っているとのことだったので、トレッキングの後で案内してもらい買って帰る積りだったのが果たせず、「私が買って日本に送ります」というジェロームに100米ドルを渡して、購入発送方依頼したのだった。大関宅での反省会には当然間に会うものと思っていたので、思い出の美味い雲丹カンを持って行くから楽しみにしてくれ、と豪語するも空しく、その後待てど暮らせど届かず、遂には忘却の彼方へ。

「コッシンそら甘いわ。そんなもん届くはずがない」と同行者の雨さんや、俊介さんはもちろん、ほうぼうで散々小生のガードの甘さをからかわれる羽目に。新橋の会社近くの飲み屋では、こんな話を酒の肴にしていたら、それを聞きつけた他社の常連客が偶々チリに出張するという。その御仁、実際に出張土産にわんさと雲丹カンを買ってきて、飲み屋でみんなにふるまってくれるだけでなく、小生には是非お持ち帰り下さいと言って数缶くれ

て慰めてくれた。もちろん小生のドジを改めて酒の肴にして。

ところが、何の中間報告も前触れもなく8年後に突然届いたのには驚いた。同封されたジェロームの手書きの読み難い手紙を判読するに、8年間もほったらかしにしていた背景、理由はこうだ。トレッキング当時、彼はチリ人でプンタ・アレナスの中学校で英語を教えており、夏のシーズンだけガイドをしているとのことだったが、実はフランス人で、我々と別れた直後に外国人としての不法就労がバレて、国外退去になっていた。フランスの実家では裁判沙汰があり、その解決に5年もかかってしまった。更にチリを再訪して長期滞在許可をとるのにサンチャゴで長いことかかり、パタゴニアへはなかなか戻れなかったという。

小包には、遅れたお詫びだといって、頼んでいないプレゼントもいっぱい添えてあった。その中身は、雲丹の缶詰（12缶）、蟹の缶詰（10缶）、シーフード・パテの缶詰（2缶）、カラファテのジャムの瓶詰（8個）、チョコレート1箱、マテ茶、木彫りのペンギン、その他諸々で、もちろん楽しく頂いた。その年の大関邸での花見にも持参して、皆にも賞味してもらえ、小生としては多少溜飲を下げたのは言うまでもない。ちょっと贅沢だが、マグロの刺身の上にこの雲丹をたっぷり乗っけて食すると絶妙の珍味となることを、この花見で発見した。

カラファテというのはパタゴニアの地名にもなっているが、ブルー・ベリーに似た実をつける木で、この実を食べた者は必ずパタゴニアに戻って来るという言い伝えがある。一寸遠いけど、雨さんどうですか、次回はついでにサウス・ジョージア島などへも寄ることにして、ご一緒しませんか。

ジェロームには丁重な返信を書いた。

「おお驚きだ！！！　幸いにして私はまだ生きており、引っ越しもしていないので荷物を受取れた。さもなければ、この荷物はどこへ行ったことだろう。とにかく、私にとってはすばらしいプレゼントであり、貴兄がかくも長きに亘って私の住所を持っていてくれたことに感謝する。・・・中略・・・私は今やリタイヤしており、以前よりも良く海外にでかけており、パタゴニアは再訪したい土地のひとつだ（カラファテ効果か？）。近い将来、貴兄にはパタゴニア、フランス、または日本で会えることを期待。・・・・・末筆ながら、プンタ・アレナスのミゲルによろしく。」

パイネ山麓スコッツベルグ湖畔にて
ガイドのジェローム（左）と

念のため、フランスとチリの両方の宛先に出したが、当たり前か、その後の音沙汰はない。10年後に再会しても、いともあっさり、雲丹は腐ってなくて良かったなどとのたまい、にこやかに握手（あるいはあちら流に抱擁）するのだろう。いつも思うのだが、山の思い出は人の思い出、100ドルちょろまかされたのと、8年ぶりに送ってきたのとではエライ違いで、パタゴニアの印象に花を添える出来事となった。

（2009.6.28.）

ヘギソバとイゴと安曇節

飯　田　進（昭和 38 経）

我が家の近くに、ヘギソバなるものを食べさせてくれる店がある。珍しいので食べに行った。ヘギとはソバを入れた器のこと。ソバはニホンソバ。ただしソバ粉に海藻が入っている。それでふと思いついたのが、ひょっとしてご主人新潟の出、と聞いたらそうだ、と言う。

前田館が栂池に出る以前、小谷村字立屋で民宿をやっていたころ、イゴ（エゴともいう）なるものが時々食卓に出た。海藻を煮て羊羹状にしたもので、それをスライスし、しょうが醤油やワサビ醤油につけて食べる。味は海藻特有の香り（言ってみればマクリのような香り）がして、好き嫌いがあるだろうが、この料理、九州では、オキュートといって、郷土料理になっている。

何故ヘギソバからイゴの話か、というと。海藻を使った料理が共通で、小生の頭に　安曇族　のことが浮かんだからである。なにをぬかす、日本人は石器時代の昔より海藻を食って生きてきた、海藻民族である。イゴがオキュートと似ているからと言って、そく安曇族がもたらしたとは限らぬわい。とおっしゃるかもしれないが、安曇族を研究しておられる方の御本にそう書かれているから、小生の単なる憶測だけではありませんので。

我々が親しんできた安曇地方。この安曇の謂れは、九州北部今の博多辺りに勢力をはっていた海洋民族である安曇族が、この地を追われて糸魚川に漂着、姫川に沿って南上、大町から豊科あたりに住み着いて、そこが安曇と言われるようになったとか。

何故九州を追われたか。そのころ、朝鮮半島では、百済と新羅が敵対、百済と親交のあった大和朝廷の継体天皇が、百済の要請で出兵。九州北部に勢力を張っていた盤井氏に協力を要請したが、新羅と組んでいる盤井氏が反抗、盤井の乱が始まった。戦いは朝廷側の勝利、盤井氏の配下にあった安曇氏も統領が捕らえられ、このままでは、一族皆殺しの憂き目にあう、ということで、長男が一族郎党ひきつれて海に逃れ、糸魚川に漂着した。と伝えられている。大和朝廷が越の久比伎国造を創設、杭柵を作って蝦夷に備えた5，60年前のことで、うまく糸魚川に上陸し、遡上できたのであろう。ついでながら、頚城郡のクビキの語源はそのへんにあるのではないでしょうか。

その安曇族がもたらしたひとつに、海藻を使った料理があり、現在でもイゴはスーパーで売っているそうな。小生の知人で、津南出身の人がいてこの話をしたら、帰京の折イゴを買ってき料理したものをくれた。さっそく頂いたが、味は以前食べたのと同じであった。

この安曇族がもたらした安曇野。その名物にこんな訳のわからんものでなく、ご存じ安曇節がある。以前この歌を山男の象徴のように唄っていたことがあった。

橋本竜太郎元首相なんぞ、得意げに唄っていたものである。これが正調安曇節である。と正調争いをしていたものである。

昔々その昔には今唄われている安曇節はなかった。今の安曇節になったのは、大正12年、豊科の榛葉太生というお医者さんが、当時あちこちで唄われていたものを編纂。中山晋平に原曲の批判を仰いで発表されたものであります。昭和の30年ころ、蕨平や若栗のゲレンデで一日中この安曇

小唄がかかっていた。のんびりとしたテンポのこの唄に合わせて滑るスキーがいかなるものか、想像がつくというものである。それからしばらくして、少しはテンポの速い？白馬小唄がかかりだした。カンダハーからラングリーメンそしてセーフティビンディングへと、装備がアップ。パラレルクリスチャニアが取り入れられ、急速にスキー技術は発達しだしたころである。そしてスキーのスピード化に伴いビートの利いたテンポの速い訳のわからん音楽がゲレンデにコダマシテいった。

ところで、この安曇節の歌詞の一つに、
よれやよってこい、安曇のおどり、田から畑から、田から畑から野山から、というのがある。これ安曇盆踊りの歌であるが、どなたか安曇盆踊りをご覧になった方おられるでしょうか。小生残念ながらお目にかかったことがない。何故なら盆踊りは刈り入れの少し前、9月の中か下旬ころ行われていた。そのころ、中間試験を控えて猛勉強中（たいていの方々はそうであったらしい）またOBになってからはその時期の山はあんまり魅力なく、休暇取ってわざわざ行く時期でもなかった。

そんなこんなで、年取って暇になり、一度盆踊り見ておこうと思い立ったら、時すでに遅く、もう安曇地方の盆踊りは姿を消していた。なんでも盆踊りって結構手間暇と金がかかるらしい。それで自然消滅し、いまでは、お盆に人集めのイベントとしてやっているそうな。

なくなった、といえば、今の白馬駅が信濃四谷駅であったころ。岩岳と栂池の間にある落倉辺に巻寄スキー場というのがあった。そして、積雪情報でいつもダントツに雪の多かった中土スキー場（最雪期には4，5mになっていた）今の小谷温泉の辺にあったスキー場だが、ともに姿を消してしまった。なくなったのはスキー場だけではない。スキーヤー達もずいぶんと姿を消した。

昭和32年　大糸北線の小滝と南線の中土が繋がり松本から糸魚川まで一本化した。それまで大阪から名古屋、松本と乗り換えを繰り返して行った白馬や栂池スキー場も、北陸線糸魚川経由で楽に入れるようになった。それに加えスキーの道具が発達、それに伴ってゲレンデもフカフカの深雪状態から圧雪された鏡のようなゲレンデと変身。スキーヤーは縦横無尽にゲレンデを駆け巡り、その数を増していった。正月ともなれば色とりどりのヤッケを纏ったスキーヤーがゲレンデを埋め尽くしていたものである。それがいつの間にか潮が退くごとく、ゲレンデから姿を消していった。

以前お正月にゴンドラに乗るには、長い行列を作って3，40分待つのが当たり前であったが、今はちがう。今年の正月久しぶりに栂池スキー場を訪れ、ゴンドラに乗ったが、10分も待たずに乗ることができた。ゲレンデの喫茶店の親父に現状を聞いたら、スキー客は半分以下に減ってしまった、商売あがったりだよ、とぼやいていた。この50年安曇平は大きく変わった、我々も年を取って姿かたちが変形した。それでも自然に親しみ、山に焦がれる気持ちは少しも変わっていない、と思う。頑張って山で遊ぼう。

2009年６月

権兵衛峠と伊那節のこと

鈴　木　頼　正（昭和 33 経）

元禄 9 年（1522）権兵衛峠街道全長 4 キロの道が完成しました。木曾の神谷村の牛方、古畑権兵衛は伊那から木曾に米などを運ぶのに当時牛首峠や塩尻峠を利用して中央アルプス木曽山脈を越すのに何日もかかり非常に不便でしたので、権兵衛さんを中心として人が集まり、人も馬も登れない険しい鍋掛峠を改修して、2 年がかりで完成しました。

伊那節の元唄“おんたけやま”の一節に、“木曾へ木曾へつけだす米は伊那や高遠の涙米（御蔵米、余り米）”と、替え歌まで唄われました。伊那の人々は領主の命により重い税として課せられた米を木曾へ送られる悔しさを唄い、木曾谷の人はどうせ伊那の余り米だと思っていました。余地から峠までの 7 キロの登り道、七曲道が続く 2 時間余り、権兵衛鍬の跡の碑、水のみ場、また権兵衛峠標識の傍らに雪害餓死供養の碑があり、奈良井まで 16 キロと標記されていました。途中の番所では木曾から伊那に運ばれる木曽檜の材木の流出を防ぎ、途中の集落は萱ヶ原、番所、羽渕、神谷（今も権兵衛の子孫の家があり、古畑の姓が多い）がありました。木曾から木曾漆器が運ばれ、伊那から御岳参りの信仰の道でもあった。姥神峠に御岳大納言の石碑、石像があり御岳遙拝所が設置されています。

最近、甲南山岳会秋の集会は木曾で開かれます。行き帰りか、往復とも利用される人も多いと思います。あれだけ苦労した峠道が無料です。すばらしい道になりました。感謝しましょう。でも峠から伊那谷の眺め、南アルプスの連山も見えません残念です。

伊那節発祥の地は余地です、伊那節民謡碑があります。今の伊那節は大正 15 年に出来ましたが、山の民謡から平野にきてお座敷唄になりました。市丸姐さんによって全国に広がりました。

部員不足問題に関連して

廣 瀬 健 三 （昭和 36 経）

掲題と同じ題目で、10年前に「山獄寮」に拙文を記していますが、又同じ場面に成っている現在、投稿しようと思ったキッカケは日本山岳会（JAC）の会誌に載った「登山文化の継承とネイチャークラブへの転進」と言う一文が印象に残っていたからです。

あらましを先ず記します。そして後に小生の思う事を述べてみます。

其のあらまし:

JACの平均年齢は2011年には70歳に成ってしまう;2007年時点での平均年齢は65歳、世に言う老人クラブ成り。（会員数約5，000人）20歳代は19名。山登りは求道的、そうでないと死ぬと思っている。若者にそんなかけらでも示せば、拒絶反応が返ってこよう。この論に照らせば、現代の日本の若者に山に登って下さいとお願いするのは土台無理な相談と言う事になって終うであろう。

時代は刻々と変化する。JACも存続と繁栄を目指すなら、其の方向転換の時期ではないか。アメリカにシエラクラブと言う団体がある。シェラネバタ山脈の自然保護活動を目的に設立された。現在は他にヒマラヤ登山隊の派遣、ロッジ経営、トレッキング、一般旅行の斡旋、クライミングサークルも有り、講習会、講演会も活発。山に関わる事を全て網羅するので、活動の素材は限りなく有る。ネイチヤークラブという観点で、俯瞰すれば、次から次へと夢は膨らむ。青少年の健全育成への取り組みも視野に入る。KACとJACの状態を同じ場面に持ってくるは、相当無理があります。然し参考に成ります。

小生の提案:

かつて香月会長が「KACは何も先鋭クライマーだけを擁しなくても良い、ハイキング／キャンプを楽しむ人も集えばいい、甲南女子高／大との交流もあっても良いはず」と言う趣旨の事を述べられていました。甲南大学のワンダーフォーゲル部スキー部や探検部と、一旦組織的レベルで合同活動をしてもいいのでは。（これは飛躍しすぎて、諸々の難しい問題が有りましょうが）

翻って小生が甲南山岳部に入ったキッカケと背景を思い出してみます。甲南中学入学と同時にテニス部に入り、一月程でやめて、どの部に入ろうかと思っていたら、山岳部の「山祭り」なる面白そうな計画がある事を知り、参加した鈴鹿でのキャンプが殊の外面白かった。その夏に学校の旅行／遠足の延長の乗鞍岳－上高地－焼岳登山が有り、スッカリ登山がすきに成りました。其の頃、同期の塩田邦博君が熱心に入部を勧誘するので、入部しました。

自然での活動をこよなく愛する学生を受け入れる体制を作って置いて色んな方法で幅広く勧誘する。では誰がどうやってやるのか、口先だけで何もせんやんかとの叱責のお声が聞こえてきますが、それでも敢えて又もや拙文を提しました。アウトドアーが好き、クライミングボードにチャレンヂしてみたいと言う学生は絶対いる筈です。強力なる誘いとのタイミングが合えば、入部の可能性が一段と高まると思います。

拙稿が何らかのヒントになれば幸いです。

平成21年5月15日記

３０年ぶりに山へ行ったら・・・

大 柳 香 代 子 （昭和52法）

30 年ぶりに山歩きを再開すると、驚きと発見に満ち溢れていた。それは登山用具店に始まり、整備された山小屋、登山者の年齢層・・・と現役時代とは様変わりの様相に加え、自分の視点も変わり、おおいなる刺激となった。

2007 年 9 月、剣岳へ行った折、剣山荘で温水シャワーを利用した。「エェー、こんなところで？夢みたーい！」。同部屋でガイド付きの一人の女性登山者に会った。剣山荘に1週間滞在しているとのこと。明日は八峰を縦走するらしい。「へぇ！」山を取り巻く世界も変わったなあ。

冬の上高地河童橋では、団体ツアーや子連れのファミリーに会うなんて予想だにしなかった。

2008 年 3 月、八ヶ岳の硫黄岳に行った折、温泉のわく夏沢山荘はなんと雪上車でふもとまで迎えにきてくれた。歩かずに雪の山小屋に行けるなんて！楽ちんコース希望の私にはぴったり。翌日、真新しいアイゼンをはいて硫黄岳往復。小屋に戻ると、ずいぶん年齢の高そうな女性たちのグループが到着。どうみても山登りのいでたちではない。俳句グループといった感じ。小屋の横にあるアイスクライミング用の氷壁と、そのグループとのミスマッチがなんとも不思議な光景だった。

今の私の興味は自然の中の動植物。だから花に会いに、その時期を調べて山を選ぶ。現役時代とは違った楽しみ方の山歩きである。体力もないので、山小屋泊まり、下山後は温泉直行だ。同行は夫君。まだ見ぬ山へ、花へ、知らぬ道へと、行きたいところは数えきれない。

何度も歩いた上高地からの道も、5月下旬には天国のようなお花畑に変身するとは、まったく知らなかった。ニリン草のプロムナードに絶句した。

以前では考えられないような登山バスツアーが驚くほどたくさんあり、登山専門のツーリストもあるという。土日ばかりではなく平日の日帰り登山ツアーもありその盛況ぶりに驚いた。そしてその参加者の多くが60代、年金生活の女性である。その元気でパワフルな勢いに圧倒される。そんなおばさんたちのパワーを皆さんにもお届けしよう

おばさん　その1

2007 年 5 月初旬、初めて、あるツアー会社の日帰り登山ツアーに参加した。山は百里ヶ岳。滋賀、福井県境にあるその山は静かでブナの大木に包まれていた。足元にはこぼれんばかりのイワカガミの群落。登山道の両側に咲き乱れ、延々とピンク色のじゅうたんが続いた。山にも感動したが、バスのとなりの座席の女性にもびっくりした。

60 代後半と思われるその女性はとても親切に、様々な各社登山ツアーのことを教えてくれた。「このツアーはお弁当が上等で料金もちょっと高いのよ。○○ツアーは金曜夜発の夜行が多いから、勤め人が多い。毎週木曜日に日帰りツアーやってるとこあるよ」。

どこまでも親切、各社の電話番号を教えてくれた。「電話してパンフレット送ってもらいー。カラー写真きれいやから、行かなくても見てるだけで楽しいよ」。

やっぱり関西のおばちゃんはええわあ。となりに座ればもう友達だ。この方は週に2，3回山に行っているらしい。「今週末は四国へ行くの。この夏は剣の北方稜線に行くつもり。体力があるうちじゃないと行けないから、これが最後のチャンスと思っ

ているんよ」。

なんと、ザックは7、8個。雨具も5、6着持っていると。北海道から屋久島まで、もちろん海外へも。夫さんも登るようだが、山は別々に行くそうだ。いまどきの夫婦の形が見えてくる。

60 代後半になると、親ももう黄泉の国へ移動していることだろうし、自分の健康管理をしながら、やりたいことができるのはなんと幸せなことか。その女性も言っていた「これだけ好きなことしてるから、いつ死んでもええねん」。なるほど、輝ける60代だ。

帰りの温泉でリフレッシュして、バス中はぐっすりと休んで。おばさんは次の山行、もう準備 OK！

おばさん　その2

2008 年の夏、現役時代からのあこがれ、「雲の平」目指して、折立から入山し黒部五郎岳～水晶岳～雲の平～薬師沢～折立の周回コースを、夫君と 4 泊 5 日の山小屋泊まりで歩いた。

東京から姉に来てもらい母を頼み、ネコたちをペットシッターに依頼し、郵便、新聞を止め、準備する。今の私には、山は行く前のハードルのほうが結構高い。

現役時代に折立から黒部五郎岳～三俣蓮華岳、伊藤新道を湯俣へと下りたことがある。しかし、ずっと雨の中の縦走だった。何も見えず寒くてしんどいばかりだった。

黒部五郎岳への縦走路がこんなに楽しい道だったとは。スキップしたくなるようなお花畑の道に、身も心も♪飛んで♪飛んで～行きそうに。この辺りは雷鳥天国。あっちにもこっちにも何組もの親子が高山植物をついばんでいる。その愛らしさに目がくぎ付けになる。

おまけに、この日は「トランスジャパンアルプスレース」の 2 日目だった。昨日富山湾をスタートして、早月尾根～剣岳～立山～薬師岳～と走ってきた選手が後ろから追い抜いていく。楽しさ倍増！休憩中の選手と話もできて、改めてこの超クレイジーで苛酷なレースに参加している選手に脱帽する。

黒部五郎小屋の豪華な天ぷら山盛り夕食には目がまん丸、ニッコリ。鷲羽岳への登りで「しんどい、つまんない、お花ない！」とぼやきながらも水晶小屋へ。あこがれの雲の平でのんびりお昼寝。連日の快晴で池塘はカラカラ。楽しい縦走も終盤になり「こんなズルズルの苔のついた岩の道をみんな上ってくるの？絶対いやだー！」とすべり落ちながら、雲の平から薬師沢小屋へ下りた。最後のお宿へ。

黒部川の川面を吹き向ける風が心地よく、至福のビールをテラスで飲む。と、太郎平方面から地下足袋の中年女性と、うしろから同じく地下足袋の年配男性が到着。女性は「お疲れさまー、」と言うなり、男性に抱きついて感謝の言葉をかけた。男性はちょっとテレ気味。オー大胆、でも人前でハグハグできる度胸のよさにちょっぴりうらやましい気も。最近の中年女性もやるじゃないか。

この二人、じつはたいへん興味深い人たちだった。夕食までのまったり時間をこのお二人と楽しい話で過ごす。

昨今は、黒部源流の赤木沢が初心者向けとして大人気らしく、入山者が多いとのこと。そういえば、ヘルメットをザックにぶらさげている人がやたら多い。で上流でのキャンプは禁止、となってしまったようだ。午後、テラスから黒部川へ降りて行くグループに、小屋の人が声をかけた。「今から赤木沢に向かわれるのですかぁー？キャンプ禁止ですから、小屋に泊まってくださぁーい。」彼ら素直に戻ってきた。川への降り口に大きく紙に書いて張ってはあったが、ちゃんと目配りしている小屋の人に感心した。それにしても赤木沢ならヘルメットはいらないだろう。きっと登山用品店で買わさ

れているんだろうな。若い人もギャル風の女性も、みんなヘルメット持参。

例の二人の話にもどって・・・彼らも明日、赤木沢に行くとのこと。「どうしてもね、行きたくて前からお願いしてたのー」と、にこにこ顔の女性。「連れて行け連れて行けって前からうるさいんだ」と、にこにこしながらもちょっと迷惑そうなニュアンスもまじえて男性。あれっ？どうも夫婦ではないらしい。（詳しい関係はなんだか聞きづらいし、別にどうでもよい）年配の男性は65歳。去年は黒部上の廊下をここ薬師沢から下った、という。沢専門でウン十年らしい。身のこなしも軽く山慣れしていてなんかカッコイイ。地下足袋も正真正銘、元祖もの。地下足袋の底の素材まで詳しい。さすがに沢専門だけあって、手作りのわらじはちょっと感動ものだった。「日本伝統工芸アイデア賞」なんてのを贈呈したいなあ。ポリプロピレンの紐で編んであるのだが、オリジナルの工夫がいっぱい施されていた。目がまん丸になった私は「これ、売れるんじゃないですか。写真とらせてください」。おまけにハーネスは自作。9 ミリ、7 ミリのロープを組み合わせ、軽量に作ってある。確かにこのくらいの沢登りだったら、これで充分。男性は熱心にハーネスの説明をしてくれる。彼らはヘルメットなし。なんだか、他のグループと全然違う。やっぱり経験豊富な人は的確な装備だ。妙にうれしい。ちょっとドラエモンに似たニコニコ顔のお茶目でキュートな女性のほうも60歳超えているとお見受けした。こんな男性に連れてってもらえたら、幸せよ。きっと「私をスキーに連れてってー」じゃなくて「♪私を赤木沢に連れてって♪～」と迫ったんだ。翌朝、かっこよく身支度した二人は黒部川に下りて行った。不思議なペアだった。でもステキだった。あのおばさんの「連れてって」コールにはおじさんも観念したのか、それとも、実は口とはうらはらに案外おばさんとの山行きを楽しみにしていたのか。こっそりおじさんにインタビューしたかったな。いや本心は言わないよね。

そういう私は大学 4 年の時に女友達と二人で、赤木沢を下り、合流点でキャンプし、源流つめて三俣蓮華へ上がった。明るく楽しい沢で、途中で会ったのはレインジャーの人だけだった。今や、黒部源流もシーズンはゾロゾロ入山かな。

おまけの夜話

薬師沢小屋での夜、消灯して寝る体制にいたが、すごい話がきこえてきた。もう耳はダンボ状態。隣のおばさんが去年北鎌尾根を登った時のことを小声で仲間にしゃべっているのだ。

おばさんは60代なかばくらいに思えるが、冒険ダン吉のような話はすごすぎた。なにせ3L の水をかついでビンボー沢をくだり北鎌尾根にとりついたそうだ。話からこのグループのリーダーがすぐれた方だったことがうかがえる。よくぞ槍までたどり着いたこと。60 代あなどれないおばさんたちが増殖中かもしれない。

今の日本の登山界を支えているのは、まちがいなく中高年の女性たちだ。登山用具店で買い物にいそしみ売上に協力、ツアー会社の顧客となり、海外登山へもバンバン行く。笑顔とおしゃべりで山の道中を明るく照らし、中高年おじさんたちにもやさしく接し、時には励まし、見知らぬ人にもお菓子のおすそわけ。

おひとり様の老後もなんのその。日帰りバスツアーの帰路、ガイドさんが「みんなで、老後は山の見えるところにハウス建てて一緒に住みましょうよ」と言うと、どこがいいか話は盛り上がる。

きっと山だけでなく、世の中のいろいろな場所で前向きでポジティブで、好奇心旺盛なおばさんの発する光線が乱反射して世を明るく照らしているに違いない。

2009 年 7 月 26 日

ー山 行 - 報告 ー

神戸大学カンリガルポ学術登山隊　剣北方稜線トレーニング合宿記録

山 本 恵 昭（昭和56理）

メンバー　石丸（神戸大2年生）
　　矢崎（神戸大OB）
　　山本
期　間　2009年5月2日～4日

2009年5月2日　快晴

富山県警山岳警備隊事務所に入山届けをして、発信機「ヤマタン」を借りる。馬場島6:40発。雪が少なくブナクラ谷の下部は夏道を利用、ついでにコゴミ採取。上部は右股をつめて稜線へ10:45着。

ブナクラ谷右股をつめる

急な雪面をひたすら登り、キャンプ予定の赤谷山に12:50着。まだ早いので先に進み、赤ハゲ14:30。ここから先は岩と雪庇の境目を辿ることになる。明日の朝、雪の締まった時に通過することにして、赤ハゲ山頂を整地しテントを張る。毛勝三山の絶好の展望台。夕食にコゴミ入り炊き込みご飯。

3日　晴れ時々曇り

赤ハゲ5:40発。すぐ目の前の雪稜をスタカット40m。白ハゲの急な下りで念のためスタカット50m。岩混じりの下りを懸垂下降25mで大窓へ到着7:30。急な雪壁を登り、いくつかの岩峰を超えたり巻いたりして、ブッシュ混じりの雪壁をスタカット50m 登ると池平山。一昨年滑った東面の真っ白スキー天国とは大違いで、稜線上は切れ落ちている。50mの懸垂下降2回で小窓に到着11:50。再び急な雪面をひたすら登って小窓尾根上へ出る。威圧感のある小窓ノ王の肩の雪壁を懸垂下降50m。ガスも出てきて、神戸大2年生の石丸君いわく「奈落の底へ降りていくみたい」。三の窓14:00、5張ほどのテント村で賑わっている。クラストして蹴り込んでも靴のつま先しか入らない池ノ谷ガリーを登り詰め、池ノ谷のコルにキャンプ15:30。

小窓尾根から小窓の王を目指して

4日　曇り時々晴れ

池ノ谷のコルを5:30発。長次郎の頭付近の雪稜は思っていたより快適で、最後の急な雪壁をピッケル・バイルを頼りに登り切ると、剣岳山頂到着6:30。

剣岳山頂　（山本、矢崎、石丸）

早月尾根上部の岩場でルンゼ内が氷化していたので懸垂下降25m。雪が安定していたのでほとんどの岩峰は池ノ谷側をトラバース。2750m 付近のブッシュ混じりの雪壁を25m 懸垂下降するが少し足りず、もう一回懸垂下降。9:00にやっと安全地帯の早月小屋に到着。ここからは、若者にとっては楽勝、中高年には苦行難行の下り。でも最後は可憐なカタクリの花群落が見送ってくれた。馬場島12:20到着。

途中、我々とは日程が合わず、1泊で剣岳山頂ピストンに入山する井上さん（神戸大山岳会会長）・近藤君（神戸大学院生）パーティに出会う。

県警に下山報告。馬場島山荘で入浴￥500。渋滞の北陸道を敦賀で降りて、舞鶴自動車道へ乗り換えて帰宅。

やっぱり剣は良いですね。北方稜線は藪、雪稜、岩峰と変化に富んだよいコースでした。積雪量が少なく天候にも恵まれて、体力的にはきつかったですが思っていたよりハイペースでこなすことができました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

剣　岳

’08 夏・報告書（夏山個人山行―穂高にて）

谷 勇 輝 （平成 21 理工）

2008 年 9 月	1 日(月)	入山日 離阪＝上高地―横尾 C1
	2 日(火)	屏風岩東壁雲稜ルート
	3 日(水)	屏風岩東壁フリークライミング
	4 日(木)	北鎌尾根中退、休養日
	5 日(金)	北鎌尾根
	6 日(土)	屏風岩東壁ディレティッシマ中退、奥又白 C2 へ移動
	7 日(日)	前穂東壁 D フェース都立大ルート
	8 日(月)	四峰正面壁北条＝新村ルート、涸沢 C3 へ移動
	9 日(火)	滝谷クラック尾根、ドーム中央稜
	10 日(水)	滝谷ドーム西壁ニューウェーブ、上高地下山

参加メンバー 中島健郎（23）関学山岳部 OB ・谷勇輝（23）甲南山岳部4回

9 月 1 日(月) 曇のち雨 入山日 8:00 梅田阪急バス(¥5710)＝13:30 松本(¥2400)＝16:30 上高地―19:30 横尾 C1

雨の中の入山。気分は最悪。これから天気が今一な日が続くと予報されているので、さらにゲンナリ。とりあえず、入山ビールで乾杯だ。

9 月 2 日(火) 曇のち雨 屏風岩東壁雲稜ルート 5:00 起床―6:00C1 発―7:12T4 尾根取付き:35―8:35T4―12:15 終了点―13:45 屏風の頭―15:00 涸沢―16:55C1

空はスッキリしないが、雨は降っていない。予定通り屏風岩東壁へ。横尾岩小屋跡から対岸へ渡るも、昨日の雨で水量は増している感じ。無理せず靴を脱いで、膝までの渡渉。1ルンゼを詰めるとT4取付きだ。この時期は、T4取付き近くの1ルンゼに少し雪渓が残っているも、アイゼンやピッケルは不要で、雪渓は簡単に巻ける。 T4 尾根は 2Pの登攀後、100m程コンテ(歩き)、1Pのチムニー登攀でT4 に到着。いよいよ雲稜である。ガスっているが、天候はもちそうなのでそのままスタート。基本的にはつるべ登攀で、トップは空荷。1、2P目は順調にこなし、いよいよ核心の 3P目。ここはフリーで越えると 5.11+ほどなので、とりあえずフリーで挑戦するも、細かいカチの連続で、荷物も担いでいるためあえなくA0 で前半をこなすも、後半も 5.10 ほどのムーブを強いられる。4P目の出だしは脆いがフリーで越えられる。5P目からは東壁ルンゼに入るが、昨日の雨ですごく湿っぽく、しみ出している箇所もありスラブの立ちこみが嫌な感じ。T4 から 3 時間 40 分で終了点に着くと雨が降りだしてきた。なんともギリギリセーフ。本日は概念把握の為にも、屏風の頭からパノラマコース、涸沢経由で帰ることにした。屏風の頭まではトレースがあるものの、茂みが多く、それほど雨は降っていないにも関わらず全身ズブズブ。あーしんどかった。

9 月 3 日(水) 曇のち雨 屏風岩東壁フリークライミング

3:00 起床―5:00 再起―6:20C1 発―7:30T4 尾根取付き:57―8:45T4―13:30 雲稜ルートの合流点―14:35T4 取付き―15:35BC

本日は 1996 年に草野俊達さんが単独オールフリー、オールナチプロで初登された、比較的新しいルート。その名も“フリークライミング（9P、5.10+）”。東壁ルンゼに沿って岩の弱点をつなげたラインで、なんとも素晴らしい。こんな良いルートは行っておかなければということで、いざ挑戦。朝起きるとガスって天気は悪かったが、日が明けるとまだましになっていたので、とりあえず出発。T4 までは前日と同じで、T4 から岩壁基部を右側トラバースして、T3 からスタート。私からのリードで始めたが、ハングの巻きが越えられず交代。A0 で越えていた（5.10）。1P目にして、このルートの完登（オールフリー、オールナチプロ）を逃す。そのまま 2P目につなげる。終了点手前のフェイスのプロテクションない。3mほどだが、5.10+のムーブなのでひやひやしながら越える。ここをリードした中島さんさすが強い。3P目も続けてフォロー。ここのところ、人が登った気配が全くなく、苔を掃除したりの登攀。クラックからもしみだしがあり、完全にフリーでは越えられない。東壁ルンゼルートの残置ボルトも使用し、ツルツル滑りながら強引にハングを回り込み、草木が生えたクラックを登り切る(5.10+)。4P目もフォロー。フェイスであるのでプロテクションが少なく、ラインも判然としない。少し早くピッチを切って、4P目残りを私と交代。5P目もまだ 5.10 代となっていたが、チムニーからフレークで今までのピッチと比べると、格段に登りやすい。6P目は簡単な草つきバンドをトラバースで雲稜ルートのラインと合流。するとここで雨が本格的に降り始める。この上は昨日いったので、すぐさま下降に入る。右直登ルートあたりを 4Pの懸垂下降でテラスに降り立った。すでに全身ずぶ濡れ。T4 の取りつき右にある岩小屋でしばしの雨宿り。1ルンゼはゴウゴウと滝のように水が流れている。途中まで沢下り気分。川の水は少し増水していたように感じたが問題なく徒渉できた。 それにしても、完敗である。全くもって登った気になれず。オールフリー・オールナチプロで再挑戦したい。

9 月 4 日(木) 曇のち雨のち晴 北鎌尾根中退、休養日

2:00 起床―3:00C1 発―4:05 槍沢ロッヂ―4:30 ババ平―4:50 大曲―5:20 引き返す―7:48C1

途中で雨が降ってきたので本日は引き返したが、テントサイトに着くと晴れてきた。なんてこと…。しかし、青天の中、濡れものを乾かししっかりと休養できた。

9 月 5 日(金) 曇時々晴 北鎌尾根

1:00 起床―1:45C1 発―3:50 大曲―4:50 水俣乗越―6:35 北鎌沢出合―8:15 北鎌のコル―10:02 独標―12:10 槍ヶ岳山頂:40―16:00C1

疲れた。ただそれだけ。備考・末端からは取付かず、北鎌沢右又から上がった。・「途中水が取れないのでは」と思い、沢で流れているところがあればゴクゴクのんで補給していったが、夜の降雨の影響もあり、北鎌沢右又の上部の方まで水は出ていた。天気も曇だったので、それ以降の行動は 500ml で十分足りた。・登攀具はヘルメットのみ。（ライト&ファスト。荷物を最小限にして登った。）

9 月 6 日(土) 曇時々晴 屏風岩東壁ディレティッシマ中退、奥又白 C2 へ移動

4:00 起床―4:50C1 発―6:15 取付き:35―9:20T4―10:55BC11:55―13:35 中畠新道分岐―16:00 奥又白池 C2

昨日の疲れと、私の靴擦れ、アブミ架け替え作業の萎え等も相俟って、東壁ディレティッシマは中退。アブミ練習不足もあるが、どうもアブミルートは好かない。ルートのビレイ点が埋まっていたり、リングが飛んでいて穴に細引きを通したりで、このシーズンに登られた形跡はなかった。それにしても、この期間中東壁を登っているのは雲稜に 1 パーティ登っているのを見ただけで、他はいなかっ

た。寂しいものだ。予定通りというか何というか、計画通り中畠新道経由で奥又白へ移動。

9 月 7 日(日) 曇のち雨 前穂東壁 D フェイス都立大ルート

4:00 起床―4:52C2 発―7:35 取付き 8:05―11:25 終了点―12:05 前穂頂上―14:37C2

二人とも初めてなので取付きまで行くのに苦労する。池より奥又尾根を少し登り、右に派生しているトレースをたどって奥又白谷をトラバース。雪渓が若干残っていたので念のため持ってきた 4 本爪アイゼンが役立つ。C 沢を何故か通り過ぎ、変な沢を詰めると 4 峰正面壁の甲南バンドへの登り道に出ていた。C 沢へ戻り、インゼルを登って B 沢に行こうとするも変なとこ登ったりして、時間を食ってしまった。ガスの影響もあり取付きも間違え、どうやら都立大ルートのオリジナルラインを登ってしまっていたようだ。1P 目のフェイスを適当に 2P に分けてしまい、3P 目で本来の 2P 目に合流。きわどいかぶりが続くが、フリーで越えられるので楽しい。3P 目もハングを快適なフリーで越え終了。今までの屏風に比べると、すごく短く感じるが、密度は高い。ただ、ガスって寒かったので余りスッキリしないイメージしかない。 終了点より北尾根へ上がり、前穂頂上を越えて A 沢を下降するが、途中から雪渓が残っていた。しかし 4 本爪では全く歯が立たず結局懸垂を 2 回交え下降したが、雨もザーザー降ってきだし、雷も…非常に嫌な下降であった。

9 月 8 日(月) 曇のち晴 四峰正面壁北条＝新村ルート、涸沢 C3 へ移動

3:30 起床―5:05C2 発―5:52 デポ地―7:00T1:35―10:38 終了点―11:50 五・六のコル―12:25 デポ地―13:25 五・六のコル―14:30 涸沢 C3

本日から好天に向かうようなので、気分もようやくノッて来た。登攀後は涸沢へ移動なので、全装をパッキングして途中でデポし 4 峰正面壁へ取付いた。昨日間違ったおかげでだいぶ概念も掴め、すんなり取付きの T1 へ。前半の 100m程は適当なラインで登るが、何故かガスったりポツポツ雨が降ってきたりで、滑りに注意が必要だった。ハイマツテラスより快適なフリーピッチが 2P 続き、最後の易しいフェイスを越えると終了。岩は安定しており、後半は天気も良くなったのもあり、非常に楽しかった。終了点からは北尾根にでて 5.6 のコルまで下降し、途中のデポを回収し、涸沢へと入った。

9 月 9 日(火) 晴 滝谷クラック尾根、ドーム中央稜

3:00 起床―3:50C3 発―5:40 北穂頂上―6:05B 沢のコル―6:50 クラック尾根取付き 7:10―9:38 終了点(北穂小屋)―11:07 ドーム中央稜取付き:20―12:40 終了点(ドームの頭)―13:50 ニューウェーブ取付き―16:10C3

本日は 2 本の継続なので、早めに出発。北穂を越えて B 沢を下り、赤茶けたバンドから尾根を回り込む。なお現在はバンドが崩壊し、登り返して懸垂 30mして取付くのだが、ペンキでクラック尾根とかかれ、足場がボルトで作られロープが垂れているのですぐわかる。でもこれはやりすぎだな。天気は最高。されど滝谷。滝谷から吹き上げる風は非常に冷たく、日があたらないうちは、ぶるぶる震えながらのビレーであった。所々崩壊している箇所もあり、浮石には注意が必要だ。続いて、ドーム中央稜へ。ドームの頭の先のコルからトレースを辿り、T1 より懸垂 1 回で T2 へ。バンドを左上すると取付きだ。このルートは滝谷のなかでも岩が安定しており、すっきりと快適な登攀ができた。終了点につくとまだ昼過ぎであったので、ドーム西壁の偵察をして帰った。

9 月 10 日(水) 晴 滝谷ドーム西壁ニューウェーブ、上高地下山

3:30 起床―4:30C3 発―6:35 ニューウェーブ取付き―8:25 終了点(ドームの頭)―10:30C311:50―13:15 横尾―16:40 上高地

いよいよ最終日。1989 年に拓かれたマルチスポ

ートルート“ニューウェーブ（4P、5.10a）”。こんなルートが滝谷にホントにあるのかと半信半疑でアプローチするも、ちゃんとあります、光るボルトたち。すぐ右が西壁雲稜ルートだが、完全に崩壊している。取付きのハンガーボルトも一つ崩壊していて、いずれスタートがなくなりそうな気配。気を取り直してスタート。登りだすと、不思議なほど岩は安定して快適。ボルトに導かれて登るだけ。1Pはフェイスからハング越え。2P 目は歩き 20m程。3P 目はフェイスからコーナーを辿り右の小ハングしたまで。4P 目はフェイスを右上し、最後は左上してドームの頭へ。高度感が素晴らしい。それにしても、快適の一言。3,000mでの登攀とは思えないほど、安心・快適。後はのんびり上高地へ下るのみ。のんびりしすぎたか、結局松本でもう一泊。公園でテントを張って、ぐだぐだ呑んでもう一晩二人仲良く就寝。（記、谷・中島）

2008 年 10 月 15 日

文登研（登攀） ― 剣岳周辺にて

谷 勇 輝 （平成 21 理工）

先日参加してきた文部科学省登山研修（通称、文登研）の報告です。
平成20年度登山指導者研修会Ⅱ（登攀）～文科省研修所及び剱岳周辺にて～

9 月 19 日 開会式・入山準備・講義
9 月 20 日 立山駅＝室堂―剱御前小屋―剱沢夏山前進基地 BC
9 月 21 日 雨天為中止。前進基地内でロープワーク
9 月 22 日 雨天の為、源次郎尾根中退
9 月 23 日 BC―剱御前小屋―雷鳥沢・搬送訓練―室堂―立山―帰阪

9 月 18 日 離阪新大阪からサンダーバードで富山駅へ行き、そこから富山地鉄で終点立山駅まで。およそ一年ぶりの登山研修所に到着。やはりサンダーバードを使うと早い。大阪から3時間ほどで到着。

9 月 19 日 開会式―講義「リーダーと登山の安全」―入山準備（食料発注）―昼食―装備点検及び人工壁にてロープワークの確認―夕食―入山中の計画作成―就寝昨年まで本研修会は社会人対象としていたが、今年から学生でも参加できるようになったので参加した。目的は一流の講師に最新の登攀技術を学ぶことと、他の参加者（社会人や他大学学生）との交流だ。班は1班。メンバーは富山大学 WV 部と社会人2名。ちなみに社会人のお二人は秋にアマダブラムへ行かれるらしい。羨ましい。

9 月 20 日 入山 晴れのち曇り 5:00 研修所にて朝食―6:40 玄関集合―7:00 ケーブル立山駅―8:20 室堂―11:30 剱沢夏山前進基地―12:00 テント設営―13:00 前進基地にてロープワーク 14:50―15:00 講義「登山の医学」50―16:00 天気図作成 50―班別協議（翌日の詳細な計画決定）―夕食 19:00―班別協議―20:00 就寝。

連休だけあって室堂には観光客がたくさん来ていた。予報によると台風接近に伴い雨の予報となっていただけに気分はげんなり。

9 月 21 日　雨予報通り早朝から雨。テントに打ち付けるポツポツと言う音がますますモチベーションを下げる。一応は予定通り 4:00 に起きたが、雨のため 6:00 まで二度寝。天候回復の兆しがないので前進基地でロープワークを行った。予報によるとだんだん天候回復。天気図を書くが、大気の状態が不安定で予報は難しい。予定では BC―源次郎尾根下部岩壁「中央ルンゼ」―上部岩壁「名古屋大ルート」―三ノ窓ビバークのはずが。

9 月 22 日　曇り→小雨→晴れ 4:00 起床 5:15―源次郎尾根末端 6:00―6:15 源次郎尾根登高―7:30 源次郎尾根下降―8:40 源次郎尾根取り付き―9:40 剱沢 BC 到着―10:15 別山の岩場（前進基地裏の岩場）に向かう―11:00 別山の岩場にて登攀訓練 17:50―帰幕・食事―就寝 21:00

3:00 に目が覚めた。テントに打ち付ける雨音のせいだ。今日は駄目な予感がしつつ再び眠る。4:00 に起きると雨は止んでいたようだ。天候回復する予報を信じて源次郎尾根下部～上部岩壁へ向かうことにした。他の班も続々と出発した。剱沢の雪渓は例年に比べて若干多く残っている。アイゼンを付けて、雪渓を踏みぬかないように気を付けて下り、源次郎尾根取り付きに到着。岩の陰にアイゼンとピッケルをデポして登高開始。岩は相変わらず濡れている。1時間ほど登たところで、小雨が降り出してきた。ルートがルンゼであることや前日の染み出しなどを考慮して、これではいくらなんでもクライミングは無理と判断し下降して BC へ。その後、天候が回復の兆しを見せたので別山の岩場で登攀訓練（主にナチュラルプロテクションや登攀スピード）を行った。お目当てのルートは登れなかったものの、当初予定していたルートを登るよりも、研修という意味ではより充実したものとなった。予定では三ノ窓―チンネ「ベルニナルート～クラックダイレクト」―本峰経由で帰幕だったが。

9 月 23 日　晴れ→曇り 4:30 起床―BC6:10―7:00 剱御前小屋―8:00 雷鳥沢にて背負い搬送訓練―10:00 室堂―立山―班別・全体協議、装備返却、入浴―帰阪

すこぶる天気が良い。天候が一日ずれていればと思ってもこればっかしは仕方がない。ゆっくりと準備を済ませ、出発。連休最終日とだけあって剱沢には25張程テントが立っている。雷鳥沢では背負い搬送の訓練を行った。今回のメンバーはある程度登れるメンバーなので、各自知っている背負い搬送方法を出し合い細かなところまで検証した。およそ 15 種類位出てきた。やはり股の間を通して背負うやり方は女性はともかく男性は痛い。担ぐ方がらく且つ要救も楽な担ぎ方はどれか？またその時持ち合わせている装備次第でどの背負い方がベストかなどを検証した。結果は写真で紹介。総括今回の研修は雨天のため予定していたルートを登れず、消化不良に終わってしまった。しかしながら、計画の立案、登攀具の選択・軽量化、登攀スピード、天候判断に至るまで内容の濃い研修会であった。加えて、メンバーとも仲良くなり、またタイミングが合えば一緒に山に行こうとなった。よって、当初目的としていた最新登山技術を学び、他大学との交流をすることができ大変実りある研修会を終えることができたと思う。

2008 年 10 月 16 日

甲南高校山岳部　活動報告　2005-2007

2005年度　年間活動報告

■　2005年度　活動

芦屋霊園内のランニング・腹筋・背筋・腕立て伏せ・ハーフスクワット・フルスクワットなどを取り混ぜた練習を、月・木・金の週に3回行った。10月よりは、幹部交代(高3長宅からCLは中3田中)となる。主力であった高3から中3へクラブ運営、練習計画が移行した。10月まで高3と中3で練習をし、その後は引退で、中3田中1人となり、練習などもおぼつかないことが多かったようである。

■　2005年度　山行一覧

第1回	4月	日帰り	六甲山　芦屋ロックガーデン
第2回	4月	日帰り	大峰　山上が岳
第3回	8月	夏合宿	北アルプス　剣沢～仙人池
第4回	11月	日帰り	六甲登山
第5回	3月	春合宿	志賀高原　志賀山四十八池、大沼池～蓮池

■　2005年度　夏山合宿報告

合宿開催地　北アルプス　剣岳　剣沢から仙人池往復
合宿参加者6名

主将・食料　高3B　長宅智行　　主務・装備　高3B　村上恭央
食料・記録　高3C　池上弘倫　　装備・記録　中3B　田中僚
observer　神澤太一　　付き添い教員　神戸謙司

7月31日(日)入山日

雷鳥沢まで　行動記録　天候(晴れのち曇り一時雨)
〈7:00 JR大阪駅集合→7:42 サンダーバード3号富山行き→10:59 JR富山駅(昼食)→12:25 電鉄富山駅から立山駅着→13:35 立山駅→15:27 室堂着→16:37 雷鳥沢テント場〉

初日の行動は、雷鳥沢までで。雷鳥沢テント場につき、設営、食当準備にかかる。18時には夕食となりこの日の献立は(ご飯・コンビーフカレー・スープ・茶)であった。明日に備えて21時に消灯・就寝する。初参加の池上の感想として、「寝袋小さすぎ、頭が出る、足が出る。夜中ほんまどうしようか悩んだ！」そうである。

8月1日(月)

雷鳥沢より剣沢　行動記録　天候(晴れ)
〈7:20 出発→9:00 別山乗越(剣御前小屋)→9:40 別山乗越出発→10:25 剣沢キャンプ場着〉

5時に起床し、朝食のラーメン、お茶を腹に納める。起床から出発までにかかる食当、テント撤収はかなり手際が良くなった。また、別山乗越までの雷鳥沢の登りもよくがんばり、去年より早かった。設営後に昼寝をし、レーションを食べる。レーションはもう少し多くしたい。午後2時から剣沢小屋裏から、真砂尾根に登って、ガラバを尾根筋までたどる。15時半に夕食(鳥釜飯・具沢山みそ

汁・スープ・茶）準備し、18時には終了する。21時半消灯、就寝する。

8月2日（火）

剣沢より二股、仙人山往復　行動記録　天候（晴れのち曇り一時雨）

〈6:50 TS出発→8:00 平蔵谷の出会→10:10 二股→12:20 仙人池到着→
13:40 下山開始→15:05 二股→16:25 真砂沢ロッジ→19:35 剣沢キャンプ場着〉

5時に起床、朝食（ラーメン・お茶）を済ませて、出発だ。アタックの用意に手間取り、遅れた。初めての雪渓歩きで、時間もだいぶかかってしまった。コースタイムでは9時間であったが、出発が遅すぎたのは反省。標高2，500メートルの剣沢から二股に900メートルを下り、剣沢の二股から仙人山まで500メートル登り返す標高差1，400メートルのコース！途中休憩を何回も入れながら、ほぼ一日中歩き通した。「拍手！こんなに歩いたのははじめて！」が感想であった。

歩き終えて、テントにたどり着くやいなや、中3の田中は眠ってしまった。ビダーインゼリーを飲ませ、濡れたシャツを脱がせてシュラフに押し込んだ。熱を測ってみたが、熱はなかったので一安心した。長宅も食事を取らずに眠ってしまった。21時夕食（ご飯・シチュー・カルピスゼリー）を食べ、眠りにつく。

8月3日（水）

下山日　剣沢より室堂、大阪へ　行動記録　天候（晴れのち曇り一時雨）

〈9:00 TS出発→9:40 別山乗越（剣御前小屋）→11:40 雷鳥沢キャンプ場→
12:00 ミクリガイケ温泉（入浴）→13:40 ミクリガイケ温泉出発→13:50 室堂着→
15:50 立山駅→16:30 富山駅→21:26 大阪着、解散〉

6時に起床し朝食（ラーメン・お茶）のあと、撤収にかかる。昨日の長時間行動で、のんびり出発する。別山乗越までは快調であったが、さすがに下りは少しくたびれた。雷鳥沢ヒュッテで風呂につかろうと思ったが、「風呂に入った後のあの階段でまた汗まみれはごめんだ」ということで、今回はミクリガイケ温泉につかって、汗を流し、帰った。

■　8月4日　夏山合宿反省会（記録）より

《準備段階》

7月28日、29日と研修があり、夏山合宿前の練習にあまり付き合うことができなかった（神戸）。足を鍛える系の練習不足（村上）。村上に同じく。装備の準備や走り込みを中間考査後にやろうと思ったが、できなかった。夏休み中も補習などいろいろとありできなかった（長宅）。

OBの神澤や北川が来てくれていたので、テントの設営など、指導をお願いすべきであった。朝寝坊ばかり（池上）。塾などいっぱいあって、練習にこれなかった。自分で練習しとけばよかった（田中）。走れ（神戸）！

《入山日（大阪～富山～室堂…雷鳥沢）》

特に反省点はなし。先生が集合時間にチョイ遅れた。

《1日目（雷鳥沢…別山乗越…剣沢）》

別山乗越までよいペースで進めた。テントの撤収も早くできた。剣沢で昼寝をした。行動食のレーションはもう少し多いほうがいい。入山日のレーションと合わせてもよいかもしれない。夜眠るのが遅いです。

《2日目（剣沢…二股　コ　仙人池）》

標高 2,500 の剣沢から、標高 1,700 の二股まで下降し、表高 2,200 の仙人池までの往復はしんどかった。帰り着いた時はふらふらであった。長宅の荷抜きをして、田中は飯が食えなかったので、ゼリーを飲ませてシュラフに入れる。念のために体温を測った。大丈夫。しかしよくがんばった。夏山合宿前の練習成果が表れていた。計画段階で、往復での標高差が 1,000 メートルを越えるルートはよく注意を払う必要がある。

《下山日（剣沢…別山乗越…雷鳥沢…室堂～大阪）》

特に反省点はなし。昨日の疲れもあり、出発は午前9時とし、12時にはミクリガイケ温泉につかることができた。

文責　神戸謙司

2005年度　夏山合宿感想

主務　村上恭央

＊行動記録

7月31日　天気・・・悪い

7時42分　大阪発富山行きサンダーバード乗車

10時59分　富山駅着・・・この後ラーメン屋で昼食をとる。他校の山岳部に遭遇。

12時25分　富山駅発

13時35分　立山着

14時00分　立山発

14時10分　美女平着・・・雨が降ってる。

14時40分　美女平発

15時27分　室堂着・・・小雨がやむ。

15時48分　室堂発・・・雨のせいで足元の岩が濡れており、滑って怖い思いをする。

16時36分　雷鳥沢着・・・テントを張り、夕食を作る。行動記録は初日のみ。

＊全体の感想

初日は雷鳥沢まで行くのが少し怖かったが、それ以外は楽チンで楽しかった。途中のケーブルカーでアッラーの神の信仰者って感じの中東っぽい外国人がいた。彼らはピザを持っていたのだが、どこで食うつもりだったのだろうか。長宅のメッシュキャップに「FUCK」と書いてあったので少しドキドキした。いきなり胸ぐらつかまれないだろうか、とか、いきなりわけのわからない外国語でどなったりしないだろうか、とか。この日のカレーは美味かった。米が上手に炊けたのがよい。

２日目は雷鳥沢から剣沢のキャンプ地までの移動であった。この日の池上は絶好調だった。ターバン＋グラサンという姿がとても似合っていて、道中のオバチャン達を笑わせていた。そしてけっこう早い段階で剣沢に到着し、テントを張り少し昼寝をする。だがとても暑かったので寝るに寝れず、みんなでトランプをした。「大富豪」をやっていたのだが、池上と田中の闇取引＆八百長のせいで勝てず。平民～大貧民の間をウロウロしていた。あまりにも暇だったので去年のように軍手とお茶だけ持って、トイレのすぐ上の山に登りに行きたかった。

外の方が涼しいと気付き辺りをウロウロ。しばらくすると関学山岳部の中島君たちがやってきた。中島君に関してあまりいい思い出が無い僕は微妙に避けていた。が、写真を撮られる。そして晩飯の釜飯を作り食べる。この日も米が上手く炊けており、とてもおいしかった。やっぱり僕が関わらない方が美味い米を食えるなぁと思った。僕はこれからオカズ作りに徹しようと思う。この日僕は味噌汁？を作ったがみんなから美味い、と言われうれしかった。味噌汁が得意料理のレパートリーに

新たに加わった瞬間であった。ちなみに僕が一番得意な料理は「炒めベーコンとオオバのパスタ」。この夜は神澤 VS 池上による下ネタしりとり対決が行われ、おもしろすぎてなかなか寝付けなかった。

3日目は必要最低限な持ち物だけ持って行き、剣沢～仙人池を往復するという行程だった。夏の合宿ではたいてい3日目が一番キツいとわかっていながらも、テントにポリタンを残していくという過ちを犯す。その為、この日は一日中渇きに苦しめられることとなった。手持ちの水は空ペットボトル(350ml)と新品の DAKARA(500ml)のみ。

岩場をしばらく歩くと雪渓にたどり着く。行きは下りの雪渓だったので、つま先をザクザクと雪に突き刺しながら元気に走っていった。初めて雪渓を歩く田中は悪戦苦闘し、神澤さんが歩き方をレクチャーしつつ進んでいた。しばらくすると雪渓が無くなり真砂沢に着く。雪渓で元気を出しすぎた僕はここでレーションをバクバク食べる。この行動が後に悲惨な事態を引き起こすとも知らずに。真砂沢を出発して(見た目は)キレイな川にでる。ここらへんは平坦な道にもかかわらず岩がでかくて予想以上に疲れる。山岳部で一番背が低い僕は岩を渡るのに苦労する。すぐ後ろにいた神澤さんはなが～～～い足でヒョイヒョイと歩いていた。しばらくするうちに二股に着き、そこから仙人池を目指す。途中一回休憩したら、そこからはけっこう傾斜のキツい登りが続く。やっとのことで仙人池に着くと長い目の休憩をとった。周りは池と木に囲まれ秘境って感じがした。ちょうどいいくらいに狭い空間で居心地がよかった。

とてもとても水不足だった僕は、神戸先生におごって頂いたジュースの他に実費で3本購入した。ジュース一本の値段が300円と、下界の2．5倍であった。帰りは野グソをしつつなんとか真砂沢までたどり着く。そこで先生のくださったウィダーインゼリーを食らう。が、とうとう上りの雪渓で力尽きる。原因は腹が減って力が無くなる、「シャリバテ」とのこと。雪渓が終わったところでみんなからレーションをもらう。その為最後の上りは絶好調だった。その代わりに僕にレーションをくれた長宅と田中は力尽き、僕はピンピンして一番元気があった。あのレーションはドラゴンボールでいう「元気玉」のようなものだと思った。

テント場に着くと長宅と田中をどうにかしてテントのなかに入ってもらい、先生、神澤さん、池上、僕の4人で晩飯を作り始める。時間はかなり遅かった。僕は池上とビーフシチューを作る。先生と神澤さんが炊いた米は美味かった。食後適当に片づけをし、池上とツレションして寝る。最終日、長宅と田中はまだ疲れが残っているようだった。僕は軽い鼻かぜみたいなものをひき、鼻水はでるわ頭はボーッとするわで最悪だった。途中の小屋で間近にヘリコプターを見ることができうれしかった。そして雷鳥沢を経て地獄の階段にたどり着く。ここらへんは有毒ガスがでてるのだが意外とみんなは平気らしく、僕だけがダメージを受けていた。階段を上りきるとすぐ近くに温泉がありそこへ行く。気持ちよかったっちゃあ気持ちよかったが、シャワーの出が悪いのが不満であった。今回の合宿も大変だったが、予想通り楽しめた。

■ 2005年度 春山合宿報告

1. はじめに

今年度の春山合宿は、中3の田中一人の参加であり、スキー部との合同合宿となった。3月20日(月)～25日(土)のうち、23日(木)、24(金)の両日を山岳部合宿として行った。合宿開催地は志賀高原で、前山より四十八池、大沼池ビバーク、蓮池下山となった。当初の計画では大沼池より、翌日に赤石山(2109m)を目指す計画であったが、ラッセルに思わぬ時間をとられ、大沼林道をたどって宿舎へ帰ったが、雪洞作りとビバークは非常に有意義な体験となったことをご報告申し上げます。

2. 参加メンバー

中3B 田中 僚　　付き添い教員　神戸謙司

3. 行動記録

3月23日（木）

入山日行動記録　大沼池ビバークポイントまで　天候（晴れ）

＜12:00　硯川ホテル出発　12:40　前山頂上渋池付近着　14:00　四十八池発
16:00　大沼池＝B. P着　17:30　雪洞と水を2リットル程度作る　18:30　田中　就寝
19:40　食い終わり　アルファ米五目飯・スープラーメン・具たくさん味噌汁・茶
21:30　神戸　就寝＞

入山日の記録

スキー部の合宿と合同であったが、山岳部はこの日の午前中に登山準備を行い、正午から天候が回復し始めたので、ショートスキーをつけて前山を目指してガスの中を出発する。頂上リフト係の方に四十八池への道を尋ねるが、リフトの人も知らない様子である。視が山と鉢山の姿は見えないが、そのコルは見えたので、その方向に進み始める。渋池の湖畔を半周すると、赤布を一つ見つけた。なだらかな樹林の中をコルまで順調に進む。

志賀山神社の鳥居はちょうどベンチの高さ程度までに雪に埋まっていた。コルより、赤石山や寺子屋山の稜線を確認し、その下にたたずんでいるはずの大沼池を目指して、下降し始める。スキーの上達者にとってはなかなかによい林間コースとなるであろう。未熟者の我々はおっかなびっくり、地形図を確認しながら、ゆっくりゆっくり降りた。この辺りには赤布一枚なく、スキーやスノーシューのトレイルもまったくない。静かな静かな、スノーハイクが楽しめた。

1時間半ほど下ると、凍った大沼池、雪原の大沼池、箱庭のような大沼池の湖畔に出た。人や獣の入り込んだ痕跡はまったくない白雪一色の大沼池の上に一本のトレイルをつけた。湖畔にあるレストハウス（大沼池エメラルドレストラン？）付近に雪洞をつくりもぐりこむ。天候は回復し、空には晴れ間もみえ、夕刻が近づくにつれて冷え込んできた。腹痛を訴えた田中をシュラフにいれ、食事を済ませて就寝する。

3月24日（金）

大沼池B. P. より蓮池　下山　天候（晴れ）

＜5:10　起床　5:20　食事準備開始　6:40　食い終わり・天候まち　8:00　B. P. 出発
11:50　大沼池入り口　下山　12:30　蓮池経由、硯川行きバス　13:00　硯川ホテル着＞

行動記録

本日予定では、赤石山にアタックをする予定であったが、田中の体調芳しくなく、寒さも厳しかったので、登らずに大沼入り口へ下山することにする。赤石山へは標高差 300 メートルを登り返さねばならず、登った後も忠右衛門新道の稜線のアップダウンは田中にとって負担がかかりすぎる。大沼池より横湯川沿いの林道を大沼入り口までスキーとスノーシューで帰る。なかなか果てしない道のりであった。又、夏道の林道も雪に埋まっておりかなりの勾配斜面をトラバースして帰らねばならない箇所が多い。いく度か田中もこけて、斜面を転がっていたが、よく歩き無事に大沼池入り口に辿り着いた。バスにて、硯川ホテルに帰る。

文責　神戸謙司

初めての雪山登山

中3B　田中　僚

僕は、春合宿が初めてだったので何も知らずに今回登山しました。僕は靴にアイゼンをつけて山を登り、下る時だけショートスキーをつけるのだと思っていましたが、のぼりも下りもショートスキーをつけて歩くことを知って、最初から驚いてばかりでした。

ホテルから前山までは深雪ではなく歩きやすく、このような道が続くのなら結構歩くことができるのではないかなと思っていましたが、そんなに甘くはなく、

前山から渋池、渋池から鉢山、鉢山から大沼レイクハウスと後になるにつれてすごい深雪になり、しかもどんどん急な坂になってくるので、普通のスキーでも苦手な僕はこけまくって、出発してから4時間もかかってレイクハウスにつきました。

それから先生と僕で交代で雪を掘り、雪洞を2時間かけて作りましたが、思ったよりもいい雪洞ができてよかったと思います。

そして次の日の朝、少し腹痛はありましたが、歩くことはできるのでレイクハウスを8時に出発しましたが、1日目に何回もこけていることと腹痛で弱気になってしまい、1日目よりもスピードが遅くてこけてばかりでしたが、先生に何度も助けてもらい、何とか 11 時 50 分に大沼池入り口まで行くことができました。

しかし、すごく寒くて、食事の時に変な姿勢で食べたからか、体質の腹痛がひどくなり、その日はあまり食べずにすぐ寝ました。そこからホテルまでバスで帰り、13 時にホテルに着きました。そして午後は温泉に入り、部屋で寝ていました。

そのときに思ったことは、普段普通にゲームをして、テレビを見て、布団で寝てということが、とても幸せなことだと気づくことができました。登山というのは本当にいろんな事に気づくことができて、すごく達成感があるとてもいいことだと僕は思います。

■2005年度　山岳部部員・顧問

主将：長宅智行　（高3）　　主務：村上恭央　（高3）
記録：池上弘倫　（高3）　　装備：田中　僚　（中3）
顧問：南里章二　　顧問：神戸謙司

甲南高校山岳部
659－0096　兵庫県芦屋市山手町31－3　　電話：(0797)31－0551

2006年度　年間活動報告

■　2006年度　活動

練習日は月・火・木とする。高一の田中に西川、西野、半澤、平康、中一の若宮が加わる。
5月3日　船坂谷より六甲、芦屋川へ下る歓迎山行を行った。夏山合宿までの期間、王子公園内の室内壁でよく練習する。七月の試験明けより、芦屋霊園内ランニング、筋トレを中心に行う。

■　2006年度　山行一覧

第1回	5月	日帰り	六甲　船坂谷
第2回	6月	日帰り	六甲　王子公園
第3回	8月	夏合宿	北ア　雷鳥沢から立山・剱岳
第4回	10月	日帰り	須磨アルプス　横尾山から須磨浦公園
第5回	11月	日帰り	六甲　芦屋川から魚や道
第6回	3月	春合宿	八ヶ岳　北横岳

■　2006年度　夏山合宿報告

合宿開催地：北ア　雷鳥沢定着、立山・剱岳アタック
合宿参加者：6名
主将・食料：高1　森井善夫　　装備・記録：　高1　半澤佑樹

主務・装備：高1　西野洋平　　食料・記録：　高1　平康貴資
食料・記録：高1　西川達郎　　付き添い教員：神戸謙司

8月4日（金）
入山日　雷鳥沢まで　行動記録　天候（晴れのち曇りのち晴れ）
＜6：30　阪急梅田駅集合→7：11　JR大阪発サンダーバード1号富山行き→
10：26　JR富山駅着→11：25　電鉄富山駅→12：40　立山駅着→13：00　美女平→
13：50　室堂バスターミナル着→14：20　室堂発→15：10　雷鳥平TS着
15：40　には天幕設営完了し、食当にかかる。＞

この日の夕食は鳥釜飯ご飯に、わかめスープとお茶、デザートに抹茶プリンであった。皆うまそうに食べる。
19：00　夕食終わって、テント内で明日の予定をはなす。
20：20　消灯・就寝。時間通りの行動で上出来であった。

8月5日（土）
雷鳥沢より一ノ越・立山三山縦走～大走り　行動記録　天候（晴れ）
＜6：05　TS発→7：40一ノ越→8：50　立山（雄山）頂上着9：15　雄山頂上発→
10：50　大走りへの分岐→12：10　TS着＞

4：50　に起床し朝食のとんこつラーメンとお茶を用意する。朝の準備などてきぱき速くできた。所々雪渓に足を取られつつ、ゆっくりゆっくり、おしゃべりしつつ、登る。途中、半澤が遅れ気味であったが、がんばる。雄山頂上でおまいりし、祠の裏手にすすみ、大走りへの分岐へ。大汝山を通過し冨士の折立と大走りへの分岐中間地点で、ケルンを作って大休止する。急な下りの後、またもや雪渓に出くわし、つるつるすべる。
15：00　夕食準備で、カレーライスとカルピス。またもやプリンが出てきた。
17：00夕食終了し、20：20　消灯・就寝

8月6日（日）
雷鳥沢より別乗山越・剣沢経由クロユリのコル～剣御前・室堂乗越経由～雷鳥沢　行動記録　天候（晴れ）
＜6：20　TS発→8：00　別山乗越→9：00　剣沢キャンプ場→9：40　クロユリのコル→
12：40　剣御前→13：35　別山乗越発→14：50　TS着＞

4：30　に起床し、朝食（塩コーンラーメン・お茶）の支度をする。しかし動きが鈍い。出発に時間がかかったのは、前日の行動の疲れのため。別山乗越で、すでにレーションを食べつくすものあり。何とかパワーを出そうと食べた。また、足の疲労感よりパーティーに送れるものあり。休憩間隔と時間が徐々に延びた。
クロユリのコルにて剣岳登頂を断念し、剣御前経由の稜線上を縦走することにする。稜線上の道は、冬の間の重い積雪により、下方向に向って生い茂る這い松のブッシュこぎに悩まされる。幾分傾斜のゆるい室堂乗越経由でTSへ帰る。16：00夕食（ご飯・石狩なべ・カルピス・キャロットゼリー・茶）で、うまし。
17：40食べ終わって、疲れてねむる。

8月7日（月）

下山日　雷鳥沢より室堂、大阪へ　行動記録　天候（晴れ）

＜8:10　撤収→10:00　ミクリガイケ温泉→10:40　室堂→11:40　美女平→12:33　立山駅→13:35　富山駅→14:13　JR富山駅→17:37　JR大阪着　17:50　阪急梅田駅着・解散＞

6:00　起床し、朝食（味噌コーンバターラーメン・お茶）を食べる。ミクリガイケ温泉で大休止し、立山駅にて昼食をとる。富山駅よりサンダーバードで大阪へ。電車の乗り継ぎもよく予定通りの行動であった。

■　2006年度山岳部合宿感想

「　旅　荷物　」

高1B　森井善夫

山岳部に入って初めての合宿で、いろいろと戸惑う点もあり、特にかばんの重さには驚いた。一日目はテントを組み立てたけど、あまり疲れなかった。テントを組み立てた後は、雪で遊んだり、夜中はテントの中で遊んだりと、これから山に登るテンションではなかった。

二日目、朝早くに起床し、立山に登り始めた。はじめから走ったりしてはじめからばてていたが、いろいろと話しながら歩いていたので、楽しみながら登れた。

三日目、剣岳に挑戦しようとしたが、途中まで登ったところで、剣岳に登る体力がなくなった。剣岳を登るのをあきらめて、違うコースを登り、下山することにした。木がたくさん生えていて、とても歩きにくいコースであったが、それもまた楽しめた。

富山は水もきれいで、景色もとてもきれいだった。合宿でここにいけてよかったと思う。また、機会があれば行ってみたい。

「　夏山合宿の感想　」

高1D　西野洋平

一日目は集合時間に間に合い、無事出発でき、よいスタートができたと思われます。電車の中では少しうるさくなりましたが、楽しくトランプもできました。その間は修学旅行気分だったのですが、荷物を持つと合宿にきたという実感がわきました。初日はテントを立てて終わり、雪合戦をして面白い初日でした。

二日目には四時に起床して、五時頃に飯をつくり、六時頃に出発し、立山に登りました。山頂からの景色はすばらしいものでした。先生に手ぬぐいをおごってもらいました。アホ二人組みは学業成就のお守りを買ってもらってました。また、テントに戻った後にまた雪合戦をしました。寝るときにはとても寒く、寝ることができませんでした。

三日目にはまた山に登り、足がとても痛くて、山頂に行くことができませんでした。しかし帰るときに、トトロにあえるような草木の間を抜けて、松花粉を多量に吸ったり、たくさんの傷をつくったりしましたが、楽しい三日目になりました。

「　合宿を終えて　」

高1C　西川達郎

8月4日、6時50分に阪急梅田に集合した。大阪から富山まで、特急電車で4時間、ワンマン電車で1時間、ケーブル7分、バス1時間の長旅だった。そこからキャンプ場まで40分。長旅に上り下りの坂はきつかった。　キャンプ場には、名古屋や愛媛の大学生、また親子で来ている人が多かった。僕らは夜騒ぐということで、できるだけ人から離れた場所にテントを張った。　8月5日、4時に起床し、立山に登り始めた。立山に上るには石だらけの場所を登ったりしなければならなかった。頂上に着くと先生が、学業成就のお守りを買ってくれた。

8月6日、予定では剣岳に登ることになっていたが、みんな疲れていて剣岳に登る気にはなれ

なかった。帰ってきて温泉に入る予定だったが、日焼けがしみそうでは入れなかった。

8月7日、昨日温泉に入れなかったので、入る予定になっていた。僕は入る気はなかったが、みんな入るということで、僕も断念した。しかし、1時間待ちということで、温泉には入らなかった。ゼエゼエいいながら、バスターミナルに行き、また長旅を終えて帰った。

「 合宿の反省文 」

高1B 半澤佑樹

自分の反省点は体力がなさすぎなことです。次からは体力をつけて合宿に行きたいと思う。すべてしんどかった。 朝、起きるときに一番最後に起きたこと。 焼きそばが食べたい。 テントを組み立てるのが面倒くさかった。断熱マットを持ってこなかったのがミスった。テントの下の石が痛くてぎゅうぎゅうづめにならないと寝れない状態だった。

合宿前に口内炎が二箇所できて夕食の時が厳しかった。夕食が早すぎて夜中におなかが減った。この合宿に行ってわかったことは自分は体力がないことでした。

「 2006年度 山岳部合宿感想 」

高1C 平康貴資

今回の合宿の反省点、一日目はテントを張るのに意外に時間がかかった。今度からはもっと早く正確に張ろうと思う。夜は少しうるさかったのを直したい。寝るときは涼しかったのでスリーピングバックにしかっりと入っていなかったので、深夜から明け方にかけて気温が下がり、とても寒い思いをしたので、次の日からはしっかりスリーピングバッグに入るように心がけた。

二日目に登った山では、レーションを食べる配分があまりわからなかったので、レーションがあまりすぎた点が反省点だった。足が疲れたのでもう少し練習してから登ろうと思う。

三日目は予定の時間に起床できなかった。山では足をくじいてしまったのが残念だった。

今後に向けて総括

今年度夏山合宿は参加メンバー全員が初参加であったが、合宿準備段階より計画通りに、よく協力しながらできた。合宿の計画段階では、重荷のことを考えてなるべく時間のかからない天幕場（雷鳥沢）、比較的登りやすい立山三山を選んだ。運動靴での登山となったものもいたが、雪渓歩行には軽アイゼンが必要。立山三山はコースとして良かったが、剣岳へのアタックは時間もかかり、少し欲張りすぎたか。立山と剣岳の登山日の順番を入れ変えるか、キャンプ地を剣沢に進めるのがよい。しかし、トレーニング不足であった事が最大の反省である。

文責 神戸謙司

■ 2006年度 春山合宿報告

1. はじめに

長野県の北八ヶ岳で、2泊3日で行われた今回の合宿を無事に終えることができました。甲南中高の山岳部活動にご理解をいただいております関係各位の皆様に、部員一同心より感謝しています。今回の合宿では特にスキー板とビンディング、プラスティックブーツなど用具を揃えるのに、南里先生をはじめ甲南山岳会の OB の皆様に多大な援助をいただきました。おかげ様で、思い出深い合宿となりました。誠にありがとうございました。

高校1年生、中学1年生も残雪のある山ははじめてで、山小屋宿泊、北横岳（2,480M)へのアイゼン登山、双子池までのスキー歩行と雪上テント泊、風雪とホワイトアウト体験、ピラタス山頂からスキー滑降など、多くのことが体験できました。

お互いに気配りをしたり、後輩への気遣いがあったり、協力してよい合宿になりましたことご報告します。

2. 参加メンバー

H1D 主将・装備: 西野洋平　　H1B 主務・食料: 森井善夫
H1C 記録・食料: 平康貴資　　J1D 記録・食料: 若宮康佑
付き添い教員 : 神戸謙司

3. 行動記録

日 付	行 動 記 録	行動時間
3月27日(火)	阪急梅田駅構内集合	08:00
◎(曇り)	梅田発茅野行きバス(032357661便)	08:30
◎	茅野発ピラタスロープウェイ行きJ-taxi	14:50
○(小雪)	ロープウェイ山頂行き(16:00)	16:00
○(雪)	縞枯山荘到着	16:30
3月28日(水)	縞枯山荘出発	08:10
◎(曇り)	…北横岳頂上	09:35
◎	…縞枯山荘(スキー練習)	10:50
○(晴れ)	…縞枯山荘出発	11:50
○	…双子池への林道分岐(スキー)	12:40
○	…双子池キャンプ地△	14:50
○	…テント設営完了	16:00
3月29日(木)	起床	06:00
○(小雪)	双子池キャンプ地△出発	08:50
○(強風)	…雨池峠	10:20
○(強風)	…ロープウェイ山頂駅構内(休憩)	10:45
◎(曇り)	…ロープウェイ山頂出発(スキー)	11:50
○(晴れ)	…ピラタス・スキー場着(休憩・スキー練習)	12:40
○	茅野行きバス	14:50
○	梅田行きバス	16:00
	梅田到着予定	21:50

甲南中高山岳部顧問:神戸　謙司(文責)

■ 2006年度　山岳部部員・顧問

主将:西野　洋平　(高1)　　主務:森井　善夫　(高1)
記録:西川　達郎　(高1)　　装備:半澤　佑樹　(高1)
記録:平康　貴資　(高1)　　記録:若宮　康佑　(中1)
記録:田中　僚　　(高1)　　顧問:南里章二・神戸謙司

2007年度　年間活動報告

■ 2007年度 活動

高二の西野、森井、西川、半澤、平康、中二の若宮で活動。田中の転校にともない、主将を西野、主務を森井がつとめる。高2のメンバーは文芸部にも所属し、夏は俳句甲子園の出場にともない参加は望めず、今年度の合宿は若宮と2人で行った。

■ 2007年度 山行一覧

第1回	4月	日帰り	六甲山　芦屋ロックガーデン
第2回	6月	日帰り	六甲山　王子公園室内壁
第3回	8月	夏合宿	北アルプス　剣沢から別山尾根、剱岳
第4回	11月	日帰り	六甲登山
第5回	3月	春合宿	北八ヶ岳　ピラタススキー場

■ 2007年度 夏山合宿報告

合宿開催地：北アルプス　剣沢から別山尾根、剱岳
合宿参加者：中2　若宮　康佑　　付き添い教員：神戸　謙司

8月19日　入山日：大阪天候晴れ
＜5:30 阪急武庫之荘→10:20 立山駅→12:20 美女平行きケーブル→13:40 室堂＞

阪急武庫之荘より、北陸自動車道をいく。立山駅にて、準備と昼食をして、美女平行きケーブルに乗る。室堂行きバスに乗り継ぎ、13:40 室堂より歩き始める。天候は雲があるが、よく晴れていた。風あり。雷鳥荘付近で雨がぽつぽつ降り出す。雷鳥平キャンプ場で、雷と雨（夕立）にあってずぶぬれ状態になる。この日の計画では剣沢までだが、雷を恐れてテント設営とする。15:20 食当開始し、とり釜飯を作る。

17:00 食べ終わりにて終了。

8月20日　剱岳アタック
＜4:10 TS→5:30 別山乗越→6:15 黒百合のコル→7:30 前剣→8:50 剱岳頂上 10:00 下山開始→12:00 黒百合のコル→13:10 別山乗越→14:30 TS＞

3:00 起床し、食当開始する。昨日の残りの鳥雑炊で 3:30 には準備にかかる。剱岳までの往復である。ヘッドランプ行動でひたすら登る。別山乗越で夜が開ける。黒百合のコル、黒百合は見当たらず。御前小屋より剣山荘へのルートを行く。

8:50 頂上に着く。よく晴れて後立山連峰、富士山、富山湾が見渡せる。レーションを食べゆっくり休む。フルーツを食べたかった。下山は前剣の下りがしんどかった。御前小屋でペプシコーラを飲み、雷鳥平へ下った。テントで昼寝をして、15:30 食当開始、今日はカレー。

17:30 雷鳥沢温泉にいく。

18:30 テントに戻るとひどい大雨となった。

8月21日　下山日
＜8:30 TS撤収→9:10 室堂→10:40 美女平行きバス→12:00 立山駅 19:10 阪急武庫之荘＞

昨夜寝付けずで、6:00 起床する。昨日の残りのカレーを食べ、テント撤収にかかる。昨日の雨で

テントはドロドロ状態、難儀した。地獄谷を通って、ミクリガ池への長い階段を登る。室堂の自然環境保護センターに入ってみた。

翌日8月22日は学校でテントを洗って、後片付け。

文責　若宮康佑

■　2007年度　春山合宿報告

1. はじめに

長野県の北八ヶ岳で、1泊2日ではありましたが、無事に終えることができました。甲南中高の山岳部活動にご理解をいただいております関係各位の皆様に、心より感謝しています。今回の合宿は好天に恵まれ、山スキーを練習しました。

中学2年（新中3）の若宮もプラスティックブーツでの山スキーに始めはてこずっていましたが、ゲレンデをすべるに従って慣れていったように思います。スキー板も現在主流のカービングスキーではなく、ストレートの板でしたから、ターンは難しかったことと思いますが、なかなかの素質の持ち主であったこと、ご報告します。

2. 参加メンバー

J2b 記録・食料　若宮康佑　　付き添い教員　神戸謙司

3. 行動記録

日　付	行動記録	行動時間
4月5日（土） 晴れ	阪急武庫之荘駅集合	06:00
	ピラタスロープウェイ乗り場	12:00
	ロープウェイ山頂	13:00
	五辻	13:30
	縞枯山	15:10
	縞枯山山荘	16:20
4月6日（日） 晴れ	縞枯山荘出発	07:30
	縞枯山山荘前（スキー練習）	09:00
	ピラタススキー場（スキー練習）	10:30
	ピラタススキー場出発	14:30
	阪急武庫之荘駅前解散	20:00

甲南中高山岳部顧問：神戸　謙司（文責）

■2007年度　山岳部部員・顧問

主将：西野　洋平　（高2）
記録：西川　達郎　（高2）
記録：平康　貴資　（高2）
顧問：南里　章二

主務：森井　善夫　（高2）
装備：半澤　佑樹　（高2）
記録：若宮　康佑　（中2）
顧問：神戸　謙司

甲南山岳部・山岳会の歴史

2008 年 4 月改

大正 12 年（1923 年）

旧制甲南高等学校(7年制)発足

山岳部の前身となった“遠足部”が香月慶太を中心に設立された。

大正 14 年（1925 年）

遠足部を“山岳部”と改名

部員制を採用して岩登り、アルプス登山、積雪期登山など近代登山への道に進む。

昭和初期（1926～35 年）

主に、槍、穂高、剣、後立山等北アルプスを活動の場とし、おりしも時代は、スポーツ登山の黎明期、多くの学生クライマーの輩出により、ヴァリエーション・ルートの開拓で幾多の輝かしい記録を残した。

昭和 2 年、「山岳部報告」創刊号を発刊。 以後、「部報」「部内雑誌」「時報」「山岳会通信」「山嶽寮」と変遷し、現在まで約 100 冊に至る出版物として引継がれている。

昭和 5 年、山岳部の OB 会として“甲南山岳会”が発足。

昭和 9 年、治安維持法違反容疑で山岳部の主力部員多数が検挙され部活動は一時停止された。（白亜城事件）

昭和初期の主たる登攀記録

昭和 2 年 7 月	小槍および北穂滝谷の遡行（単独行）	伊藤愿
昭和 3 年 5 月	常念～槍～立山残雪期の幕営縦走	伊藤愿　辻谷幾蔵(RCC) 今田重太郎ら
昭和 4 年 5 月	剣岳早月尾根～八ッ峰下半部	伊藤愿　西村格也
7 月	錫杖岳烏帽子岩	楠木義明　秋馬晴雄 水野健次郎　井上正憲
昭和 5 年 7 月	穂高ジャンダルム飛騨尾根（初登攀）	伊藤愿　田口一郎
昭和 6 年 3 月	白馬鑓ヶ岳南山稜（初登攀）	近藤実　田口一郎　西村雄二
	白馬小蓮華尾根（初登攀）	西村雄二　水野健次郎 多田潤也
5 月	鹿島槍ヶ岳東尾根(二ノ沢より)（初登攀）	田口一郎　西村雄二
7 月	北穂滝谷第2尾根（初登攀）	田口二郎　関集三　伊藤新一 佐山好弘
8 月	北穂滝谷第3尾根（初登攀）	田口二郎　伊藤新一
	これらの報告で滝谷の第1～4尾根の番号をつけた概念図を始めて紹介した。 この番号が現在も使われている。	
昭和 7 年 3 月	白馬南俣より牛首岳ダイレクト尾根（初登攀）	田口一郎　松野茂雄
7 月	前穂北尾根第4峰（初登攀）後に甲南ルートと呼称	近藤実　山口良夫
8 月	北穂滝谷第1尾根　A・B フェイス（初登攀）	伊藤新一　伊藤収二
	ジャンダルム第1テラス北壁（初登攀）	伊藤新一　伊藤収二
昭和 8 年 3 月	不帰岳第Ⅱ尾根（初登攀）後に甲南ルートと呼称	田口二郎　伊藤新一

4 月	鹿島槍ヶ岳東尾根(三ノ沢より)（初登攀）	田口二郎　近藤実　伊藤新一
7 月	剣岳チンネ北壁正面壁（初登攀）	伊藤収二　比企能
昭和 10 年 7 月	鹿島槍ヶ岳北壁正面壁（初登攀）	喜多豊治　植田忠七
	剣岳池ノ谷剣尾根右俣奥壁（初登攀）	奥山正雄　山口雅也

昭和 10 年代（1936～45 年）

昭和 10 年代前半までは引続き北アルプスのヴァリエーション・ルートの初登攀などに活躍するも、太平洋戦争勃発後、部活動は制約厳しく一時中断に至る。

昭和十年代の主たる登攀記録

昭和 11 年 8 月	剣岳・池ノ谷剣尾根ドーム（初登攀）	福田泰次　関暢四　赤松二郎 中村成三
昭和 12 年 3 月	杓子岳東壁（初登攀）(D 尾根)	山口雅也　福田泰次
	白馬鑓ヶ岳北山稜（初登攀）	喜多豊治　武田六郎
昭和 14 年 3 月	穂高白出沢よりジャンダルム飛騨尾根	伊藤文三　福井實
7 月	剣岳小窓尾根池ノ谷側バットレス（初登攀）	赤松二郎　小川守正　福井實
昭和 15 年 7 月	北千島ホロムシロシュムシュ島遠征	中村成三　鷲尾顕　関暢四 赤松二郎　村上武雄　福田泰次 宇尾洋介
昭和 16 年 3 月	不帰岳第1尾根（初登攀）	伊藤新一　小川守正　福井實
	鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁南稜（初登攀）	伊藤文三　佐谷健吉(浪高 OB)

昭和二十年以後の記録

昭和 21 年（'46 年）	戦後初の山岳部の部活動が道場・百丈ヶ原で、秋には穂高涸沢合宿が行われた。
昭和 22 年（'47 年）	3 月前穂北尾根を徳沢よりラッシュで登攀（小川守正、中村忠雄、奥田泰三、福井亨）、物資不足の下、戦後初の本格的積雪期登山として注目された。
昭和 25 年（'50 年）	学制改革による旧制高校の消滅、山岳部活動は一旦新制甲南高校山岳部に引継がれた。
昭和 27 年（'52 年）	甲南大学体育会山岳部発足、旧制高校山岳部の活動を継承し現在に至る。 甲南高校山岳部 OB 田口二郎、この年の日本山岳会マナスル踏査隊および翌年の第一次マナスル登山隊に参加。
昭和 32 年（'57 年）	春山合宿中、剣岳・小窓尾根にて遭難事故　福永隆一死亡 甲南山岳部唯一の死亡事故となる
昭和 39 年（'64 年）	山岳部機関誌「時報」 創立 40 周年記念号　を発行
昭和 48 年（'73 年）	カナダ・ロッキーにて初めての海外合宿(隊長：井上知三)ロブソン峰などを登頂
昭和 52 年（'77 年）	第一次キシュトワール・ヒマラヤ登山隊(隊長：南里章二)
昭和 54 年（'79 年）	第二次キシュトワール・ヒマラヤ登山隊(隊長：渋谷一正) 6,050mの無名峰に登頂、「ラルン峰」と命名
平成元年　（'89 年）	ヒマラヤ・ムスカングル遠征　関西岳連隊に宮崎哲が参加
平成 5 年　（'93 年）	アフリカ・ネパール遠征(安部康彦、西濱昌典)
平成 11 年（'99 年）	スワート・ヒンズークシ踏査(隊長：米山悦郎)"センチネル峰 5,280m登頂"

平成 12 年（'00 年）　オールド・シルクロード踏査（隊長：米山悦郎）
　　"パッキリ・ピーク（5,220m）、ボボン・ピーク（5,180m）登頂"
平成 13 年（'01 年）　機関誌「山嶽寮」山岳部創立75周年記念号を発行
平成 16 年（'04 年）　近年部員減少が続き、遂に新入部員ゼロの年が続いたが，数年ぶりに新人を迎え、再発足した。
平成19年（'07 年）　クビ・ツァンポ源流学術登山隊（同志社大学山岳部・日本山岳会関西支部共催）に谷勇輝（理工学部 4 年）が参加、クビ・カンリ 6,721mに初登頂

アルピニスムス宣言

現時我國の山岳界はその澎湃たる登山流行の大潮流の只中にあつて、大なる一飛躍をなさんとしてゐる。即ち今や、登山概念に於ける、將又、登山形式に於ける進展段階に立つてゐるのである。

山岳の客観性研究は主観内容を帯び、登山概念の主観的發展は必然的にその上層建築たる登山形式の変遷を齎らしたのである。理論形式の進展は必然的に實行形式の發展に結果したのである。登山術の概念に就いての煩些なる論争は今や存在の合理性を失つて了つた。 斯くして今や新しき概念は主観的傾向を帯び、登山形式に於ては Ohne Fuehrer の主張となったのである。

然らば又 Alleingehen に就いても、Alleingehen が登山概念の Kategorie 外なり、とは誰が断言し得るか。

遮莫、荒れ狂ふ嵐の中の幾時間、冷き岩稜、高鳴る胸、緊張の一瞬間、寒冷、寂寥の岩小屋に送る忍苦の十数日、その真摯なる態度、迸り出る若き生命の躍動、山行く男の子、これこそ我等若人の精進する姿である。

（創刊の辞に代えて　1927. 11.13）

甲南高校山岳部報告 創刊号（1927 年）より

当時の高校生のドイツ語交じりのやや難解な文章だが、甲南山岳部の活動の原点でもあるので、敢えてここに掲載した。（伊藤愿の草稿によるものといわれている）

ー 会員短信 ー

“2008 年秋の集会、2009 年総会の出欠はがきの近況”から
前半は秋の集会、後半(斜体)は総会のはがきの近況です

山本 三郎（名誉会員）

山岳部の顧問として余り力になることもなかったが、一緒に多くの山々を歩くことのできたことを感謝しています。白馬雪渓の崩落の記事を見て長い登山路で顎を出したことなど思い出すこの頃で、山岳部の顧問として豊かな甲南の思い出を持つことができたことを感謝しています。

山岳部の顧問を昭和26年甲南高校に就職した時に、和田教諭にロックガーデンのキャンプに誘われたことが縁で山岳部の大学顧問を引き受けることになりましたが、穂高キャンプや白馬のスキー合宿・春山合宿・そして立山・剱岳と日本の山々を歩くことができました。ヨーロッパでは田辺君の世話でドロミテまで見物ができ、また、スイス剣道連盟の好意でモンブラン・グランドジョラス・ツエルマットのスイスの三峰を見物、登山電車で楽しいツアーができました。山岳部で山の面白さを教えて貰ったお蔭と思います。ニュージーランドのマウントクックの美景・カナダアルプスの雄大さ、そして昨年はアメリカのグランドキャニオンと毎年ツアーに参加して、教えられることばかりですがこれからも毎年海外旅行をして山の美しさを見学したいと思っています。印度にも旅をしたいと思うこのごろです。

平井 一正（名誉会員）

本年で喜寿を迎えます。でもまだ登山は続けておりますので、何卒宜しくお願いいたします。今年 7 月末 奥穂に登りました。

甲南山岳会の長老各位には遠く及びませんが私もようやく喜寿を超えました。これからも山に打ち込んでいきたいと思っています。どうかよろしくお願いいたします。

西川 耕平（大学山岳部顧問）

4月18日の午後学部生・大学院生の奨学金の面接で総会に出席できそうにありません。

神戸 謙司（中高山岳部顧問）

08 年の夏合宿、高校生2名(中瀬・猪坂)中学生1名(若宮)と剣岳 平蔵谷より雪渓をつめて頂上に立ちました。山岳会の皆様にはいつもお世話になり、ありがとうございます。

私は19日(日)にバレーボールの大会引率がありまして、参加できません。悪しからずです。なお、18日(土)の総会には出席させていただきたく存じます。よろしくお願い申し上げます。

鈴木 敬吾（特別会員）

申し訳ありませんが、今年も予定が合わず出席できません。

旧制高校

関 集三（旧 10 理）

本年 5 月満94才になる老人です。昨年9月武田 雄三 様を通じ伊藤 愿 先輩の滞欧目録“妻に送った九十九枚の絵葉書:松方 恭子”をいただきその昔、愿さんと北穂ジャンダルムに登ったのを想い感慨一しほでした。私事で恐縮ですがですが、昨年長男一彦の死去で人生がすっかり変りました。まだ生存しているという思いです。

佐野 源一（旧 10 文）

6 月に94才になります。3ケ月毎の検診で症状はほとんど変わりませんが、腰痛であまり長く歩くことが出来ず毎日超ゆっくり、せいぜい600米位を散歩しています。キャディーに「佐野さんは足が速くて良い」ほめられた？のは何処

へやら、情けない次第です。

國府 雄次郎 （旧 12 理）
山岡先輩・山口 雅也・級友の奥山 正雄君とたて続けに亡くなり、我が身辺急に淋しくなった感があります。山岳会の集まり又急に貴重なものとなった感があります。

鷲尾 顕（旧 15 文）
体調冴えず参加出来ないのが残念です。

伊藤 文三（旧 15 文）
日常生活に差し支えない程度に動いていますが遠出は無理。ロックガーデンも銅板で参加ということになりそうです。

小川 守正（旧 17 理）
待ちに待ち楽しみにしていた山岳会の招待状有難うございます。旧制の岳友段々少なくなり淋しいですが、新しい若い人の顔見る楽しみで補って余り有りです。4月から経営学部で「危機管理の経営学」なるゼミを担当することになりました。時々部室を覗きに行きます。よろしく。

丸山 照夫（旧 25 文）
齢、八十にならんとしています。ピッケルではなくて、杖をついて夙川公園をゆっくりゆっくり歩いております。

伊藤 五介（旧 26 文）
元気にやっています。皆様によろしく。

大 学

小原 耕治（大 31 経）
幹事役ご苦労様です。小生元気に暮しております。集会で諸兄に逢うことを楽しみにしております。

阿部 純一・柏 秀樹・柳澤 正・三君の逝去が続いて淋しい限りです。気持ちを奮って頑張って行きます。慰霊祭の場所まで楽に行ける方法御指導願います。最近とみに脚力が劣化しましたので。

砂川 彰雄（大 32 経）
いつもお世話になります。

同学年であった柏 秀樹君が昨秋亡くなられました。大学二年の夏合宿が彼の初めての山行でした。剣沢合宿の後、穂高涸沢迄の縦走を頑張った思い出が今も深く残っています。久しぶりの出席ですが慰霊祭にも出席してご冥福をお祈りしたいと思います。

柳澤 正（大 32 経）
幹事役、有難うございます。先日、旧制高校山岳部展が松本であり見学の帰りに上高地から徳本峠へ行きました。体力は加齢とともに落ちています。

幹事役有難うございます。小生元気にはしておりますが、体力の衰えを感じている日々です。総会は姫路寮歌祭（今年で終了）と重なり欠席いたしますが、翌日の慰霊祭はせめて高座の滝までと考え出席させて頂きます。

柏 秀樹（大 32 経）
何時もご連絡ご案内有難うございます。只今病気加療中で入退院をくり返しております。皆々様のご健勝をお祈り申し上げます。柏代

宮本 侑（大 32 経）
体調が悪く欠席します。

体調不良のためドタキャ可能性あるのでよろしく。

行友 利安（大 32 経）
皆様にはお世話になり感謝しております。地域社会の会合が多くご無礼致し申し訳ありません。体調も年令を重ねるにつれ血圧が乱高下で注意している状況です。

鈴木 賴正（大 33 経）
いつもお世話になります。予定として小原氏・柳澤氏等と駒ケ岳ロープウェイで秋の宝剣岳。駒ケ岳を眺めようと思っています。今年の夏は暑かったのでハイキングは秋から始めようと思っています。ゴルフは下手ながら続けています。又ハイキング誘ってください。

後期高齢者になり身も心も老人になりました。ハイキング行は仲間がいなく春から始めようと思っています。ゴルフはゴールドティから打つ仲間が居り月2回平均でやっています。

麻畠 重彦（大 33 経）
いつも有難う御座います。法要日と重なりまして欠席させていただきます。

雨宮 宏光（大 33 経）
10 月 10 日立山に 12 日下山し夕方駒王に行きます。13 日駒王集会解散のあと乗鞍に登山。3,000m.を二つ考えています。・・・歩きほとんどなし・・・ですが。

田辺 潤（大 34 経）
幹事役の皆さんには大変なご苦労をおかけします。有難うございます。昨夏、膵臓を 1/3 切除手術を受けたお陰でインシュリンの出が悪くなり糖尿病と診断されてしまいました。週末ガーデニングで異常に疲れることが判りおどろいている昨今です。

会長はじめ幹事の皆様に毎度のご苦労を感謝しています。総会出席のチェックを入れましたが、当日は会社の行事が16時まであり、それから出かけるので、間に合うとは思うものの遅刻となるでしょう。申し訳ありません。変更あれば直ちに連絡します。宜しくご理解の程を。

芦田 匡平（大 35 理）
今年の日程が親爺の命日から外れているのに、お袋が他界し続いてその姉が他界するなど何かし常とは違う晩夏です。上記二人は95才に93才、葬儀に参列したその妹たちが92才に90才。これ等大正女の真似の出来ない数字に驚かされる昨今です。皆様に宜しく！

膝の具合で総会に変更する場合は貴兄に連絡します。

伊丹 弘忠（大 35 理）
幹事さんお世話になりますが、長時間の乗車は腰に負担がかかりますので、今回も欠席します。皆様によろしく。

元気にしています。一度里山でも歩きたいと思っています。

鳥居 威男（大 35 経）
体調を崩し入院中です。それまでに退院は出来ますが出席は不可能と存じます。皆様によろしくお伝え下さい。幹事様ご苦労様です。

元気にしております。今のところ登山は六甲他近郊の山々です。しかしいつまで続くか？

美田 靖夫（大 35 経）
駒王のパンフレット早速送って戴きありがとうございます。今回は不参加に致します。ご出席の皆様方によろしくお伝え下さい。

牧野 宏（大 36 経）
今春仕事をリタイヤしました。もうしばらく心身共に充電します。

伊藤 久三郎（大 36 経）
毎日病院通いをしております。

田中 孜（大 36 経）
来年、春ぐらいまで秋田で単身赴任中です。

越田 和男（大 36 理）
夏の初めに南スイス・北イタリアと遊んだのは良かったが、遊び過ぎのバチ当りか、帰路の長時間フライトと帰ってからの蒸し暑さがこたえたのか、体調すぐれず、夏中はひたすら在宅静養に終わった。涼しくなってから活動再開し

ようと待機中。

関東の山と温泉を楽しんでいます。

廣瀬 健三（大 36 経）
7月末にカムチャッカのアバチャ山に行きました。外国の山は全く違った感じで、いろいろ新しい発見・出合いも有り楽しかったです。

今年の 1 月に40数年振りにスキーらしいスキーをハチ北高原で楽しみました。(この間、貸しスキーでスイスと遠見尾根で少しだけ滑った事有るも)

藤安 賢一（大 36 経）
毎日（ほとんど）裏山の十文字山へ往復、登りは汗だくになり山の広場で体操、下りは楽チンして約 1 時間 30 分のコースをこなしています。仏舎利塔は今では日本山妙法寺となり規模は昔に比べ大きくなっています。残念ですが欠席します。

2006年1月に胃がんの摘出を開腹して行い、その後順調に元気を取り戻しつつあったのが、2009年1月に今度は膀胱の中にガンが出来これも克服して現在は元気に、十文字山へ登ることが出来るようになりました。先般は保久良山の梅林にも2日連続で行ってきました。

大関 和夫（大 37 経）
今年の夏は海へ、孫たちも大きくなり、海遊びが出来る様になりました。ケーブルに乗って山登り。八方尾根・妙高ケーブルハイキングを楽しんでいます。

スキーは、70才を過ぎても毎年うまくなれます。寒いとこに出かけスピードと急斜面の恐怖感を克服する。若さを保つ秘訣です。雪見会での関学山岳会との合同合宿も楽しいものです。3月は娘夫婦と孫で滑ってきました。

柏木 宏文（大 37 経）
昨年6月より複数ケ所転移の為、治療入院生活が続いておりますが、今の処小康状態を保っております。御一同様のご健勝心からお祈り申し上げます。　柏木 内

飯田 進（大 38 経）
元気にしております。御出席の皆様によろしく。

ご出席の皆様によろしく。

二谷 和成（大 38 経）
相変わらず月に2～3回近くの低山を歩いています。天気と体力に相談しながら集会の前後に立山と乗鞍に登る予定です。皆様に会えるのを楽しみにしています。

いつもお世話になります。体力は年々落ちていますが、月 2～3 回低山ハイキングを楽しんでます。

森本 全彦（大 39 法）
事務方の皆様、何時もありがとうございます。昨年の暮れ口腔ガンが見つかりこの2月初めからガン治療にと病院生活です。昨年から新制の方の訃報に接し寂しさいっぱいです。

元気にやっております。でも山に登る機会がめっきり減ってしまいました。淋しくもありこれが現実かとも。皆々様方のご健勝お祈り致します。鵜木君とは良く会っています。手紙出してあげて下さい。

福田 信三（大 39 理）
アメリカ旅行中のため欠席させていただきます。皆様に宜しくお伝え下さい。

山嶽寮の編集を大森さんより引き継ぐ事になりました。微力ではありますが、伝統維持に努めますので皆様のご協力をお願い致します。

武田 雄三（大 39 経）
幹事の皆さんいつも乍らご苦労様です。楽しみにしております。

幹事役の皆様に感謝、会員諸兄姉とお会い出来る事を楽しみにしております。

藤原 邦彦（大 40 経）
年を感じる事が多くなって来ました。

井本 洋（大 39 理）
まだ現役で頑張っています。山に登るとヒザが笑って困っています。段々体力の衰えを感じております。皆様によろしくお伝え下さい。

鵜木 洋（大 40 文）
西大寺の施設でなんとか元気にやっております。皆さんによろしくお伝え下さい。
(娘 代筆)

元気ですが、足元のふらつき少々あります。体力作りに励みます。皆さんによろしくお伝え下さい。

奥山 正紀（大 40 法）
元気にしております。

水渡 靖夫（大 40 営）
元気にやっています。大関邸の「花見の会」・東京 OB の方々との飲み会に出るのを楽しみにしています。

伊丹 徳行（大 40 法）
幹事さんご苦労様です。返事遅くなり申し訳ありません。6月に北海道・東北を旅行し利尻富士・十勝岳・岩木山・八甲田山を眺めてきましたが何か物足らなく、集会の帰りに上高地から少し奥へ行きたいと思っています。

柏 敏明（大 41 経）
何時もお世話を頂き有難うございます。皆様にご心配をお掛けしましたが、凍傷の傷口も塞がり、まだ長距離は歩けませんが踵歩きで歩き出しています。あとは皮膚が厚くなるのを待つのみです。年寄りの冷や水にしては少し冷たすぎました。集会は都合がつきませんので欠席させて頂きます。皆様に宜しくお伝え下さい。ご盛会を祈ります。

幹事の皆様何時もお世話を頂きありがとうございます。ご心配をお掛けしました右足の凍傷もお陰様で皮を被り、杖なしで歩けるようになりました。ただ、バランスの関係か少し歩くと左足の太股が痛くなります。
これも慣れれば治ると思います。暖かくなってきたので、トレーニングを始めねばと思っている毎日です。慰霊祭には姉といっしょに出席させて頂きます。

森岡 宏光（大 43 理）
住所変更の件、H20.5月1日に下記住所に

いつも欠席ですみません。皆様によろしくお伝え下さい。

頼富 信輔（大 43 法）
ご案内ありがとうございます。今年も参加できずに残念です。小生相変わらず四国の山をウロウロしています。四国にお越しの節は是非声をおかけ下さい。皆様のご多幸をお祈りいたします。

國分 廣昭（大 43 文）
よろしくお願い致します。

石原 浩二（大 44 理）
役員の方々にいつも感謝しております。秋の集会に合わせ立山近辺の山に登る予定です。

役員の方々に感謝しております。

赤田 友則（大 44 理）
8/30～31 富士山にトライしましたが 7.5 合目約 3,000mでリタイヤしました。高山病対策が

不足でした。残念！仕事の方は定年過ぎましたが、まだ越井木材で勤務して、社有林の管理で忙しくしています。9 月 15 日には九州日田方面で 15ha程購入交渉したりしています。

当日出勤日のため出席できません。続けて求人・社有林管理等業務について働いています。仕事で山に行ける事は有難いと思っています。国産材をどう使ってもらうかが懸案です。木材の事何かありましたらご連絡下さい。

岸田 昌雄（大 44 文）

毎度欠席で申し訳ありません。最近、岸和田を中心に泉州の秋祭りが、10 月 12 日 13 日に行われます。祭時に履くエアークッション入りの地下足袋を開発し販売しています。皆様に宜しくお伝え下さい。同期の石原君・赤田君にも宜しく。一度森君の墓参りに連れていって下さい。

矢吹 操（大 45 理）

元気でおります。週一回武庫川の河川敷をジョギングしています。

相変わらずです。元気です。ジョギングは継続しています。

南里 章二（大 45 理）

毎年のご案内ありがとうございます。いつものように学校行事と重なり、残念ながら参加できません。昨日(8/28)アラスカより帰国しました。掲示板ですでに福田さんがご報告されていて、殆んど同様の経験をしましたので、特に報告することはありません。皆様方に宜しくお伝え下さい。

いつもながら、お役目御苦労様です。3月下旬にはオーストラリアを旅してきます。今回で7回目ですが、これでオーストラリア全域の旅の完成です。

平井 幹男（大 50 文）

珍しく仕事多忙につき出席出来ません。8月にレーシック手術で近眼を解消して、メガネの生活を何十年ぶりに無くしたのは良かったのですが、少々老眼が進行して少し不便です。次回からは出席できる様がんばります。

色々とお世話有難うございます。父の容体が思わしくなく当日出席出来そうもありません。次回は出席したく思っています。皆様にも宜しくお伝え下さい。

高橋 けいこ（大 50 文）

慰霊祭にはお世話になりありがとうございました。朝倉君銘板取付にあたり同期全員で参加したかったのですが、“お通夜”から“偲ぶ会”と一番動き回っていた村田君が当日早朝の朝、母君の怪我で急に欠席、早川・田口両君はアメリカ勤務・・・結局、中澤君(総会時の決定で会員になれそうです)と私だけとなりました。残念・・・六甲の空の青さ、ロックガーデンでのワイン、芦屋でのビール、おいしかったです。ごちそうさまでした！！

いつもお世話になります。三男も社会人となり、この4月から東京です。扶養家族もいなくなり、これからはしっかり会社だけに目をむけて頑張ります。(アラ、淋しい？)

大柳 香代子（大 51 法）

現役時代以来、30 数年ぶりに北アルプス太郎平～黒部五郎岳～三俣蓮華岳の稜線を歩きました。当時はずっと雨の中の縦走で周囲は見えずでしたが、今回は連日晴れて 360 度全開。「感激！」初めて訪れた水晶岳・雲ノ平。やっぱり山遊びは超ラブリー。ﾄﾗﾝｽ・ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ﾏｳﾝﾃﾝﾚｰｽ(日本海～太平洋)がｽﾀｰﾄしていて、追い越していく「信じがたいｸﾚｲｼﾞｰ」な選手にﾜｸﾜｸしました。

中澤 章浩（大 51 文）

お誘い有難うございます。愈々好季に入る頃なのですが、当日は秋祭りの真直中、残念な

がら参加できません。その後社殿の改修工事に入り暫く動けません。どうぞ皆様に宜しく。

この度皆様のお許しを得、入会することになりました。よろしく御指導の程願い上げます。齢のせいか年々花粉症がひどくなり頭の回転が鈍り困っています。鎮守の神職をしておりますが、現在社殿の基礎改修工事中。

松本 好博（大 52 法）
いつもありがとうございます。母親の介護も含め人生の集大成へロングスパート中です。

大森 雅宏（大 53 文）
山嶽寮の編集、身辺多忙でここ 2 年は木曽福島にぎりぎりセーフでしたが、アナをあけてしまっては具合が悪く、武田会長にお願いして降板となりました。 編集は次号から福田副会長が引き継いでくださることになりました。原稿やご意見を頂いた皆様と、引き継いでくださる福田副会長にお礼申し上げます。

2 月に転居しました。ワケありでこの前まで分不相応に大きな家でしたが今度はコンパクト。山小屋と 4 人用テントくらいの違い。手を伸ばすと何でも取れるので今度のほうが快適です。
654-0141
神戸市須磨区竜が台 2-1-44-503

要 裕晶（大 55 営）
毎回お誘いいただき有難うございます。残念ながら先約のため欠席させていただきます。盛会と皆様のご健康を祈念しております。

山本 恵昭（大 56 理）
山に海に自然を楽しんでいます。

川野 幸彦（大 56 理）
毎回御連絡頂きありがとうございます。元気にやっています。山登りも年に3～4回のペースで行っています。いつか昔のように、皆さんと一緒に登ることを夢見ております。今回は私用のため参加できません。皆様によろしくお伝え下さい。

お世話になります。4月から大阪に転勤となります。色々な行事がありましたらお知らせください。

今井 啓介（大 56 経）
中高年の山登りが流行しているせいか登山の話をする機会が増え中・高・大と山岳部で過したことを告げると、驚きと共に様々な質問が投げかけられます。しかし、30年近く山から離れ何も答えられない自分がそこにいます。

在福も早や5年目を迎えようとしています。福岡にお越しの折は是非声をかけて下さい。

西岡 進（大 57 理）
今年の6月より東京へ単身赴任です。会社のメンバーより山登りにさそわれていますが・・・谷川岳にでも行ってきますかな！

東京へ単身赴任となり早や10ヶ月です。東京では同期のメンバーと大阪では渋谷さんを筆頭に飲み会で盛り上がってます。

八木 健（大 58 経）
毎回ご案内ありがとうございます。盛会を祈念申し上げます。

毎年欠席で申し訳ありません。皆様のご活躍と会の盛会を祈念申し上げます。

西名 俊英（大 61 理）
いつも案内をいただきありがとうございます。引越し、リフォームやら、ようやく一段落したところです。夏休みは、泊りがけで海水浴に家族を連れて行きましたが、雨降りで不完全燃焼でした。

藤井 琢也（大 H6 経）
いつもお便りありがとうございます。元気にしております。

橋田 豊彦（大 H12 経）
ご案内有難うございます。都合により欠席させて頂きます。宜しくお願い致します。

森本 寛之（大 H20 理工）
今年 4 月より新社会人となりました。今は 1 年間の研修で赤穂に住んでいます。2･3 年後をめどに海外駐在員になる予定で語学に励んでいます。今回は残念ながら不参加ですが、出来る限り山岳会の会合には参加しようと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

ご無沙汰しております。2009年3月より福岡県に転勤となりました。九州も沢山の山と大好きな温泉があるので週末は enjoy しようと思っています。山岳会のみなさん是非九州に来られる際はご連絡をお待ちしております。

谷 勇輝（大 H20 理工）
2007年度クビ・カンリ遠征の際は山岳会から多大なるご支援・ご協力を賜り誠にありがとうございました。2008年度は12月にタイ プラナンへ単身で約2週間のフリークライミング、3月にカナダ バンフへ約2週間のアイス・ミックスクライミングを楽しんできました。3月25日をもって無事大学を卒業し、来年度より社会人としての第一歩を踏み出します。そして“キラキラ”の山岳会1年生となるわけですがどうぞよろしくお願い致します。

新制高校

北方 龍一（新高 30）
寒いので全くサンデー毎日です。ゴルフも広野GC・神戸GC共甲南会に参加する程度です。最近は大阪甲南会でもあまり知合いにお会いしなくなって来ました。年代変りの感じです。

平井 吉夫（新高 32）
3ヶ月にわたるガン治療を終えて3月9日に退院しました。その間に岳友の皆様から頂いた御厚誼を深く感謝しています。足腰がかなり弱ってしまいましたが、一日も早く復帰してまた皆様と山登りができるよう努めます。

竹原 佑爾（新高 33）
ご案内有難うございます。皆様に宜しくお伝え下さい。元気でおります。

永島 孝男（新高 37）
総会のご盛会並びに、会の益々の御発展のお祈り申し上げます。

川村 静治（新高 40）
慰霊祭に初めて参加させていただきます。よろしくお願します。

ご遺族の皆様

横山 嘉壽子
ご案内をいただきありがとうございます。この二月に洋の七回忌を済ませました。今回は参加させていただこうと思っておりましたが、横山の母が一月に亡くなり4月19日は百ケ日の法要を予定しております。当日は良い天気でありますことを祈っております。

本田 依子
4/12･26 日も×だったのですが19日なのでよかった。楽しみに友人と参加させて頂きます。いつも御案内ありがとうございます。

乾 恵美子
緑の風が心地よい頃に、甲南山岳会の皆様に御一緒させて頂き、慰霊祭に出席させて頂きますことを楽しみにしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。最近体力が衰えてきておりますので、何かと御迷惑をかけないようがんばります。

柏 加寿子

この度は慰霊祭にお招き頂きまして、まことに有難うございます。ありがたく出席させていただきます。何かとお手数をおかけ致しますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

柳澤 美佐子

先日はお忙しいところ大勢の方にお見送りいただき感謝に絶えません。主人は毎年慰霊祭に参加させて頂いておりました。勿論今回も参加するつもりだったのに残念でなりません。折角お誘いのご案内を頂きましたが欠席させて頂きます。今後ともよろしく御指導のほどお願い申し上げます。その節は誠にありがとうございました。

阿部 陽子

夫 阿部 純一が亡くなりまして、あっという間に8ヶ月が過ぎてしまいました。何かまだ実感がつかめず落ち着かない気分でおります。生前色々とお世話になり心より感謝申し上げます。山とそのお仲間は本当に大切に思っておりましたから。当日は残念ながらはずせない用件がありまして出席できません。皆様に暮々もよろしくお伝え下さいませ。

ー 報　告 ー

秋　の 集　会

日　時　　平成 20 年(2008 年)　10月12日(日)～13日
場　所　　木曽駒文化公園内宿泊施設 「駒　王」　　長野県木曽郡日義村
参加者

雨宮　宏光	(昭 33 経)	麻畠　重彦	(昭 33 経)	鈴木　頼正	(昭 33 経)
田辺　潤	(昭 34 経)	越田　和男	(昭 36 理)	大関　和夫	(昭 37 経)
二谷　和成	(昭 38 経)	村上　與利一	(昭 39 営)	武田　雄三	(昭 39 経)
安井　正	(昭 40 経)	伊丹　徳行	(昭 40 法)	浪川　純吉	(昭 42 営)
石原　浩二	(昭 44 理)	井上　知三	(昭 48 文)	山本　眞博	(昭 48 理)
北方　龍一	(新高 30 年)				

定　時　総　会

日　時　平成21年4月18日(土)17時～

場　所　甲南大学　平生記念会館　中ホール

出席者　平井一正　(名誉会員)　神戸謙司　(中高顧問)
小川守正　(旧制高校)

小原耕治	宮本　侑	砂川彰雄	宮本　侑	鈴木頼正	雨宮宏光
田辺　潤	鳥居威男	伊丹弘忠	越田和男	廣瀬健三	藤安賢一
二谷和成	武田雄三	村上與利一	福田信三	伊丹徳行	浪川純吉
國分廣昭	石原浩二	南里章二	井上知三	平井幹男	高橋けい子
大森雅宏	豆田隆志	要　浩晶	川野幸彦	山本恵昭	谷　勇輝

議　事　　司会:福田信三

1　物故者へ黙祷

2　会長挨拶　　武田雄三

3　20年度事業報告
1)慰霊祭　村上與利一　2)木曽福島集会　井上知三
3)山嶽寮　大森雅宏　4)会計報告　山本恵昭
5)中高活動報告　神戸謙司
★全項目、全員一致で了承されました。

3　21年度事業予定
1)慰霊祭　村上與利一
H21年4月19日　6名の銘板取付け
2)木曽福島集会　井上知三
H21年10月11日(日)、12日(月)の予定です。
3)山嶽寮発行　福田信三
★全項目、全員一致で了承されました。

4　その他
1)大学新入部員獲得支援策　武田雄三
＊ポスター製作に要する費用(A0、A1サイズ印刷)約5万円を
山岳会で負担することに決定した。
2)慰霊碑ネームプレート追加製作の要否　村上與利一
＊プレートの追加の賛成者多く、検討委員会を創設。
石原浩二氏の担当が決まった。
3)その他

大学で「経営実務」“危機管理”講座を持たれた小川守正さん、
なんと御歳 86 歳とは。全員が“恐れ入りました。”

平成２０年度　会計報告

収支決算表　　平成21年3月31日

上記のとおり報告します
会計担当　山本恵昭

慰 霊 祭

日　　時　平成21年4月19日(日)

参 加 者　小原耕治　砂川彰雄　雨宮宏光　鈴木頼正　田辺　潤
芦田匡平　越田和男　廣瀬健三　二谷和成　村上與利一
武田雄三　福田信三　柏　敏明　塩崎將美　浪川純吉
國分廣昭　石原浩二　南里章二　井上知三　大森雅宏
山本恵昭　川村静治

高校より　中瀬 翔太(高 2)　若宮 康祐(高 1)

ご遺族の方々　柏 加寿子 様　本田 依子 様　乾 恵美子 様

本年度物故者の方々　（銘板取付け）

山岡 静三郎	【昭和 11 旧理】	奥山 正雄	【昭和 12 旧文】
小泉 省三	【昭和 19 旧理】	阿部 純一	【昭和 31 経】
柏　秀 樹	【昭和 32 経】	柳澤　正	【昭和 32 経】

編集後記

突然、編集のご指名がかかり驚きましたが、前任者・大森さんの協力により何とかまとめることが出来ました。昨年は諸先輩の訃報に悲しみましたが、その方々への追悼文の中で山男の友情が今も昔も変わらぬことを知り、又涙してしまいました。原稿集めの折には、特に普段お付合いのない先輩方に無理を申し上げてしまったり、大失敗もありました。深くお詫び申し上げますと共に、寛大なお気持ちに感謝いたします。最後に、次号に向けて、早めの原稿をお寄せいただくようお願いいたします。

原稿宛先　山嶽寮編集担当　　福 田 信 三

山嶽寮　第64号
甲 南 山 岳 会
神戸市東灘区岡本8-9-1 甲南大学内
2009年 （平成21年 ）10月
編集人　福 田 信 三
印刷　カツヤマ印刷